
双銃の歌姫

霜月ラース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双銃の歌姫

【Nコード】

N84730

【作者名】

霜月ラース

【あらすじ】

アサギウォーズの終結。

戦艦良綱の特攻を阻止して魔界を救ったアサギは、紆余曲折の末に、人間に戻ることに成功する。

だが、そのために失ったものは決して小さくはなくて――。

朝霧アサギの新しい魔界生活が、今、始まる。

T r a c k ー 0 『 A s a g i G o F i g h t ！ ！ 』 (前書き)

処女作です。

至らぬ点、不自然な点などが多数あるでしょうが、どうかよろしくお願いします。

Track 0『Asagi Go Fight !!』

朝霧アサギ。

ある人物の陰謀によって1度は殺害され、プリニーと呼ばれるペングインのぬいぐるみに酷似した姿の最下級悪魔に転生した、17歳の少女。

魔神エトナの下で丁稚奉公にその身をやつし、その後、MHKによって開催された主人公争奪戦『アサギウォーズ』に参戦。

見事優勝を果たしたものの、自棄を起こした対戦相手が巨大宇宙戦艦『良綱』を特攻させたことによって大会は滅茶苦茶に。

自らも特攻をかけ、良綱の防御フィールドの小さな穴を突くことで良綱を落とし、事態を収めたアサギだったが……。

「……ふう。ここはいいたい、どこらへんッスかね……」

驚くべきことに、生還していた。

死後に転生できたことといい、普段幸が薄い反動なのか、妙なところで悪運が強い。

「……とりあえず、ここを出るッスか」

どこかの森に落ちたらしく、周囲にあるのは木々ばかり。碌に視界も利かない。

エトナの城は大きいし、エトナ自身も有名なため、誰かに聞けばすぐに戻れるだろう。

アサギはそう樂觀視していたが……。

彼女は知らなかった。

アサギウォーズが開催される少し前に起こった事件で、何があったのかを……。

＊

森の中を彷徨うこと十数分。1つの人影を発見する。

ベリーロングのピンクの髪に、長いリボンをした少女。

「お！　ちょうどいいッス。おーいッス！」

とりあえず道を聞こう。そう思い、気楽に声をかけたアサギだったが……。

「? 黒い、プリニー……」

少女は駆け寄ってくるアサギの姿を確認すると――いきなり、斧を振りかぶった!

「!! んなあああ!!!?」

咄嗟に横に転がって避けると同時に、斧の刃が空を切り裂いて地面に深々と突き刺さる。

「い、いきなり何するツスかああ!!!?」

アサギの抗議は当然のもののだが、少女はそんなアサギをギリと睨みつける。

「てんめエ……!」

よくも王子サマのお宝盗撮ブロマイドにラクガキなんぞしてくれたなあああ!!!!」

外見に似合わない粗暴な怒鳴り声と共に、再び斧を振り回す!

「何のことツスかああああ!!!?」

当然、アサギには身に覚えが無い。なにしろ、彼女とは初対面なのだから。

にも拘らずこうなったのは、他に原因があった。

それは、アサギウォーズの前に起こった、魔神のパンツ盗難事件。

その事件の最中に、黒幕が作ったプリニー隊のコピーたちが、魔界の各地で好き放題に悪戯をしまくっていたのだ。

つまり、真犯人はそのニセプリニーたちなのだが……。

「バックレんな！ 犯人が黒いプリニーだってのは分かってんだよ！！！」

アサギにとっての不幸は、自身が黒いプリニーだったことと、ニセプリニーたちが白黒のモノクロカラーだったこと。

間違われても無理はない。ないのだが――。

「……いい加減に、しろッス！」

そんな濡れ衣を被る義理は無い。

腹部に提げた鞆からショットガンを取り出し、構えた――。

＊

「……ふう。やれやれッス」

襲ってくる少女を返り討ちで気絶させたところで、アサギは一息

つく。

思いのほか戦闘が派手になってしまい、周囲は木々がへし折れたり、クレーターが出来ていたり、かなりの惨状となっている。

「……とりあえず、逃げるッスかね」

ここに長くいても、碌なことになりそうにない。

こんな森からはさっさと出るべきだろう。

そう思い、足を動かそうとしたが――。

「……何の騒ぎかと思って来てみれば」

「……敵影、発見」

少し、戦闘に時間をかけすぎてしまったらしい。

声のした方を振り返ると、ショートカットの金髪の少女が2人、立っていた。

一方は緑、一方は赤を基調とした服を着ているのだが――2人とも、明らかに機嫌が悪そうに見える。

（……いや々な予感がするッス……）

そして、その予感ハ的中する。

「フフフ……。プリニーの癖にお風呂覗くなんていい度胸してるじ

やない……」

「……原稿……台無……!」

2人が手にした短い杖の先端から、それぞれ緑と赤の光の刃が伸びる。

「またツスかあああ!?!」

——その後、2人の魔法剣士を退けたアサギは無事、森を抜けるのだが――

「あ! お前、よくもボクの盆栽をキズモノにしてくれたな!」

「ここでもツスか!?!」

「ブーケガルニの天気予報! 黒いプリニーを中心に血の雨が降るでしょう!?!」

「局地的過ぎるツスよ!?! つか予報じゃなくて宣告ツス!?!」

「見つけたど！ この畑荒らし……！」

「だから、あたしじゃないッス！」

「やっかましいど！ 肥やし漬けにして喰ってやるどー！ー！！！」

「そんな死に方だけは嫌ッスー！ー！！！」

「ほほう……。よくノコノコと私の前に顔を出せたものだな。
カモン！ バクチーDX！！」

「ボクバクチー。ボクバクチー。マジヨラム、アイシテル」

「変な戦車キターー！ッス！！？」

「おお。噂の黒いプリニーやないか」

「出すトコに出せば結構な銭になるよって。――往生せえや！」

「人身売買反対ッス！！」

「ヒッヒッヒ……。またプレゼントを盗みに来たのかい……。？」

「クックック……。だったらとびっきりの悪夢をプレゼントしてあげるよ……。？」

「悪夢は間に合ってるッスよー！」

「ほーら、怖くないからこっちに来るニャンよー」

「……後ろにあるプリニーサイズの檻は何ッスか」

「……バレたならしょうがないコン！　こうなったら腕づくコンニャン！」

「……とりあえず、語尾は統一しろッス！」

「今度こそ逃がさないアルよ……。おとなしく食べられるヨロシ！」

「食べ……。ッ。あたしはおいしくないッスよ！？」

「そのときはフカヒレが食べるから、モーマンタイ無問題ネ！」

「問題ありまくりッスよ！」

「お師匠さまのお尻にストロー突っ込んでプウプウしたの、ユーデスネー？」

「どんな変態プレイッスかそれは！？ あたしにそんな趣味はねーッスー！！」

「いつか、ワタシがやろーと思ってたのに！！」

「いろいろ待てえええッスー！！」

「カラシナちゃんに悪戯したプリニーにや、キツ目のお仕置きが必要ですなあ！」

「……妻子持ちだろ、兄貴……」

「……コ、コメントに困るッス……」

「よくも貴重な食材を台無しにしてくれたの……！ ハラワタをぶち撒けい！！」

『Let's Cooking Battle』

「変形ロボオオオッス!!?　つかクッキングバトルって何ッスか!?!」

「おや?　まだキグルミが残っていたのですか」

「……きぐるみ?　それってどういう——」

「失敗作はきちんと処分!　これ、エコロジーの心得なりいい!」

「失敗さ——……って、お前が犯人ッスかあああ!!!!」

「ンフフフ。最近黒いプリニーが大漁ねえ〜ん」

「この展開はまさか……ッス」

「さあ!　おとなしく伝説のGスイーツの材料におなりなさ〜い!」

「やっぱり!　つか、魔界の食生活はどうなってるッスか——!」

「ハァーハッハッハー！ 見つけたぞ！ この身の程知らずのプリニーめが！！」

「……あゝ。今度は何ッスか？」

「って待てコラァ！！ なんだその投げやりな態度は！」

「……いい加減、疲れたんッス。つか、おめさもプリニーじゃないッスか」

「……このオレ様を怒らせるとはいい度胸だ。——喰らえ魔王玉アァァ！！！」

「んなあああ！！？」

同じプリニーなのにこの差は何ッスか！？ 不公平ッス——！！」

行く先々で、いろんな連中に襲われた。

違うと言っているのに、どうして魔界の住人は人の話を聞かないのか。

「はあ……。もう、疲れたッス……」

逃げ続けているうちに、いつの間にやら再び森の中に迷い込んでしまっていた。

すっかり夜も更けてほとんど視界が利かないうえ、最初の森と違って湿地帯であるため足場も悪い。

気を付けないと沼に嵌まり込んでお陀仏だろう。

「ん……？ あれは……」

魔界特有の真紅の月が照らす中を進んでいると、石造りの建物が目に入った。

「……とりあえず、あそこで休むッスか……」

できれば布団で眠りたいところだが、この際、贅沢は言ってもらえない。

ジメジメした湿地のど真ん中で休むよりは遥かにマシだろう。

そう思い、紅い月明かりを頼りに、一夜の寝床を求めて足を進めた。

——だが——

「我が眠りを妨げる者は誰じゃあああああ！！？」

「んあああッ！？ 何事ッスかあああああッ！！？」

この日最後の大勝負が、そこで待ち受けていた。

＊

「はあ……！ はあ……！ はあ……！」

超ド級の戦いに巻き込まれたアサギだったが、なんとか生き延びることに成功していた。

だが、連戦に次ぐ連戦で手持ちの銃火器は全て弾切れを起こし、体力も精神力も、既に限界に達していた。

「バカなッ！？ 邪神たる我がこのような輩に！？」

倒れ伏すのは、開いた巨大な神像から上半身のみを顕現させた、4本の腕を持つ青灰色の巨人。

本人曰く、不幸を紡ぐ邪神『ドウルヴァルキー』。

「うむむ……不覚なり！」

4本の腕にそれぞれ3本の剣と、何故か1本の大根を持っており、それらを支えにしながら頭を起こし、アサギのほうに向き直る。

——いつもならその大根にツツコミを入れるところだが……今のアサギに、そんな余裕は無い。

「……それにしても貴様、毎夜召喚しおって、いったいどういうつもりだ？」

邪神としては、当然の疑問。

なにしろ、毎夜召喚されるのが実に100年近くも続いており、しかも

「召喚されてみれば、誰もおらぬ……。ちょっと寂しい我の気持ちになってみよ！」

これである。見た目と違って意外と繊細らしい。

——それにしても、100年近くも毎晩毎晩ピンポンダッシュみたいな召喚に応えるとは、律儀な邪神もいたものである。

——だが、そのとき——

アサギの頭の中で、何かが、ぷちりと切れた——！

「もうやだー！！　もうやだああああッー！！！」

「ぬおっ！？」

突然、大声で叫び始めたアサギに、邪神も思わず怯む。

「なんでッ！ どいつも！ こいつも！ どいつも！ こいつもッ！
あたしの話を聞いてくれないんッスかああああッ！！！」

今まで溜まっていたものを全て吐き出す勢いで、力の限り叫び――

「あたしじゃないって！ 言ってるのにいいい！！ うええええええんッ！！！」

――とうとう、泣き出してしまった。

邪神からすれば当然の疑問であっても、アサギにとっては身に覚えの無いことで。

心身ともに疲れきって張り詰めていたものが、ついに限界を超えてしまったのだ。

「な、なにも泣かんでもよかろうが……？」

まさか泣き出すとは思ってもみなかったので、邪神としては困惑するばかり。

――とはいえ、いつまでもこうしているわけにはいかない。

「ええい！ わかった！ 我が悪かった！
詫びに不幸をくれてやるから泣き止まぬか！」

「これ以上あたしを不幸にしてどうするつもりッスかああああッ
……！」

思いつきり逆効果である。

というか、誰だってそんなものは要らない。

「だ、だったらほれ、誰か不幸にしてやりたいヤツはおらんか？」

誰かに呪いでも掛けてやろう、とでもいうのだろうか。

邪神らしいと言うべきか、傍迷惑な奴と言うべきか。

——なんにせよ、そんな申し出を受けるつもりはない。

「いらねーッス……！」

他人を蹴落とすようなことしたって、あたしの望みが叶うわけじゃないッスし……」

それは、先のアサギウォーズで『黒杉あさぎ』と相対したことで
気付いたこと。

視点が変わることで分かることもある。

そういう意味では、アサギウォーズに参加した意義はあったし、

あの時発破を掛けてくれたフロンには本当に感謝している。

「――ほほう。望みとは？」

決まっている。主人公になること。

――だが、今は――

「……当面は、人間に戻ることにッス……」

結局、優勝の件は有耶無耶になってしまっただろうし、あんな都合のいい大会が次もある保障は無い。

それなら、今は人間に戻ることを優先しよう。

改めて主人公を目指すにしても、いろんな意味で魔界最底辺のプリニーの身では、できないことも多いのだから。

（……とはいえ、いつになることやらッス……）

プリニーにされた者が元の姿に戻る為には、その罪科に応じた財貨を積まねばならないのだが……。

プリニーの平均月収は1ヘルなうえ、そもそも雇い主の魔神エトナの支払いは現物支給のイワシ1匹という鬼畜ぶり。

本当に、いつになることやら。

先行きの見えなさに気が重くなり、また泣きたくなってきたところ――

「……ふむ。専門外じゃが、まあ良からう！」

「……ふえ？」

思いもしない返答に、思わず出掛かった涙が引込み、顔を上げる。

「で、できるんッスか？」

「はん！ 我は邪神よ。その程度のことなら造作もないわ！」

誇らしげに首肯すると、床に突き立てていた3本の剣十大根を抜いて、体勢を立て直す。

「専門外ゆえ、ちょこつと対価を貰うことになるがな」

そう言いながら3本の剣十大根を器用にくるくる回して逆手に持ち替えると、それぞれに膨大な魔力を込め始めた。

「た、対価って……？」

なにやら、やる気満々になっているところに水を差すようで悪いが、その“対価”次第では断らないといけない。

魂をよこせ、とか言われたら本末転倒である。

「なあーに。記憶を一掴み分くらい貰うだけよ」

「アンタの手スゲエでかいッスよ!!?」

何でもない事であるかのようにサラッと云ってくれるが、いったいどれだけ持っていくつもりなのか。

そもそも、対価に記憶を貰うと言われても、ハイそうですかとは言えない。

自分にだって、大切な思い出の1つや2つ――

「では行くぞ! ドルバ! ドドルバ!! ドウルヴアルキイイイ!!!」

「ちょ! 待……!!」

まだ了承してない! と止める間もなく、アサギの周囲に3本の剣十大根を突き立てる。

同時にアサギの足元に大きな魔法陣が展開され、そこから溢れ出す極光がアサギの身体を包み込む――!

(だから! なんで!!)

魔界の住人はどういつもこいつも人の話を聞かないんッスかあああああ!!!!)

最早3度目になるその思いを最後に、アサギの意識はぷつぷつと途切れた。

＊

Track 0 『Asagi Go Fight !!』 END

＊

おまけ 『懺悔』

アサギ「フロンさ……。あたし、フロンさに謝らなければいけないことがあるッス」

フロン「なんですかアサギさん？ 改まって……」

アサギ「あれはアサギウォーズ最後の難関……シャイニングロードのことッス」

アサギ「あそこは本当に苦労したッス……」

落とされてはやり直し、落とされてはやり直し、落とされてはやり直し、

復活の杭まで後一步、と言うところでまた落とされて……」

アサギ「さんざん苦労してボスまで辿り着いて、いざラスボス戦！
というところで

バッテリーが……」

フロン「それは……ご愁傷様です」

アサギ「問題はその後、再開したときなんツスけど……」

フロン「ふむふむ」

アサギ「ついカッとなって、あきらめ爺屋に……」

フロン「よりによってわたしが捕まってる時にですか!？」

いちばん諦めちゃダメなときじゃないですかッ!!？」

アサギ「マジごめんなさいッス!!!」

※アサギウォーズ初プレイ時の実話。

Track-0『Asagi Go Fight!!』(後書き)

霜月ラースです。

まだプロログですが、いかがだったでしょうか？

かなり遅筆なので、区切りのいいところまでストックを書き溜めてから、それを少しずつ投稿するようになりたいと思っています。

更新が遅く不定期になると思いますが、これからどうかよろしく願います。

I n t r o 『S a b a t 』 (前書き)

※『S a b a t 』.. 『ファントム・キングダム』の魔王城のB G M

サブタイトルはアニソンやゲーソン、あるいはゲームのB G Mなどのタイトルから付けようと思っています。

タイトルや歌詞の一部を、たまに元ネタにする程度でしかありませんが。

Intro『Sabat』

「う……ん……」

翌朝、1人の少女が目を覚ます。

左側の前髪を髪留めで軽く束ねた、ミディアムの黒髪。

ツリ目がちだがどこかあどけない、ぱっちりとした黒い瞳。

黒のキャミソールに、同色のホットパンツとロングブーツ。

袖と裾とフードの縁から襟にかけて、黒のフェイクファーをあしらった白のコート。

そして、腰のベルトに提げた2挺の拳銃。

「ここ……は……。あたしは……！？」

身体を起こそうとして——手足が動かないことに気付く。

見れば、身体のラインを強調するような独特な縛り方で拘束されていた。

「んなッ！？ な、なにこれ！？」

一瞬で眠気が覚める。

胸を強調するような形で上半身を縛っていたり、お腹のところ
で縄が菱形を作っていたりと――いわゆる、亀甲縛りと言うヤツであ
る。

両手は後ろ手に縛られ、両足も膝と足首で縛られてしまっている
ので、立ち上がることもできない。

「こ、の……！ ……んッ……！」

なんとか抜け出そうと手足に力を込め、身を振るが――びくとも
しない。

緩むどころか、もがけばもがくほど逆に身体に縄が食い込んでく
る。

「……はあ……。……よっ、と」

仕方なくもがくのをやめ、とりあえず、上体を起こす。

――もがくうちに変な気分になってきたのは気のせい。断じて。

ともかく、どうしてこういうことになっているのか。

とりあえず、昨日のことを思い出そうとして――気付く。

（あ……。れ……。？）

――思い出せない。

慌てて頭を振ってもう1度思い出そうとしてみるが、やはり思い出せない。

昨日どころか、それより以前——昔のことが、全く思い出せない。
まるで、真っ白な空白になっているかのよう。

「——……ッ！」

なにか、得も知れない焦燥感に駆られる。

（お、落ち着いて。あたし、あたしは——）

その焦燥感をごまかすように、意識の世界の中で、何も見えない空白の空間を手探りで彷徨う。

そして、わずかに掴み取る。

——朝霧アサギ。——これは、自分の名前。

——17歳。——自分の年齢。

——マジカルバレット。——自分の必殺技。

さらに模索を続けたのだが——結局、自分のことで思い出せたのはこれだけだった。

「……はあ……」

嫌でも溜息が出てくる。

目覚めた直後に縛りプレイ。そのうえ記憶まで無いなんて、これはいったい何の冗談だろうか。

自分の名前を思い出せたことが、せめてもの救いだろうが。

それに、どうやら一般常識などの基本的な知識も残っているようだ。

そういう点は安心してもいいのかもしれないが――

――今の状況は、まったく安心できない。

どうやら、ここは何かの遺跡か、廃墟のような場所らしい。

すぐ近くには巨大な顔のような石像があり、その上部に不規則に張り巡らされた、蜘蛛の糸のような無数の太い糸には、これまた無数の頭蓋骨がぶら下がっていた。

それはまるで、冷たい石の巨木に髑髏という名の実が鈴なりになっているようで――。

……あまり、長居をしたい場所ではない。

とにかく、縛られているのを何とかしなければ。

何故か武器は取り上げられていないのだが、銃では縄を切ること
はできない。

何か、刃物みたいな物はないのか。

そう思って辺りを見回していると――。

「「ヨイシヨ！　ヨイシヨ！　ヨイシヨ！」」

部屋の奥にある通路の向こうから、3人の小さな女の子が力を合
わせて、何かの道具入れらしき長い箱を抱えながらやってきた。

3人とも幼いながらかなり露出の多い格好をしており、後ろの2
人は何かの獣の頭蓋骨をヘルメットのように被っている。

骨メットのせいで分かりづらいが、3人とも特徴的な紅い三白眼
のそっくりな顔立ちをしているあたり、三つ子だろうか。

「起キタカ。ニンゲンノ女」

先頭の、骨メットの代わりに小さなりボンをつけた、肩口で切り
そろえた黒髪の女の子が声を掛けてくる。

「……えーっと……誰？」

とりあえず、聞いてみると

「チリ！」

「パウ！」

「ダー！」

先頭から順に元気よく返事が返ってくる。

「あ、あたしはアサギっていうんだけど……ここどこ？」

「邪神ドウルヴァルキー様ノ神殿ダ」

リーダー格と思しきチリが答える後ろで、パウとダーの2人が、箱から取り出した燭台らしき物を立てたり、床に何かの模様を描き始めている。

何をしているのか知らないが、それはこの際どうでもいい。

「ねえ。この縄、切ってくれない？」

彼女たちは長い槍を持ってきている。縄を切るのには十分な物だ。

だが――

「ダメダ」

アサギの期待に反して、あっさり断られた。

「な、なんで!?!」

「オマエ生贄。ダカラダメ」

「……はい?」

何か、ものすごく不穏当な単語を聞いた気がする。

「……いけにえ?」

聞き返すと、チリは首肯する。

「ニンゲンノ女、生贄に捧ゲル。邪神様、キット喜ブ」

「ちょっと待てえええええ!!!!」

犯人はこいつらか!

邪神崇拜とか生贄とか、冗談じゃない。

頭上にある無数の頭蓋骨は、今までの犠牲者の物だとも言うの
だろうか。

記憶が無いために、どうしてこんな事態になってしまったのかま
ったく分からないが、こんな理不尽極まりない仕打ちを甘んじて受
け入れるわけにはいかない。

「なんであたしが生贄にされなきゃならないのよ! だいたい何よ

この縛り方はあ!!」

身体をばたつかせながら叫ぶと、チリはどこからか1冊の本を取り出した。

「コレニ描イテアッタ」

打ち捨てられていたのを拾ったのだろう。薄汚れ、湿気でふやけたそれは――

どう見てもエロ雑誌。

「子供がそういうの見ちゃいけません!」

いったいどのバカだ。子供の目に付くところにあんな物を捨てた奴は。

――いや、そんなことはどうでもいいのだ。

というか、それどころではない。

とにかく、なんとかしなければいけない。

こんな、わけも分からないまま上の髑髏の仲間入りなんかしたくない。わけが分かったとしても御免こうむる。

だが――

「チリ! 準備デキタ!」

「生贄！ 生贄！」

無情にも、時間は待ってくれなかった。

床に描かれた魔法陣。

その周囲に規則的に配置された、燭台や髑髏などの禍々しい小道具の数々。

そして中央には、人1人が乗せられそうな台座が1つ。

——どう見ても生贄の祭壇である。

「ワカッタ。今行ク」

チリが床にあった縄を拾って引っ張ると、足首を縛る縄に繋がっていたそれによって、アサギも引っ張られる。

「ちよ！ こら！ 放せ！ ほどけえええ！！」

何とか抵抗しようとするものの、手足を縛られた状態では如何ともし難く、自分よりも小さなチリにズルズルと引っ張られて行く。

一方、骨メットの姉妹2人はテンションが上がってきたのか、槍を掲げると、高らかに呪文を唱え始めた。

「ドルバ！ ドドルバ！ ドルヴァルキーー！！」

「邪神ヨ 邪神ヨ 蘇レー！！」

「い、いいいいやああああッ！！！」

声をあげ、必死に身を振るが、意味を成さない。

チリが持つ縄に引っ張られ、なすすべなく祭壇に向けてズルズルと引きずられていく。

——そのとき。

「——秘剣・闇夜斬り！」

黒い影が走り、アサギを引っ張る縄を切断した。

「アウッ！？」

突然縄を切られたことで、チリは前のめりに転んでしまう。

「「チリ！」」

慌てて妹2人が駆け寄ってきてチリを助け起こす。

「ダイジョウブ。チリ、ガマンスル」

だが——

「ア！」

振り返ってみたときには、そこにアサギの姿はなかった。

慌てて辺りを見回すが、あるのは地面に虚しく転がる縄の切れ端のみ。

いったい何処に——と思った、そのとき。

「待て待て待てえ〜〜い！」

暑苦しい声と共に、上半身裸の男が剣を片手に飛び込んできた。

「少女の悲鳴が届くとき、剣持つ不死鳥が舞い降りるッ！」

次元を断ち切る熱き魂！ 不死鳥のターメリック、華麗に見参！

「！！」

大仰な身振りでポーズをつけたまでは良かったのだが……。

「「「……………」」」

実に痛い沈黙が場に流れる。

「…………あれ？」

さすがに男——ターメリックもおかしいと気付く。

まあ、単にタイミングを外したというか、出遅れたただけなのだが。

要するに、お呼びでない。

——いや。必ずしも、そうだとばかりは言えなかったかもしれないが。

それが、彼にとって良いこととは限らないが。

「ニンゲンノ女、逃ゲタ。代ワリ、オマエ!!」

「のわああああッ!!?」

＊

「た、助かった」

沼地の森入り口付近の街道。

脱出したアサギは、ようやく一息ついていた。

「ま、ここまで逃げれば追っ手も来まいて」

傍に立つ、飄々とした雰囲気纏う陣羽織の侍が背後の森を見やる。

あるとき縄を切り、ここまで連れ出してくれたのが彼だった。

ここまで逃げる途中、彼が空中でジャンプや方向転換したりしたのには驚いたが。

「ともかく、ありがと。……えつと……」

「おっと。まだ名乗っておらなんだな。——セージじゃ」

「ん。あたしはアサギ。朝霧アサギ。——改めて、ありがと」

「なに、礼には及ばんよ」

アサギの礼に自然体な笑みで返す。

「しかし、この魔界に人間の女人とは珍しいのう」

「ま、魔界!？」

続けて言われた言葉に驚くが、同時に、それをすんなり受け入れている自分に気付く。

そういえば、ここまで来る途中、明らかに不自然な動植物を多数見ているのに、自分は気にしていなかった。

——それは、『経験』によるもの。

記憶が消えても、経験は消えない。

無意識下に刻まれたその『経験』の御蔭で、普通なら信じないであろう事実を、アサギは自然に受け入れることが出来ていた。

「何だ、知らなかったのか？ 偶然迷い込んだクチか？」

「いや、それが……」

気がついたときにはあの場所にいたこと、昔のことを思い出せないことを話す。

初対面の相手にあっさり話してしまうのは、相手を信用しているからではなく、単にアサギに警戒心が無いだけといえる。

それ故に騙されやすく、1度は殺されたことすらあったのだが。

「ふむ、記憶喪失か。それはまた、難儀ようだ」

とはいえ、一介の剣士であるセージにそれを治してやることはできない。

「じゃが今は、分からぬ昔のことより、これからのことを考えるべきではないか？」

できるのは、こうして先のことを考えるよう促すことぐらい。

「確かに……。でも、どうしよう……」

建設的な意見ではあるが、記憶が無い故に、これからの指針も定まらない。

何処に行けばいいのかが分からない。――要するに、行く当てがない。

思い悩むアサギを見てセージもそのことに気付き、もうひとつのできる事に思い至る。

「そうさのう。なんなら――」

「あのー。すみません」

言いかけて、第三者の声に遮られる。

見ると、巨大な斧――刀身だけでも本人より大きい――を持った、緑のショートカットの少女がいた。

童顔だが、上半身は胸を隠すように巻いた太いベルトのみと、何気に露出度が高い。

肝心の胸は無いが。

「……誰？」

「あ。わたしはウコンって言います。少しモノを尋ねたいんですが」

「何？」

「わたし、家出した兄を探してるんですけど、それらしい人を見ませんでしたか？　ここに向かったらしいという話を聞いたんですが……」

「そう言われてもな……」

それらしい人と言われても、それだけでは答えようがない。

「家出ねー。『家業なんか継ぎたくない。都会に出るんだ！』ってヤツ？」

アサギ自身は覚えてないが、田舎から都会に出稼ぎに出ていた経験のためか、自然と口をついて出る。

「いえ……。酢豚のパイナップルが嫌だと言って……」

「……は？」

ウコンが言い難そうにして口にしたそれを聞いて、一瞬、思考が止まる。

「……ある意味、たいした奴とも言えるの」

アサギとセージの脳裏に浮かぶのはとんでもないワガママ小僧。

——だが、ウコンの言ったことは正確ではない。

毎日三食が“酢豚のパイナップル”——酢豚ですらない——であることに耐えかねて家を出たのだから、それをワガママや食わず嫌いと言うのは酷というものだろう。

もっとも、アサギとセージがそこまで気付くことはないのだが。

「……どのみち、あたしがここで会った男はこの人だけだし」

「……さすがに、斯様な小僧に心当たりはないのう」

セージの脳裏には一瞬、アサギと会う少し前にはぐれた相方の顔が浮かんだが、仇討ちに燃えるあの男とは同一人物とは思えなかった。

今どうしてるだろうかとも思ったが、向こうも一端の戦士だし、大丈夫だろうと思考から切って捨てる。

そもそも、お互い甘ったれた関係ではない。自分の身は自分で守る、そんな間柄だ。

「そうですか……入れ違ったんですかね……」

ガツクリと肩を落とすウコン。

……もし、彼女が違う説明をしていれば——否、アサギが異なる問いをしていれば結果は違っただろうが、そんなことは彼女は知る由もない。

と、そこへ——

——グウウウ……——

ちょうど会話が途切れたタイミングで、お腹が鳴る音が響いた。

「う……。そ、そういえば起きてから何も食べてない……」

アサギは恥ずかしげに顔を逸らしつつ、お腹を押さえる。

起きて早々縛られてるは、記憶が無いは、生贄にされそうになるはと、災難続きで意識していなかったが、気付いてみれば日はかなり高い。

昼ではないが、とっくに朝食の時間は過ぎているだろう。

「ちようどいいです。コレ、どうぞ」

言いながら、ウコンが1つの弁当箱を差し出してくる。

何が『ちようどいい』のか知らないが、ご飯をくれるというのなら断る理由は無い。

「いいの？」

「はい」

「じゃあ、いただきます——」

蓋を開けて、思わず言葉が止まる。

緑。

野菜ばかり使っているのか、ものの見事に緑一色の弁当だった。
……ベジタリアンなのだろうか。

「どうしました？」

「う、ううん。何でもない」

くれるという物に対して、とやかく言えようはずもない。

気を取り直して、一口食べる。

「……おいしい」

見た目に反して、味は良かった。

そうになると、後は早い。

もともと空腹だったこともあって、あっというまに平らげた。

「……ほれ」

そこに、セージが竹筒の水筒とコップを差し出してくる。

「ん。ありがとう」

受け取り、食後のお茶を一服するアサギを横目に、

「しかし、変わった弁当じゃったのう。見たことのない野菜が随分使われとったが……」

何となく気になったことを口にしたただけだったが――

「え？　野菜なんて高価な物使ってませんよ？　全部その辺の雑草です」

「ブーーーーー！！！！」

盛大に霧を吹いた。無論、アサギが。

「ちょ！　汚いですよ！？」

「な……ゴホッ……ゴホッ……なんて物食わせるのよ！！」

むせ返りながら詰め寄る。

まあ、食べた物が雑草とか言われれば当然の反応だが。

「え!?! ひょっとしてお腹痛かったりします!?!」

「い、いや。……それは平気だけど」

どこかズレた反応に思わず氣勢を削がれるが

「良かった! じゃあ成功ですね!」

「『成功』!?! 今『成功』って言ったね!?! あたしは実験台か
あああ!?!」

再びヒートアップ。

胸倉——襟首が無いので、胸のベルト——を掴んでガクガク揺さぶる。

「だ、大丈夫、ですよ。わ、わたしも、いつも雑草、食べてるけど、
元気、ですし」

「い、いつもって……」

そのあまりな食生活に、アサギの手も止まる。

「むう。さすがに斯様な食生活は感心せんな」

「だって、お金ありませんし」

非常にシンプル且つ説得力のある理由である。

「成る程。……ときにアサギよ。お主、先立つ物はあるのか？」

いきなり話を振られたアサギは一瞬きよんとするが、みるみるうちに顔が青くなる。

「そ、そういえば……」

記憶は無いが、自分が一文無しだと確信できる。

そして、それは自分も雑草生活を余儀なくされる羽目になることを意味している。

「やはりか」

セージは小さく頷くと

「……もし、お主らさえ良ければ、働き口を紹介してやってもよいが」

そう切り出した。

「ふえ？」

「はい？」

言われた2人は思わずきよんとする。

「少し前まで『魔界百花殿』で用心棒をしておってな。多少は顔が利く」

「……えーっと。百花殿って、サキュバスとかがお酒出すお店ですよね」

ウコンの問いに首肯する。

「あそこの主はのんびりしとるが、話の分かる奴よ。……腹さえ空かせておらなければ」

あと、満月の夜も危険らしいな。と思い出す。

多少の不安はあるが、主——カラシナの暴走にさえ気をつけておけば、そう悪い場所ではない。

カラシナは普段は温厚だし、天然に見えて部下の扱いも巧い。すぐに暴力に訴える他の悪魔の下に行くより余程ましだろう。

……暴走すると、本当に手に負えなくなるのだが。

その辺は、しっかりと言い含めておけばいいだろう。

「どうする？ 強制はせんよ」

自然と、アサギとウコンは顔を見合わせる。

「……この際、贅沢は言ってられないし。助かるといえば助かるけど……」

「どうして、そこまでしてくれるんですか？」

2人に見れば、当然の疑問。初対面なのだから。

しかし、セージは何でもないことかのように飄々とした笑みを浮かべた。

「なに。2輪の花が枯れ散るかもしれんというのは、男子として捨て置けん。

それだけのことよ」

＊

魔界百花殿。

百花の名に恥じない、見事な万年桜の木々が咲き誇る東洋風の豪華な遊郭。

その威容にアサギとウコンは思わず気圧されたものだが、セージが門番の豚と2／＼3言葉を交わしただけで、あっさりとおこの主であるカラシナとの面会が通った。

「——と、言うわけよ」

「……はむはむ……そうですか」

褐色の肌に、ウェーブの掛かったベリーロングの薄紫の髪の少女。

整ったスタイルに、かなり露出度の高い踊り子の衣装を身に纏っているのだが――

「……はむはむ……ごつくん」

童顔におっとりした口調。加えてお菓子を両手で口に運ぶその仕草のために、セクシーというより可愛らしい印象を受ける。

「……はむはむ……わかりました。……はむはむ……ウチで面倒見ますね♪」

新しいお菓子を食べ始めながら、あっさりと了承する。

それにしても、喋るか食べるかどちらかにできないものなのだろうか。

せつかく色よい返事が貰えたので、そこに水を差すような真似はしないが。

ここに来るまでに、セージから『満月の夜と空腹時には暴走する』と聞いていたこともある。

それよりも、今は――

「……えーっと。とりあえず、何をしたら……?」

ここで働くのはいいとして、何をするのかは重要な問題。

接客をしろと言われても、それは無理な話である。性格的に。

「大丈夫ですよ……はむはむ……」

ここのお仕事は、お客様のお相手だけじゃないですから……はむはむ……」

アサギの懸念を見透かしたかのように、微笑みながら答えを返してくる。

おっとりしているように見えても、人材活用のプロフェッショナルと評されるのは伊達ではない。

とりあえず酔っ払いの相手をさせられずには済みそうだと、密かに胸を撫で下ろすと

「……はむはむ……そうですね……はむはむ……」

お菓子を食べながら、じっと2人の顔を見つめてくる。

「な、何……?」

その妙なプレッシャーに思わず2人が気圧されると

「……はむはむ……ごっくん。……よし、決めました〜!」

それだけで見極めたのか、カラシナは花のように微笑んだ。

*

* To Be Next Track

Intro『Sabat』（後書き）

アサギの東北弁についてですが、記憶と一緒に忘れたことにしてください。

作者が東北弁がよく分からない、というのがあります。

加えて、エセ東北弁で妥協しても、コミカルな場面ならともかく、真面目な場面ではどうしても締まらなくなってしまうのです。

なので、いっそのこと使わないことにしました。

「経験は消えない」などと書いておきながらこの有様なのは、完全に、自分の力量不足ゆえの失態です。

たいへん申し訳ありませんが、どうかご容赦願います。

Track 1 『アサギ・メタモルフォーゼ』 - A (前書き)

Track 1ということで、サブタイトルはアサギのテーマソングから。

『Asagi MY Love!!』と迷ったけれど、結局、こちらにしました。

A, B, Cの3つに分けて、1つずつ投稿していこうと思います。

Track 1『アサギ・メタモルフォーゼ』—A

「——それでは、我らがアイドル『アサギ』のファーストシングル

『A s a g i M Y L o v e ！！』お聴きください！！」

『『アーサーギー！ アーサーギー！！』』

「みんなあゝ！ あつりがと~~~~！！！！」

桜の舞い散る百花殿の庭に新設されたステージ。

その舞台の上で、アサギは百花殿の歌姫^{アイドル}として歌を披露していた。

最初『歌を歌ってみないか』と言われたときは、正直どうかと思
ったものだが——

観衆を前に、桜の舞い散る中バックダンサーを従えて歌うという
のには、なんだか妙な高揚を感じる。

ウコンもやってみたいと言っていたが、歌詞や振り付けを覚える
のは結構大変な訳で。

あんなに巨大な斧を振り回せるのだからスタミナは問題ないのだが、リズムに合わせて軽快に身体を動かすことには向いてないらしい。

斧使用とガンⅡカタ使用の違いだろうか。

そもそも、歌詞が覚えられない時点で論外なのだが。

そのウコンは厨房で料理の腕を振るっており、そちらも大変好評を得ている。

ここでしっかり稼いで、両親を呼ぶことも視野に入れているらしい。

それは結構なことなのだが……兄探しはいいのだろうか？

やる気になっているところに水を差すのもどうかと思ったので、そこは指摘せずにおいたが。

それにしても、こうしてみるとカラシナの人材活用の手腕には舌を巻く。

伊達に、この百花殿の主をしていないらしい。

「……ふう」

出番を終えたアサギは、舞台裏で一息つく。

ここに来てから、既に1ヶ月。

ここでの生活にもすっかり慣れていた。

最初のうちは居心地の悪さを感じていたものだが。

カラシナの暴走も2度ほど体験していたりする。

飢えた獣のように豹変し、俊敏に動き回るうえに大砲みたいな魔力砲を口からぶっ放したりするものだから、確かに手に負えない。

アレを抑えるのは本当に大変だった。

もっとも、その騒動が周りに馴染むきっかけになったようなものだから、一概に悪いとは言えないのかもしれない。

……今後も、最低でも満月になる度にアレがあると思うと軽く鬱になるが。

しかし、そのことを抜きにしても、ここはいい所だと思う。

ここを紹介してくれたセージには感謝してもし足りない。

そのセージは、自分たちを紹介した後、早々に修行の旅の続きに出てしまったのだが。

相方をあの沼地の森に置いてきたと言うのだから、仕方がないが。

無事に合流できていればいいのだが。

思えば、世話になりっぱなしのうえに迷惑まで掛けている。

今度会うことがあったなら、ちゃんと御礼をしよう。

——具体的にどうすればいいのかは、よく分からないけれど。

「アサギちゃん！ アンコールよー！」

「！ はーい！」

ともあれ、今はやるべきことをしよう。

手早く容姿を整えると、もう一仕事するべく舞台に向かった。

＊

「ふう〜……」

所変わって、大浴場。

本日の自分の仕事を終え、その日の汗を流して疲れを癒すべく、アサギはゆっくり湯船に浸かっていた。

初めてこの大浴場を見たときはその広さに驚いたが、ここは人数がかなり多いので、むしろ広いのは当然といえた。

——男湯と女湯の間に『男の娘湯』があつたのにはツツコまざるを得なかったが。

かけ流しの温泉でいつでも入れるというのも、この百花殿に適している。

何しろ、基本深夜営業とはいえ、日中に働く者たちだっているのだ。

役割やシフトによって各々休める時間が異なるのだから、清掃中以外、いつでも使えるというのは大きい。

かくいうアサギのシフトは、基本的に昼から夜にかけて。

昼間に練習や打ち合わせなどを行い、夕方から夜が本番という流れとなっている。

出勤時間とか無いので、普通に朝起きて夜寝る生活ができるのはありがたい。

夕方から始まるコンサートは客寄せの意味もあるらしく、そのあたり、なかなかの強かであると言える。

同時に、深夜組みにとっては目覚まし代わりにもなっているらしい。

周りには、その深夜組みであるサキュバスやリリスたちが入浴している。

接客を担当する彼女たちは仕事前に身綺麗にする必要があり、そこには、まさにこの世の桃源郷とも呼ぶべき光景が広がっていた。

何しろ、典型的な悪魔の角・羽・尻尾を持つとはいえ、素晴らしいスタイルのいい絶世の美女・美少女たちが、一糸纏わぬ姿でそこにいるのだから。

無論、アサギは女の子であり、同姓の裸に興奮するような性癖は持ち合わせていないのだが――。

ふと、視線が下に向く。

そこにあるのは“貧”ではないが“巨”でもない、ザ・普通。

普通なのだが、周りが素晴らしい巨峰の持ち主ばかりなので、どうしても劣っているような気がして仕方がない。

既に見慣れた光景だとはいえ、こうして気になることは時々ある。

――もつとも、最近は成長しているような気がしなくもないのだが。

心当たりも無くは――

「そおれっ！」

「わひゃあああ!!?」

不意に、リリスの1人が後ろからアサギの胸を鷲掴みにし、そのまま揉みしだき始めた。

「ちょ! また……! やめ……!」

「ほくれほれ。ここか? ここがええのんか?」

——心当たりは、これだったりする。

皆でお風呂に入っていると、時々、こういうことがある。

無論、これは単なる悪ふざけであり、そのことは分かっているのだが……。

何しろ、相手はサキュバスやリリスなのだ。

そっち方面のテクニクが、色々と洒落にならない。

「! ちょ……! 待……!」

と、そこでするりと手を離す。

そのまま「じゃ〜ね〜」と軽く手を振りながら離れていった。

「も、もう……!」

軽くジト目で見送る。

相手がリリースでまだ良かった。夜魔の上位種だけあって、加減と
いうものを心得ているらしい。

サキュバスの中には加減を知らないのもいるようで、“一瞬意識
を飛ばされる”ことがあるから困る。

いや、こういうことをやられること自体が困るのだが。

変な気分が収まるまで、上がるに上がれなくなるから。

「ううゝ……。疲れてるのに……」

とはいえ、これで“成長”しているような気がするあたり、複雑
な気分だった。

＊

風呂から上がり、手荷物片手に部屋に向かう途中、ウコンと出会
う。

「あ、アサギさん」

彼女も入浴道具一式を持っているあたり、今から風呂に行くのだ
ろう。

「少し遅いみたいだけど、どうしたの？」

役割が異なるとはいえ、アサギとウコンのシフトは基本的に同じなので大抵一緒になるのだが、今日はウコンが遅かったようだ。

「ああ。ちよつと珍しい食材が届いたんで、いろいろ試してたんです」

「珍しい？」

「はい。『マノアカズ』って所から――って、そうだ」

そこで、何かを思い出したように顔を上げる。

「アサギさん、その『マノアカズ』に行ったことがあります？」

「え？」

突然の問いに、アサギは思わず目をぱちくりさせる。

「そう言われても……昔のことは覚えてないし」

「あ。いえ、最近ですけど」

ウコンが言い直すが、やはりアサギには身に覚えが無いので、首を横に振る。

「つか、だいたい一緒にいるでしょ。仕事するとき以外」

「あー……。そーですよねえ……」

そもそも、どうしてそんなことを聞いてくるのか。

そこを指摘すると。

「送り主の名前が『アサギ』だったんですよ」

とのこと。

たしかに少し驚いたが――

「……ただの偶然じゃない？」

「……そうですね」

結局、そこに行き着いた。

「平行世界の自分、なんてオチじゃあるまいし」

「あはは。それこそまさか、ですよ」

それから軽く雑談を交わした後、それぞれの向かう先に別れた。

――さて、今日はもう疲れたし、さっさと部屋に戻って寝るとしよう。

だが、そう思って歩みを進めた矢先に、アサギは不審な人影を発見した。

——いや、“人”というのは正しくない。

それを一言で言い表すなら『ペンギン』。ただし、茶色い。

プリニーと呼ばれる、この魔界で最下級に位置する悪魔。

ここ百花殿でも雑用として多くのプリニーが働いているが、茶色の個体など見たことが無い。

辺りを陰しい顔で落ち着き無く見回したりと、その挙動は極めて不審。

「……なそこ……ウコン……たら……いる……て」

何やらブツブツと呟き始めた。

ウコンと聞こえたが、目的は彼女だろうか？

相手に見つからないよう、通路の陰に身を隠して耳を済ませる。

「……すぐ、に……ぞ……の姿……オ……こ……の……目に……や……きづけ……なければ……！」

残念ながら、ほとんど聞き取れなかったが——

(……『すぐに……その姿を……この目に……焼き付けなければ』……?)

断片的に耳が拾った単語がアサギの脳内で組み立てられ——直後、1つの理論が展開された。

・ウコンは今、入浴中

←

・すぐに、その姿をこの目に焼き付けなければ（？）

←

・OK覗き魔、地獄へ堕ちろ。

一分の隙もない三段論法。

速やかに導き出された結論のもと、アサギは手荷物を置くと、両腰に提げた拳銃に手を伸ばした——。

——ちなみに、正確な内容は

「こんな所でウコンが働いているなんて」

「今すぐ、兄さんが行くぞ」

「この姿でもオレの声はそのままだ」

「真面目に話せば早く気付けるはず」

「急がなければ……！」

——だったのだが、アサギがそれを知る由は無かった。

＊

ボロ雑巾のようになった茶色いプリニーを引きずりながら、アサギは正門に向かう。

風呂に入っただけだというのに、余計な汗をかいてしまった。

以前にも、ここで働くモーブの1匹が覗き未遂を起こしたことがある。

――次の日の賄いにやけに豚肉が多かったのは、ただの偶然だと信じたい。

……一部のモーブ達が涙を流しながら料理の前で手を合わせていたように見えたのも、きっと気のせい。

環境が環境だけに、そういうことが起こっても不思議はない。

が、1人の女の子として、それを許容するつもりは無い。

正門横に備え付けられている勝手口から外に出ると、プリニーを

持ち上げ――

「そおーれッ！」

思いつきり、ブン投げた。

それは見事な放物線を描いて飛んでいき――地面に落ちると同時に、ドカンと音を立てて爆発した。

投げるな危険。

プリニーのキャッチコピーの1つである。

「これでよし、と」

エロプリニー（アサギ主観）にとどめを刺し、パンパンと手を打ち払いながら戻ろうとして――それに気付いた。

正門のすぐ前、うつ伏せに倒れた男。

ボロボロに薄汚れたベージュの長ズボンに、前後逆に被った帽子。

帽子の上に乗せるように付けている骨の板みたいな物は、溶接工が使うフェイスガードだろうか。

スパナやドライバーなどを大量に腰に提げているあたり、技術屋だろう。

背中には、荷物を満載していると分かる大きなナップサック。

見るからに行き倒れと分かる。

本来なら、こういうのを相手にするのは門番のモーブの仕事なのだが、その姿が見当たらない。

侵入者があった時点で予想はついていたが、やはりサボっているのだろう。

プリニーもそうだが、モーブ族も大概いい加減である。

「おい。生きてる？」

とりあえず、しゃがみこんで声をかけてみると――

――グウウウウウ……

腹の虫が返事をした。

「……は、腹減った……」

続けて出た搾り出すような声に、アサギは内心ため息をついた。

やっぱり、自分が運ばなければいけないんだろうな、と。

「……立てる？」

その他諸々のこともいろいろと諦めて、アサギは手を差し出した。

＊

「くはー！ 食った食ったー！」

「分かってたけどね……ちったあ遠慮しろ！！！」

厨房深夜組みの賄いに混ぜてもらったのだが、行き倒れのお約束というべきか、1人でがつり5人前は平らげてくれた。それも大盛りで。

そのくせ、ニンジンやカボチャを選び分けて残しているのはどういうことだ。行き倒れの癖に好き嫌いするな。

ただでさえ部外者を連れ込んで注目を集めている自分の身にもなっ
てほしい。

ほとんどシフトが合わない深夜の、それも厨房担当の連中とは付き合
いが少ないため、こう目立つと居心地が悪い。

「いやー。悪い悪い」

実に満ち足りたような笑顔で言われても説得力は無い。

「はあ……。もういいけど」

溜息と一緒に幸せが逃げていきそうだ。

賄いとはいえ、これだけ盛大に食われたら後でしつかりと請求が来るのだろう。当然、自分に。

何が悲しくて見ず知らずのおっさんに飯を奢らなきゃいけないのか。

もっとも、あのとき見て見ぬ振りをする、という選択肢は無かったわけだが。

自分もあてが無いところを拾ってもらった身だし、そもそも、そこまで薄情じゃない。

ともかく、自分もお茶でも貰うとしよう。

そう思って席を立つと――

「ん？　ちょっと待った」

呼び止められる。

「お嬢ちゃん、二挺拳銃トゥーハンドかい？」

男の視線は、腰に提げられた銃に向けられている。

「……そうだけど？」

普段、コートコートの陰に隠れていて見えにくいそれに今気付いたのだ

ろうが、それがどうかしたのだろうか。

ここ魔界では、武器を常備していても別に不自然でもなんでもないのだが。

怪訝な顔をするアサギをよそに、

「そうかい。……そうだな——」

男はそう言いながら、傍に置いていたナップサックの中を漁り始める。そして——

「世話になった札だ。受け取ってくれや」

『No. 11』と書かれた1つのケースを取り出すと、それをアサギに差し出した。

——この後、技術屋の悪癖とも言うべき、説明という名の長い自慢が始まったのだが、それはいい加減に疲れているアサギにとって、非常に迷惑な行為であったことは言うまでも無い。

*

翌日。

「アサギさん、どーしたんですか？」

予想通り、きっちり届いた請求書に軽くへこんでいると、ルームメイトのウコンが“上”からひよいと覗き込んできた。

一緒に入ったということで、アサギとウコンは相部屋となっていた。

もったも、従業員のほとんどが相部屋なので、アサギたちだけがこうだと言うわけではない。

百花殿は東洋風の造りをしているが、従業員がすごす部屋は洋風であり、2段ベッドもある。

アサギが下のベッドに腰を下ろし、ウコンが上から身を乗り出している。

どちらがどちらを使っているかは、見てのとおり。

「……1人でこんなに食べたんですか？ 太——まさか!？」

違う、と言う前にウコンは顔色を変えてアサギに指を突きつけた。

——正確にはアサギの胸に。

「近年稀に見る急成長はそれが秘密ですか!？
食べた分が胸に行く体質ですかッ!!？」

「違うわああッ！」

ツツコミを入れつつも、ちょっとだけ嬉しかったのはここだけの話。

自分からでは分かりづらいのだが、他人からはそう見えるのだろうか。

ともかく、昨晚のことをかいつまんで説明する。

昨日は、部屋に戻ったときには既にウコンは寝ていたので、話してなかったのだ。

——コンフリーと名乗った技術屋の男はあの後、夜であるにもかかわらず再び旅立って行った。

「縁があつたらまた会おうや」と言い残して。

最初は驚いたが、魔界の住人は基本的に夜のほうが調子がいいのだと思い出したので、そのまま送り出した。

普通に日中に活動する連中も多いのだが、これは単に個人の生活リズムの違いなのだろう。

一ヶ所に留まるつもりは無いらしいが——またどこかで行き倒れたりしなければいいのだが。

「……はあ。そんなことが」

言いながら、ウコンは上のベッドから降り、

「で、何貰ったんですか？」

既に興味は、コンフリーから譲られた物に向いているらしい。

ベッドの上にほうっていたケースを膝の上に載せ、開けると――

「……銃、ですね」

純白と漆黒のオートマティック。2つの拳銃が鎮座していた。

それぞれ、グリップ上部の側面に「? ?」の刻印が刻まれている。

静かに蒼く発光しているそれは、既に『契約』が済んでいる証。

契約と言っても、小指の先をちよつとだけ切って、そこから滲み出た血を刻印部分に付けたただけだが。

――ただ、契約した瞬間、頭の中にノイズと共に白黒の砂嵐のようなイメージが流れ込んできたのは少しきつかったが。

「白いのがATA、黒いのがDTD――だって」

言いながら、一緒に入っていた紙片をウコンに渡す。

ごく丁寧に、簡単な説明書まで付属していたのだ。

――説明書があるのなら、昨晚わざわざ長々と説明する必要なん

が無かったじゃないかと思う。

その説明書に黙って目を通したウコンは

「……なんか、中途半端じゃないですか？ コレ」

開口一番、辛辣な一言で切ってくれた。

どうも、彼女は遠慮なくモノを言う傾向がある。とつくに慣れたものだが。

「特に“非殺傷”ってところが半端ですよ。

殺したり傷つけたりせずにダメージだけ与えるっていうんでしょうけど……。

でもそれなら、ノーダメージで麻痺させたり眠らせたりするほうが、よっぽど人道的ですよね。

むしろ、痛みだけ与えるってかえって残酷じゃないですか？ 下手したら拷問とかに使えますよ？」

歯に衣着せぬというより、単に、思ったことを考え無しにぼんぼん口に出しているだけなのだろうが。

「あ、あはは……。この銃のシリーズまるごと全否定ね……」

コンフリー曰く、ATA／DTDは『不殺銃』と呼ばれる、非殺傷の特性を持つ魔銃のシリーズの1つらしい。

——別名『偽りの不殺銃』。

他に何かあるのかまでは聞いてないが、ケースのナンバーや刻印から推察するに、最低でもあと10種類が存在していることになる。

「まあ、便利だからいいんだけど。あたしとしては」

正鵠を得ているだけにフォローのしようが無いが、少なくとも今までの銃よりは遥かに便利なことも事実。

それに、ATA／DTDは非殺傷の特性とは別に、2つの固有の能力を備えているのだから。

——それらも含めて、中途半端なことも事実だが。

「アサギさんがそう言うならいいですけど。どーせ、もうわたしには使えませんし」

「……もしかして、使ってみたかった？」

不殺銃は契約した“使い手”にしか使えないし、ひとたび契約すると、使い手が死ぬまで変更が利かない。

ウコンと自分とでは、結局自分が使うことになったはずだが、それでも、見てないところで勝手に契約したのは悪かったかもしれない。

「あ、いえ！　そういう意味じゃないですよ！？」

しかし、アサギのそんな懸念を払うように、ウコンは慌てて訂正する。

自分でも少し言い方が悪かったと思っただけ。

「——うん。ならいいんだ」

ああして慌てているのを見ると、やっぱりウコンはいい子なのだと思う。

——いい友達ができたと思う。

恥ずかしいから、口には出さないが。

説明書を返してもらって、ケースから取り出した純白と漆黒の銃を、今までの“相棒”の代わりにホルスターに収める。

——昔の記憶が無いとはいえ、確かにこの手に馴染んでいた“相棒”から乗り換えるのに、思うところが無かったわけではない。

しかし、今の職場を考えるとATA／DTDが持つ“非殺傷”が占めるウェイトは大きい。

それに、汎用性の高いその能力の特性に惹かれたのも事実。

後ろ髪を引かれながらも、結局、乗り換えることに決めて『契約』を行った。

——これが他の人なら、徹底して愛用品にこだわるか、迷わず
っぱり切り替えるかのどちらかなのだろうか。

我ながら、中途半端だと思う。

「——ああ。そっか」

この器用貧乏で半端な銃は、案外、自分にお似合いなのかもしれ
ない。

「?……どうかしました?」

「——あ。ううん。なんでもない」

つい口に出してしまったせいでウコンから怪訝な目で見られてしま
った。

——切り替えないと。

「——さてと!」

立ち上がり、軽く背を伸ばす。

「仕事までまだ時間あるし。ちょっと“コレ”の練習してくる。ウ
コンは?」

腰に提げたATAを軽く叩いてみせながら聞くと

「そーですね……。今は特にやること無いですし、わたしも一緒し
ていいですか?」

実際に使うところ見たいですし、と続ける。

アサギとしても、異論は無い。

「OK。それじゃ、行こっか？」

＊

To Be Continued

＊

Track 1『アサギ・メタモルフォーゼ』—A（後書き）

百花殿に大浴場があることはゲーム本編でも述べられていますが、それが温泉だというのは独自解釈です。

単に、そうでないと管理がかなり大変だと思ったので。

半オリキャラ1号のコンフリー。

外見はファントム・キングダム汎用キャラのメカニックです。ただ、直接的な出番はあまり無いと思いますが……。

本編に似たようなキャラでマジヨラムがいますが、彼女はどうか見ても『不殺銃』なんて物を造るようなタイプとは思えませんでしたし。

マジヨラムは派手に暴走するマッドサイエンティストタイプというのが自分の見解です。

それに対し、コンフリーは変なところで自分のこだわり固執する職人タイプです。

ちなみに、マジヨラムは別の形での登場が確定しています。

そして、ようやく登場したオリジナル武器のATA／DTDですが、今はまだ日常パートなので、活躍はもう少しだけ先になります。詳しくは次話以降をお待ちください。

次回の投稿は来週を予定しています。では。

Track 1 『アサギ・メタモルフォーゼ』 - B (前書き)

サブタイトルをこれにしたのは、今回のイベントが理由だったりします。

それではどうぞ。

Track 1『アサギ・メタモルフォーゼ』— B

「はむはむ……アサギさくん」

午後になり、チアダンサーと一緒に練習に勤しむアサギの元にカラシナが訪れた。

相変わらずお菓子を食べ歩いているが、それとは別に紙袋を片手に提げている。

「カラシナさん？ どうしたんっすか？」

礼儀作法の類に疎いアサギも、さすがに百花殿の主であるカラシナに対しては、一応“さん”付けで呼んでいるのだが、当人と話すときは、何故か語尾に『っす』が付いてしまう。

自分でも普通に敬語を使うべきではないかと思うのだが、妙に身体に染み付いているようで、どうしても自然とそうなってしまう。

こんな、半端に卑屈な言動が身に染み付いているなんて、以前の自分はいったい何をしていたのか。プリニーじゃあるまいし。

それはともかく、用件を聞くと――

「ステージ衣装っすか？」

今までは、いつもの服装でコンサートに出ていたのだが、今度からは専用の衣装に着替えてやるらしい。

「はむはむ……はい。——まあ、お仕事着みたいな物ですね。
はむはむ……いつまでも私服のままお仕事するわけにはいきませ
んから……はむはむ」

確かに一理ある。

直接接客するわけではないとはいえ、客商売である以上、私服で客の前に出るのは好ましくないだろう。

しかし、客の反応次第では、歌ごとに衣装を変える予定もあると
か無いとか。

——なんだか、やけに話が大きくなってきたような気がする。本
職のアイドルでもないのに。

それで、渡されたのが——

「これっすか……」

袖が無く、肩が出るデザインになっている、薄手で丈の長い白の
上着——これはいい。

問題はその下に着る黒の上下なのだが……それを一言で表すなら、
セパレートの水着。

上下共に、かなり薄いうえにぴっちりしていて、身体のラインがはつきりと出てしまうことは間違いない。

特に問題なのが、後ろがほとんど隠せていないこと。

上はまだともかく、下はヤバイ。かなり。

いちおう、上着を着れば隠すことはできるのだが。

ロングブーツはほぼそのままなので、全体として、今までの私服をシャープで軽快な感じにアレンジしたデザインになっているのだろう。

ご丁寧に、銃を収める為のホルスターも、このデザインに合わせた物が用意してある。

だが、コレを客が大勢いる前で着なきゃならないのか。

少し激しく動いただけで、絶対に見える。

いったいどんな羞恥プレイだ。

アサギとて女の子である。

人前で、しかも壇上で肌を晒すのは恥ずかしいに決まっている。

——しかし、だ。

選択肢は“はい”か“YES”しかないわけで。

ただでさえ世話になっている上に、わざわざ衣装まで用意してもらっているのだから、それを断れるはずがない。

「……えっと、まあ、やってみるっす」

羞恥で頬を紅く染めながらも、覚悟を決めて、アサギは了承の意を伝えた。

「はい。……はむはむ……それじゃ、着替えましょうか♪」

「……ふえ？」

一瞬、思考が止まり、思わずカラシナの顔を見つめ返してしまう。

「……今っすか？」

「はい♪」

即答。それもどこか楽しそうに。

だが、そう言われても困る。

確かに覚悟は決めたけど、それは後での話であって、今じゃない。

「……えーっと、まだ心の準備が――」

言いかけて、気付く。

いつの間にか、周りをチアダンサーたちに包囲されていることに。

——全員、実に楽しそうな顔をしている。

「はむはむ……。それじゃ、お願いしますね♪」

カラシナのその言葉が合図となって——

「ちょ！ ストツ……。！！ 自分でや……。！ い〜〜や〜〜〜」

女の子たちの楽しそうな声に埋もれながら、アサギの悲鳴が響き渡った——。

＊

夜、舞台裏——

「……。お、終わったあ……。！」

本日のコンサートが終わったアサギは、舞台裏の椅子の上で上着を抱えてへたり込んでいた。

実に大盛況だった。今までで1番だったかもしれない。

初めてのステージ衣装も、客から大いに好評だったようだ。

——だが、その代償としていろいろと大事なものを失った気がする。

ステップやターンの際に上着が翻るたびにあからさまな歓声が上がるし。

最後に演出で上着を脱ぎ捨てたときには、ボルテージの上がり具合がもう大変なことになっていた。

——というか、あいつらは本当に歌を聴いていたのか。

正直、泣きたくなってくる。……というか、既に半泣きなのだが。

舞台の上ではもうほとんどヤケになってやっていたが、それが終わると恥ずかしさが込みあがってくる。

顔が真っ赤なのが自分でも分かる。——舞台の上では顔や声に出さないようにしていたつもりだが。

——ちなみに、アサギは顔や声に出してないつもりだったが、実際には全然隠せておらず、恥ずかしさを我慢しながら歌うその様相が余計に客を萌えさせていたことを、ここに記しておく。

「アサギさん」

紅くなった顔を押さえていると、聞きなれた声が耳に届いて顔を上げる。

「ウコン？」

エプロン姿のウコンが、アサギにジュースを差し出していた。

「どーぞ」

「あ……うん。ありがとう」

受け取り、口に運ぶ。

いろんな意味で火照った身体に冷えたジュースが心地よく染み渡り、いくばくか気持ちいが落ち着いた。

——ひょっとして、気遣ってくれたのだろうか？

いつも考え無しに思ったことを口にする彼女にしては意外な気がして、思わずその顔を見つめてしまう。

「？　　どうかしました？」

「う、ううん。別に……」

さっきまでとは別の意味で顔が熱くなった気がして、顔を背けてしまう。

が、そこで気付く。

「って、厨房は？」

まだ終わりではないはずだが……。

「サボって来ちゃいました！」

腰に両手を当て、無い胸を張りながらすっぱり言ってくれた。

「そんなはつきりと……。なんでまた……」

後で怒られるのは分かりきっているのに。

「だって、アサギさんが新しい衣装で歌うって聞いたから、見てみたかったんです」

「ふえ？」

言われたことに一瞬呆け、直後、また顔が熱くなってきて慌ててジューズを内に含む。

どうして彼女はこうもド直球でものを言うのか。良くも悪くも。

「アサギさん？　なんか変ですよ？」

「な、なんでもないから……!」

うまく言えないが、なんだか恥ずかしい。

ウコンからの追求をアサギがごまかしていると――

「あらあら。仲良しさんですね……。はむはむ」

「ふえっ!？」

「はわっ!？」

いつの間にか、カラシナが2人の近くに立っていた。

「か、カラシナさん!？」

「い、いつの間に……」

驚く2人を前に

「はむはむ……ウコンさんが、アサギさんにジュース渡す前ぐらいでしょうか」

いつもの調子でなんでもないかのように言ってくれた。

「はむはむ……仲良しさんでしたので……はむはむ……」

少しだけ空気を読んで気配を消してみました。……はむはむ」

のんびりと続けてくれるが、約1名はそれどころではない。

ジュースを渡す前から近くにいたということは、全部聞かれていたということだから。ここの主に。

「あ、あ、あのですね……えっと……」

サボりの現行犯、ウコンは慌てるが、言い訳のしようが無い。

「えっと……ウコンは別に悪気があったわけじゃ……」

アサギも悪い気がして、なんとかフォローしようと試みるが

「ウコンさん」

「は、はいッ！」

顔を向けられ、反射的に直立不動の姿勢をとるウコンだが――

「後で、キッチンの皆さんに謝らなきゃダメですよ？」

「……はい？」

やけにあっさり済まされて、思わず聞き返してしまう。

「あの、それだけですか？」

どう考えても墓穴を掘るウコンだが、

「はい。……はむはむ……お叱りはキッチンの皆さんがすることですし」

カラシナはニコニコ微笑みながらそれに答え、

「はむはむ……それに、わたしも少しだけ抜けてきちゃいましたから♪」

悪戯っぽく小さく舌を出した。

「ぬ、抜けてきたって……」

アサギが啞然としていると

「はい、どうぞ」

カラシナが、1つの箱を差し出してきた。

それは、魔界のドーナツ専門店『魔スタードーナツ』のもの。

「は、はあ……っす」

よく分からないながらも受け取ると、重さが偏っていることが分かった。

どうやら、中身が半分以上減っているらしい。

「えーっと、これは……?」

カラシナが、このドーナツを食べていたのは分かる。

けれども、その残りを渡される理由が分からないのだが……。

「頑張ったアサギさんに、ごほうびです。……はむはむ」

「ふえ？」

見ると、カラシナはドーナツを口を運びながらニコニコと微笑んでいる。

——そこで、気付く。

百花殿は、あくまで遊郭。

接客を担当する者たちは、これからが加速度的に忙しくなるはず。特にカラシナは接客の中心であり、彼女目当てで来る客も多い。

自分も忙しいはずなのに、わざわざ時間を割いて来てくれたのか。

『ごほうび』を渡すためだけに。

「えっと、その……どうもっす」

嬉しいような恥ずかしいような気持ちになって、うまく言葉が出てこない。

しかしカラシナは気にした様子もなく

「はむはむ……それでは、わたしも戻るとしますね♪」

ニコニコ微笑みながらそう告げると、2人に背を向けて立ち去っていく。

その後姿を見送りながら、思う。

いろいろと大変だし、恥ずかしい思いをしたりもしたけれど――

もう少し、頑張ってみようかな、と。

――だが、そのとき――

ズシンと大きな音を響かせて、百花殿全体が大きく軋んだ――！
！！

＊

「な、なにコレ……！！」

「ああ〜！ ごはんが〜！！」

「あらあら〜」

音源と思われる場所に駆けつけたアサギたちが目にしたのは、滅茶苦茶に壊された宴会場だった。

お膳や食器が散乱し、無残に床にぶちまけられた料理。

客や接客担当の者たちの姿は無い。既に避難したのだろう。

壁も天井も派手にぶち壊されて、随分と風通しと見晴らしが良くなってしまうていた。

そして、最大の問題が――

見晴らしの良くなった夜空に浮かぶ、一匹の魔物。

「なに……アレ……」

「インプ……じゃないですよね」

「アガシオンさん、ですね」

アガシオン。

エビのように曲がった身体に、独特な形状の尻尾。2本の腕とコウモリのような翼を持つ、インプの上位種の魔物。

だが、重要なのはそんなことではない。

問題なのは――

「……デカ……ッ！」

それが、あまりにも大きいこと。

普通のアガシオンはせいぜい1.5m程度の大きさなのに對し、
今、空にいる個体は明らかに10mはある。

2階建ての家屋よりもさらに大きいと言えば、その大きさが分かるだろうか。

空に浮かぶ巨大アガシオンは大きく息を吸い込むと、三日月に向けて咆哮する――！！

「課長のバッカヤロオオオオオ！！！！」

「って、なんじゃそりゃあああああ！！！！」

さすがにツッコまざるを得ない。

いろいろとぶち壊しである。

「アガシオンさん、リストラされたって言ってましたから……」

「って、知ってるんっすか!?!」

「はむはむ……はい。お客さまです」

こんな状態でも、カラシナはマイペースを崩さない。

というか、リストラされたくせに百花殿に来たのか。

——いや、リストラされたからこそ、自棄を起こしたのだろうか？

いずれにしても、迷惑な話である。

「でも。ちょっと見ない間に、随分お育ちになりましたね。……はむはむ」

「いや、アレは育つのと違うっす」

どうみても巨大化である。

しかし、どうしてあそこまで巨大化したのか。

空に浮かぶ巨体を見上げると、それに向かって数人の夜魔達が飛んで行くのが見えた。

遠すぎてよく分からないが、何か話しているらしい。

というより、なだめているようにも見え——

「あッ!!」

突然、巨大アガシオンがサキュバスたちを追い払うように腕を振

り回した。

夜魔達は身軽にそれをかわしたが、巨大アガシオンはそれに追撃をかけるようにして、その大きな口から濁った紫色の毒ガスを吐き出した。

ガスを浴びてしまった夜魔たちはみるみる高度を落としてゆき、難を逃れた残りの夜魔たちは彼女たちを助けに向かう。

「な、なんか大変なことになってない……?」

「あらあら。酔っ払っちゃってますね……はむはむ」

カラシナはのん気に言っているが、酔ってるなんてことでは済まない。

酔っ払いが暴れることは珍しくないのだが、アレはいくらなんでもサイズが違う。

夜魔たちは全員撤退し、空は再び巨大アガシオンだけになる。

タチの悪い酔っ払いが我が物顔で浮かんでいるのを見上げていると――

「ああー！ー！」

突然ウコンが声をあげて、あたりに散乱している料理の中から1つの料理を拾い上げた。

「……何それ？ ……焼きナス？」

ナスビの皮を剥いて丸ごと焼いた料理だが……これがどうしたと言うのだろうか。

「昨日、マノアカズから届いた『大きくなるナスビ』です」

「ちょっと待てえええ！」

コレが原因か！！！！

ナスビで大きくなることにツツコミたいが、それはこの際どうでもいい。

それよりも、だ。

「なんでそんなの客に出すのよ！」

どう考えてもトラブルの元である。

「い、いえ。ちょっとなら大丈夫なんですよ？ だから――」

ウコンとしては、漬物にして、少しだけ添える形で出すつもりだったらしい。

「それに、うまく使えば大きくできたかもしれません……」

「？ ……何を？」

「胸を」

「……あー……なんていうか……ごめん」

両手を胸にやるウコンを見ると、彼女に悪い気がして目を逸らす。

気にする気持ちは少なからず分かるから。

「あうう……勝手に使っちゃダメって言うておいたのに……全滅ですう……」

見れば、同じような焼きナスがいくつも転がっている。

ウコンのささやかな希望は絶たれたらしい。

「……と、とにかく。いつまでもこうしてるわけにはいかないっしょ！」

強引に話を変える。

——実際問題として、アレを放置するわけにはいかない。

アサギが双銃をホルスターから抜くと、2人も臨戦態勢に入る。

ウコンが腰のポーチからピンポン玉ほどの大きさの、内部に緑色の魔力の灯が揺らめく『魔力の玉』を取り出すと、それが緑の光と共に瞬時に巨大化して、本人の身長よりも大きなジャイアントアックスと化す。

カラシナも同様に、薄紫の魔力の玉を取り出すと、それが応援に使うようなボンボンに変化し、両手に持つ。

——『魔力の玉』。

ここで生活するうちに気付いたことだが、どうやら魔界の住人は皆、物体を魔力の玉に変換できる能力を有しているらしい。

よく、どこからともなく物を取り出すのは、これがタネだったようだ。

何でも変換できるわけではなく、大きすぎる物などは無理らしく、また、愛用品や魔力の強さなどの要素による個人差がかなり大きい。

しかし、中には、生物であっても『魂』と『魔力の玉』に分けてしまえる者がいるというのだから、恐れ入る。

だが、便利ではあるが、欠点もある。

それは、見た目が全部同じになってしまうので、あれもこれもと魔力の玉に変えてしまうと、どれがどれだか分からなくなってしまうこと。

それ故に、使われないことも多い。

周りの弁によるとアサギも使えるはずとのことだが、成功したことは無い。

カラシナ曰く『人間の常識が邪魔をしている』とのこと。

魔界の常識に馴染めば使えるようになるらしいが……。

それは、はたして喜んでもいいものなのだろうか？

……それにしても、カラシナの武器はなんとかならないものだろうか。

それが彼女のスタイルだと分かってはいるのだが、違和感を感じずにはられない。

——それはともかく。

「アサギさ〜ん。あそこまで届きますか？」

まずは、手の届くところまで降りてきてもらわないといけない。

そのためには、長距離攻撃でその横っ面に一撃入れてやるのが手っ取り早いのだが――

「……やってみるっす」

アサギの『マジカルバレット』は、高出力の魔力弾を一気に乱射して弾幕を張る技。

遠くの標的を狙い撃つのに適していない。

掛け声と共に同時に放たれた2つ魔力の弾が、二重螺旋を描きながら標的に向かって飛んでいき――

――標的の数m前方を空しく通り過ぎていった。

「「……………」」

痛い沈黙が流れる。

「……アサギさん、そこは当てましようよ？」

「しょうがないでしょ！ 狙撃は苦手なのよッ！！」

両手をぶんぶん振りながら弁明するものの、あまりの恥ずかしさに顔が真っ赤になってしまっている。

ガンナーと言っても、アサギは数撃つタイプ。

なので、それとは対極に当たる狙撃は専門外なのだが――

それでも、あれだけもったいつけて撃っておいて外すなんて、間抜けすぎる。

「でも、目的は果たせましたよ」

カラシナの声に、敵のほうに目を戻すと――

巨大アガシオンがこちらに向かって、一気に急降下してきていた！

「んなあああああ！？」

「うひゃあああああ！」

「それっ♪」

アサギとウコンは床に転がり込みながら、カラシナは“きらりん”と可愛い音を立てて舞い散る星型の魔力光と共に姿を消して、巨体の体当たりを回避する。

巨大な尾が派手に破片を撒き散らしながら床を大きく抉ってゆき、その後、再び空高くに上昇していく。

「あ、危な……」

「死んじゃうかと思いました……」

アサギとウコンが体勢を立て直す横で、可愛い音と光と共に、カラシナが再び姿を現す。

「あらあら。これは、直すのが大変ですね」

抉られた跡を見ながら、困ったように片手を頬に添える。

余裕があるのか天然なのか、こんな状況でもマイペースを崩さな

い。

「……さて、降りてくれたのはいいけど……」

「やっぱり、これだけ大きいと厄介です……」

巨大アガシオンはアサギたちに狙いを定めたらしく、7～8mほどまでに高度を降ろしてきていた。

だいぶ近くまで相手が来たことで、改めて相手の巨体を実感する。

その身と同じ巨大な翼を羽ばたかせながら滞空していた巨大アガシオンだが――

「カアアア――ッ！」

大口を開けると、叫び声と共に赤く光る粉のような物をアサギ達の頭上に振りまいた。

夜空の下、赤く輝く粒子がゆるやかに降り注ぐ光景は、本来ならば幻想的すらあったろうが――

「……ッ！ 酒臭い……!!」

その大口から同時に放出される酔っ払い特有の口臭によって、完全に台無しになっていた。

もっとも、これは魅せるためにやったわけではないのだが。

「……………う……………あ……………ッ」

ウコンがズシリと重い音を立ててジャイアントアックスを取り落とし、片膝をつく、そのまま倒れ伏す。

——悪魔の粉。

インプ系の上位種が扱う、獲物を麻痺させる毒。

それを浴びたためにウコンは身体が痺れて動けなくなったのだが――。

「ウコン!？」

アサギには効いていなかった。

だが、そのアサギはウコンが倒れたのを見ると、少し苦々しい顔で手に持つ銃に目を落とした。

（これ、使い手しか守ってくれないから……………!）

アサギに悪魔の粉が効かなかったのは、ATA／DTDの能力の1つによるもの。

——使い手に対する、あらゆる状態変化を無効化する。

ただし、あくまで対象は“使い手”に限られるため、仮に、今これをウコンに渡したとしても、彼女の麻痺を治すことはできない。

……二つ名の『偽り』とはあまり関係ない能力のような気がするが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

「あらあら。……仕方ありませんね」

一方、カラシナもぴんぴんしていた。

彼女は『状態免疫』なる能力を有しており、状態異常に対する耐性を元から持っているからである。

カラシナは倒れたウコンの傍に行くとアサギのほうを向く。

「一度つれて戻りますので、しばらく頑張ってもらえますか？」

「あたし1人でっすか!？」

当然、驚くものの、すぐに諦めたように肩を落とした。

「……しょうがないか……了解っす」

こればかりは仕方がない。

とてもじゃないが、動けない味方をかばいながら戦う余裕は無いのだから。

「それでは、ブーストしておきますね。——ガ・ン・バッ♪!!」

「あ! ちょ……!」

カラシナが応援をするようにぴよんと飛び跳ねながら両手のボン

ボンを振り上げると、その身体から赤いハート型の魔力光が広がるように放たれる。

味方の能力を大幅にブーストするカラシナ独自の強化魔法。その魔力光がアサギの身体を包み込む。

だが、その直後、その魔力光が弾かれるように霧散してしまった。

「あら〜？」

「……これ、いいものも悪いものも無効化しちゃうから……」

A T A／D T Dの状態変化無効は、味方からの強化も無効化してしまう。

魔力や闘気によるものはもちろん、特殊な装備品による追加効果や、科学的薬品などによるドーピングすらも無効化してしまうのだ。

例外は、契約した使い手本人の魔力や闘気によって行使されるもののみ。

無論、そういうことも理解したうえで契約したのだが、こういう状況で味方からのブーストが受けられないのは正直痛い。

アサギ自身が強化魔法の類を使えばよかったのだが、無いものねだりをして仕方がない。

自分自身の魔力・闘気による基本的な身体強化はできるので、今はそれでやっていくしかない。

「……なら、仕方ありませんね。——それでは、行きますね」

カラシナはウコンを抱えるとそう言い残し、星光を撒き散らしながら姿を消した。

——その場にはアサギと、巨大アガシオンだけが残される。

「……さて、やるとしますか……！」

巨大な敵を見据えると、その手の双銃をぐっと握り締めた——。

＊

To Be Continued

＊

Track 1 『アサギ・メタモルフォーゼ』 - B (後書き)

コスチュームチェンジについてですが、あまり引き出しが無いぐせにやってしまった、作者の無謀な試みです。

なので、今後も毎回衣装を変えることができるかどうかは未定です。

『魔力の玉』については、かなり強引な独自解釈&独自設定です。原作ゲームで、各キャラクターがどこからか物を取り出すことに、なんとか辻褄を合わせようとした結果、こうなっていました。

マジカルバレットは、『プリニー2』のアサギが使うものにしました。

ただ、本来は星型の弾を撃っているようですが、それだと戦闘シーンでイメージ的に締まらないので、そこはあえて変えています。

次回の投稿は来週の予定です。では。

T r a c k ー 1 『アサギ・メタモルフォーゼ』 ー C (前書き)

T r a c k ー 1、最後のパートです。
それではどうぞ。

Track 1『アサギ・メタモルフォーゼ』—C

「とりあえず——それッ！」

横に跳ぶようにして駆け出し、側面に回りこみながら双銃を乱射する。

的がデカイので、適当に撃ちまくっても面白いように当たる。

当たるのだが——やはり、まるで効いてない。

打撃力が足りない。

そもそも、拳銃であの巨体を相手にしていること自体が無茶なのだ。

正直、バズーカやガトリング砲でも欲しいところだが——それこそ無いものねだりだ。

それに、やりようはある。

巨大アガシオンはアサギのほうを向こうとするが、それよりもアサギが回り込むほうが早い。

案の定、身体が大きすぎて小回りが利いてない。

バカ正直に真正面から相手をしてやる義理は無い。

こうして正面に立たないようにチクチク攻撃を加えて牽制しながら、魔力を練り上げていき――

「――ふッ……！」

一旦足を止め、短く息をついて練り上げた魔力を開放――！

「マジカルバレットオオオッ！！」

双銃から次々に放たれた幾条もの太い光の帯が、巨体の横っ面に次々と直撃する。

「グガアアアッ！！？」

さすがにそれなりに利いたらしく、その巨体が初めて苦悶の叫び声を上げた。

「……よし……ッ」

――いける。

マジカルバレットが利くのであれば、充分すぎるほどの勝算がある。

巨体から来る相手の攻撃力は脅威だが、当たらなければどうと言うことはない。

毒ガスや悪魔の粉も、ATA／DTDの御蔭で気にする必要はない。

問題なのは、再び射程外の高さまで離れられてしまうことだが、おそらくそれはない。

なぜなら――

「ガアアアアアッ！！！」

所詮は酔っ払いである。

今の一撃で完全に頭に血が上ったらしい。

ああなってしまうえば、とてもじゃないが冷静な判断はできまい。

――そのぶん、攻撃はより苛烈になるだろうが。

そして、その予想に違わず――

「ガアアアアアッ！」

巨大アガシオンは、滅多矢鱈と両腕を振り回しながら闇雲に暴れ始めた。

「うわっと！」

近くに振り下ろされそうになった腕を後ろに跳んでかわす。

大振りなので、単発ならば避けるのは簡単なのだが、こうも無茶苦茶に暴れられると不用意に近づけない。

もつとも、やることは変わらない。

少し離れて牽制しつつ逃げ回りながら魔力を練り上げ、隙を見てマジカルバレットを叩き込む。

スピードはこちらのほうが上なのだから、あんな大振りな攻撃に当たってやるつもりはない。

そのセオリーどおりに攻撃を続けていると、今度は毒ガスを吐き散らし始めた。

当然、それもATA／DTDによって無効化されるので、気にする必要は無い。

——だが、それがいけなかった。

煙を吸っても毒に侵されることは無いのだが、無闇矢鱈に吐き出される濁った紫色の煙が見る見るうちに辺りに充満していき――

「……これは……！」

アサギの視界を完全に塞いでしまった。

しまったと思ったそのとき、アサギの聴覚が、重い“ブオン”という音を捉えた。

反射的に後ろに跳んだ直後――。

煙を割って太い丸太のような物が飛び出し、それに跳ね飛ばされてアサギの身体が宙を舞った――！

錐揉み状にスピンしながら木の葉のように弾き飛ばされ――そして墜落。地面に叩きつけられると同時にバウンド――！

さらに2度、3度バウンドしながら地面を転がるようにして吹き飛ばされていき、その先にあった万年桜の木々の1つにぶつかって止まった。

――自ら吐き出した煙で“獲物”を見失った巨大アガシオンは、その巨大な尾で煙の中を適当になぎ払ったのだ。

それが、たまたま当たっただけ。

なのだが――。

「う……く……！ あ……ッ！！」

そのたまたまが、アサギには充分すぎた。

反射的に後ろに跳び、無意識の身体強化と受身でガードしたから、まだ意識があるが、受けたダメージは深刻。

地面を転がりながら吹き飛ばされたせいで擦り傷だらけの泥まみれになり、薄手だった上着は見るも無残にボロボロになっている。

下に着ていた黒の上下もかなりのダメージを受けており、かなり際どいことになっていた。

だが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

全身の痛みをこらえ、幹にすがるようにしながら立ち上がろうと
して――

「――ッ！！！」

右足をついた瞬間に激痛が走り、幹を支えにしながらしゃがみこむ。

最悪なことに、右足を痛めた。

ここにきて、カラシナのブーストの恩恵が受けられなかったことが重く響いてきた。

あれがあれば、ここまでのダメージは受けなかったのだが……。

けど、今更言っても詮無いことだ。

そもそもこれは、自分の失態。

武器の能力で毒を受けないからと油断しきって、煙で視界を遮られることを完全に失念していた。

いくらATA／DTDでも、物理的な目隠しまでは無効化できない。

ガスを吐き出し始めた時点で、一旦、大きく距離をとるべきだったのだ。

見れば、巨大アガシオンはアサギを見つけたらしく、こちらに向かってまっすぐ飛んで来ている。

急降下のとくと比べると格段にスピードは遅いが、それでも、その突撃は充分すぎるほどの脅威となる。

「さすがに……ヤバいかも……」

敵が来るまでにまだ少し時間があるが、この足では逃げ切れない。

思わず逃げ腰になってしまいが、下がった背中に後ろの木の幹がぶつかる。

見れば、立ち並ぶ万年桜の木々が、まるで逃げ道を塞ぐ壁のよう
で――。

――……壁？

その瞬間、アサギの脳裏に1つの閃きが生まれた。

「……いける……かも……！」

ボロボロになった上着を脱ぎ捨てると、万年桜の幹を支えにしながら、立ち上がる。

双銃は今、手元に無い。

弾き飛ばされたときに、どこかに落としてしまったのだろうか――

それについては問題無い。

両手を前に伸ばし――

「――来い」

そう一言呟いた直後、純白と漆黒の銃が空を裂いて飛来し、それぞれアサギの手の中に収まった。

こういうところは、本当に便利だと思う。

契約のもと、この手に戻ってきた銃を見ながら小さく笑みを浮かべると、表情を引き締めて敵のほうを見据える。

大きく翼を羽ばたかせながら、かなり接近してきている。

——だが、まだ早い。

一瞬だけ、横目で右を確認する。

タイミングが重要。——ATAを持つ右手に、知らず力が入る。

そして、敵はさらに接近。

——あと5、4、3、2、1——ッ！

「今……ッ！」

ATAを右に向けて振り抜くと同時に、ATAが白い灰のように粒子化し、細長いワイヤー状に変化。少し離れた右方の万年桜の幹に巻きつく。

その瞬間、アサギが片足だけで右に跳ぶのと同時に、その白いワイヤーが一気に収縮。

アサギの身体は収縮するワイヤーによって素早く引き寄せられ、

巨大アガシオンの突撃をギリギリで回避した。

直前で突撃をかわされた巨大アガシオンは、そのまま万年桜の木の“壁”に激突。

同時に、その衝撃で万年桜の花弁が一気に舞い散る。

急降下するときよりも速度が無かったために、木々を押し切ることができずにそこで止まり、体制を崩す。

その隙を逃さず、アサギは今度はDTDを振るう。

DTDが黒い塵のように粒子化し、先程と同様にワイヤー状に変化。

桜の舞う中、動きの止まった巨大アガシオンの、その巨大な左の翼の根元に絡みつく。

そして、やはり同様に片足で跳ぶと同時に収縮させることで一気に移動し、巨大アガシオンの背に飛び乗った。

——これが、ATA／DTDのもう1つの能力。

『偽装』の特性——粒子化による形状変化。

ただし、刀剣やワイヤーのような単純な構造の物にしか変えられないし、元の質量よりも大きな物にはなれない。そして白と黒の粒

子を混ぜることはできない。

さらに、使い手の近くから離れると強制的に元の銃に戻ってしまう。

多少の制限はあるものの、それらを踏まえてもなお、この能力の汎用性は高い。

アサギに文字通り背中を取られた巨大アガシオンは背中に手を回そうとするが、うまくいかない。

インプ系の魔物は足を持たないため、基本的に飛び続ける必要があるのだが、そのためには当然、翼を羽ばたかせなければならない。

つまり、翼の羽ばたきを阻害するわけにはいかないために、背中に手を回せないのだ。

「こうなればこっちのものよ……！」

翼の根元に巻きつけたワイヤー状のDTDで身体を支え、銃に戻した右のATAを構える。

——“溜め”は充分……！

「さっきのお返しを……喰らえええええッ！！！」

至近距離のマジカルバレットを、その馬鹿でかい頭に向けて全弾

叩き込む！

「グガアアアアッ！！！」

断続的に撃ち込まれる高出力の魔弾を受けて、先程のときよりも大きな悲鳴を上げる。

片手で撃つので連射は利かないが、距離が近いぶん、さっきよりも効いているのだろうが——それでも、まだ倒れない。

やはり、相手が大きすぎるのだ。

呆れるほどタフで頑丈——だが、ダメージが無いわけじゃない。

——ならば、倒れるまで撃ち込むまで。

そう思って銃を再び構えなおすと、巨大アガシオンは突然、ひときわ大きく翼を羽ばたかせた。

「うわっと！？」

突然“足場”が動いたことでバランスを崩したが、咄嗟にAT Aもワイヤーにして翼の根元に巻きつけることで身体を支える。

巨大アガシオンはなおも止まらず、翼を羽ばたかせては一気に高度を上げていき、激しく飛び回り始めた。

「こ、この……！」

さながら、安全ベルト無しのジェットコースターの如きその勢いに、振り落とされそうになる。

というより、まさに振り落とそうとしているのだ。

「ッ……！ 手が……！！」

自分の両腕に絡ませている細いワイヤーがギリギリと食い込んでくる。

非殺傷の特性の御蔭で、腕がこのワイヤーで切られてしまうことはないが、それでも痛いことは変わらない。

さらに、顔にかかる風圧のために碌に目も開けていられない。

——あまり、長くは持ちそうにない。

こうしている間にも、どんどん高度が上がっていつている。

仮に振り落とされたとしても、ATA／DTDを薄い翼状にすればグライダーのように滑空できるだろうが、その場合、間違いなく格好の的になる。

何とかしなければ———そう思いながら体勢を立て直そうとしたアサギの目の端に一瞬、見慣れた緑の髪が入った。

「アサギさー！ーん！！」

回復したウコンが戻ってきていた。傍にはカラシナの姿もある。

——いや、それだけではない。

周りの空を見渡せば、ウコン同様に回復した夜魔たちが再びやってきていた。

——それを見ると不思議と気分が高揚し、力が湧き上がってくる感じがした。

——まだいける。まだ、頑張れる——！

その目に再び活力が宿り、自然と口元に笑みが浮かぶ。

——もう、負ける気がしない。

手に持つワイヤーをぐっと強く握りなおしたアサギの元に、1人のリリースがやってきた。

「大丈夫！？ 早くこっちに……！！」

器用に空で併走しながらこちらに手を伸ばしてくる。が——

心配してくれるのはありがたいが、今のチャンスを棒に振るわけ

にはいけない。

「まだいける！ それより——」

勝算はある。

さっきまでと違い、今は1人じゃない。

皆の助けがあるのなら、こんな奴は敵じゃない——！

アサギが自分の策を言っていると、リリスは頷いてぶれるようにして姿を消していった。

「——さて、と……！」

リリスのテレポートを見届けると、体勢を立て直す。

彼女が“下”に話を届けにしてくれた以上、心配事はもう無い。

改めて右の白いワイヤーを握りなおすと、左の黒いワイヤーを再びD T Dに戻す。

直後、右手に掛かる負荷と痛みが一段と大きくなるが、それを我慢しながら、今一度、魔力を練り上げ始める。

——これだけの巨体だ。マジカルバレットを叩き込んでも、せいぜいブン殴られた程度にしか感じていないのだろう。

普通にやっていたのでは、いったいどれだけ“殴り”続けられ倒

せるのか分からない。

しかし、だ。

アサギは“溜め”を終えると、口の端を小さく吊り上げながら、DTDの銃口を右の翼の根元に押し付けた。

——今は皆がいる。

相手が倒れるまで撃ち続けるなんてことを、わざわざする必要は無い——！

「——喰らえええええッ！！！」

引き鉄を引くと同時に、高出力の魔力弾が零距离で撃ち込まれる！

「グギヤアアアアッ！！！」

翼と背中を繋ぐ間接。そんなデリケートな部分に直接砲撃を撃ち込まれた巨大アガシオンは、今までにない絶叫を上げた。

同時に、間接部を貫くように走ったその激痛のために、右の翼が硬直する。

直後、大きく体制を崩し、必然的に墜落を始めた。

左の翼だけを無理に羽ばたかせるため、不安定な錐揉み軌道で落ちていく。

しかしアサギはそれに構わず、右の翼にしがみつきながら、さらに撃ち込み続ける。

1発程度では、痛みを我慢して体勢を立て直してしまうだろう。

そうなってしまつては意味が無い。

しばらく右の翼が使えなくなるぐらいのダメージを、確実に与えておく……！

2発、3発、4発、5発――！

零距离ゆえに、撃ち込むたびに魔力弾の余波がアサギの身に襲い掛かる。

弾き飛ばされた際のダメージがまだに残るこの身には、その余波も浴びるのもかなりこたえるのだが、それもこの際我慢して撃ち続ける。

そうしているうちに、不安定にぐるぐる回りながら流れていく周囲の風景が、地上が近づいてくることを示してくる。

このままでは一緒に地面に叩きつけられてしまうだろうが――

無論、そんなことに付き合うつもりは毛頭ない。

「――せゝの……ッ！」

最後の1発を撃ちこむと同時にATAを戻して跳び、砲撃の反動を利用して一気に離れる。

当然、宙に投げ出されたアサギの身体はすぐに落下を始めるが、そこにサキュバスとリリスが素早くやってきて空中で両手を掴み取り、墜落を食い止めた。

そして――

「……準備はいいですか？」

「いつでもいいです！」

地上では、カラシナとウコンが、テレポートで巨大アガシオンの落下地点に先回りして待ち構えていた。

ウコンは墜落してくる巨大アガシオンを見上げると、ジャイアントアックスの刃を逆にするようにして振りかぶる。

そこへさらに――

「そゝれっ！ ファゝイトっ、オゝ♪!!！」

カラシナの強化魔法が加えられ、その攻撃力がさらにブーストされる。

真紅の魔力の光に包まれたウコンは、一旦、ゆっくり息を吸うと

「…………アアアアアアアアアアアア——ッ！！！」

ズシン！ と大地を踏み抜く程の力強い震脚と同時に斧を振り上げ、墜落してきた巨大アガシオンの顔面に、斧の背を巨大なハンマーのようにカウンターで叩き込んだッ！！！！

——メシリ、と。

軋みを上げたのはどちらだろうか。

直後、ウコンが重い音と共に斧を振り抜くと同時に、墜落した巨体が再び宙に浮いた。

しかし、それは自身の飛翔によるものではなく——。

巨大アガシオンはゆっくりと後方へ落ちていくと——

地響きを上げて、大地に倒れ伏した。

……。。

静寂が場に流れる。

巨大アガシオンはピクピクと痙攣しているものの、これ以上動き出す様子はない。

そして――

『『『――ワアアアア――！！！！』』』

一転して、場が歓声に包まれた。

「……お、終わったあ……！！」

歓声が広がるなか、2人の夜魔にぶら下がった格好のまま、アサギは大きく息をついて脱力した。

まったくもって、とんだ大迷惑野郎だった。

……もう、体中が痛くてたまらない。

弾き飛ばされたときは死ぬかと思ったし。

思い返しながら巨大アガシオンのほうに目をやると、夜魔たちが

その巨体に次々に群がっている。

何事かと思っただけに見ていると、アガシオンの巨体がみるみるうちに小さくなり始めた。

——エナジードレイン。

夜魔たちの得意技だ。

相手が気絶しているうちに、ああして力を奪っておくのだろう。

巨体だったアガシオンはどんどん小さくなっていき、やがて夜魔たちの群れに埋もれて見えなくなる。

そして、それからしばらくして夜魔たちが離れた後には——

ミイラのようにしおしおに干乾びた、1匹のアガシオンが転がっていた。

「あ、あれは大丈夫なの……?」

どう見ても吸われすぎだろう。

——まあ、自業自得か。

それよりも、今はとりあえず——

「そろそろ、降ろしてくれない?」

2人の夜魔にそれぞれの手首を掴まれる形でぶら下がっているのだが、ずっとこのままにいるわけにはいかない。

だが、2人の夜魔は顔を見合わせると、何故か悪戯っぽい笑みを浮かべて頷き合った。

「オツケ〜♪」

「すぐ降ろしてあげるね〜♪」

妙にわざとらしい言い方に不安を感じる。

降ろすと言って、わざといきなり手を離すつもりじゃないだろうな———とか思ったが、予想に反して普通に高度を下げていく。

ウコンたちの所に向かっていることから、そこに降ろしてくれるつもりらしい。

「カラシナさ〜ん！」

「ウコンちゃ〜ん！」

上の夜魔たちに呼ばれ、2人が振り向くと――

「あらあら〜」

「あああああアサギさんっ!?!」

カラシナは珍しく驚いた表情を浮かべ、ウコンは顔を赤くして慌

て始めた。

「な、なに……？」

2人の反応にアサギは怪訝な顔をしたが

「服！ 服です！」

「服……って……」

ウコンに言われて視線を降ろし——そこで、ようやく気付いた。

すっぽんぽん。残っているのはブーツのみ。

「い、いやああああッ！！！？」

咄嗟に裸身を隠すように両足を上げるが、ほとんど意味は無い。

肝心の両手が夜魔たちに掴まれていて使えないから、隠しようがない。

——こうなってしまった原因は、最後の零距离マジカルバレット。

ただでさえ、薄手の生地がダメージを受けてギリギリの状態だったところに、マジカルバレットの余波がとどめを刺したのだ。

不殺銃の非殺傷の特性はあくまでも生物に対してのもの。非生物には適応されない。

ステージ衣装は普段着と違って、元々、戦うことを前提に作られていたわけではなかったので、こうなっても無理はない。

納得はできないが。

あれだけ頑張ったのに、なんでこんな目に遭わなきゃいけないのか。

理不尽にも程がある。

「ちょっと！ 放してよお！！」

半ば暴れるようにして上の2人に訴える。

――ATA／DTDを布状にでも変化させれば済む話なのだが、パニックになってしまっているせいでそこに気付けない。

しかも、上の2人も

「でも。まだ高さあるし。♪」

「今放したら危ないわよね。♪」

これ以上ないほどに、わざとらしい。

絶対に、人で遊んでいる。

……だが、恥ずかしいやら、心身ともに疲れたやら、身体中すごく痛いやらで――

アサギのほうも、いい加減に限界を迎えていた。

「も、もうやだああああッ！！！」

アサギの泣き声と共に、百花殿を騒がせた今宵の事件は、締まらない終わりを迎えた。

――この後、割りと本気でマジ泣きしたアサギに2人の夜魔が見事なジャンピング土下座を披露したりしたのだが、それは完全に余談である。

＊

翌早朝。

「……ん……うん……」

いつもより早く、アサギは目を覚ました。

のろのろと上体を起こすと、薄い藍色——浅葱色のパジャマが早朝の薄明かりに照らされる。

「……うるさいなあ……もう……」

目が覚めた原因は、外から響いてくる土木工事の音。

昨晚、百花殿の一区域が盛大にぶっ壊されたので、早速、その復旧が行われているのだろう。

しかし、こんな朝早くから始めているということは、昨夜のうちに諸々の手続きは終えていたということか。

さすがカラシナ、仕事が早い。

でも、正直言って、まだ眠い。——何か耳栓でもして二度寝しようか。

ぼんやりした頭でそう思った、そのとき。

「アサギさんっ。起きました!？」

「んなっ!？」

いきなり、上下逆のウコンの顔が上から覗き込んできた。

びっくりしたせいで、急に眠気が引く。

「少し早いけどご飯行きましょう。ご飯！」

「あ、あー……うん」

つい、押し切られるように頷いてしまった。

というか、なんでコイツはこんな朝っぱらからこんなに元気なのか。

ライトグリーンのパジャマを着た上体が上に引っ込むと、上の段から着替える音が聞こえてくる。

「……まあいつか。起きよ」

別に、絶対に寝たいと言うわけでもなし。

頭を切り替えるように、ひとつ、大きく背伸びをした。

＊

食堂に向かう前に、復旧現場を見渡せる場所まで少し寄り道した。

しかし、離れた場所から破壊された区域の全体像を眺めると、被害の大きさを改めて実感する。

「うわゝ。これじゃ、しばらくお店はお休みでしようかね……」

「……うゝん。どうだろ？」

客商売なので、復旧が済むまで店が開けられないのは事実だろう。

だが、おっとりしているようで意外と強かなカラシナが、復旧するまで休業を続けるとは思えない。

——まあ、今それを考えても詮無いことだが。

遠目にだが、数多くのプリニーやモーブたちがせわしなく動き回っているのが分かる。

ここのプリニーやモーブたちは、こういった作業には慣れている。

それは、最低でも月に1度のペースで破壊活動を行ってくれる人物がいるからだ。

——具体的には、ここの主が。

だが、そんな彼らをもってしても今回は荷が重いため、専門の業者が呼ばれていた。

ワースラッグやメタルゴーレムなどの見慣れない面々が、プリニーやモーブたちと共に復旧作業に精を出している。

球形の空飛ぶ戦車『トロツケン』の姿も数多く確認できた。

資材を運搬している機体もあれば、へし折れた万年桜を運び出している機体もある。

そんな復旧現場の光景を、何の気なしに眺めていると――

「――ん？」

頭上を影がノロノロと通り過ぎたのに気づき、アサギとウコンは上を見上げる。

そこには、ミイラのようなアガシオンが、明らかに積載オーバーな大荷物を括り付けられてフラフラと飛行していた。

「オラオラ！　ちんたら飛んでるんじゃないっすよ！」

しかも、背中に乗せたプリニーに叱責されながら。

言うまでもなく、昨夜、大暴れしてくれたアガシオンである。

あれだけ盛大にぶっ壊してくれたのだから、弁償を要求されるのは当然と言えた。

とはいえ、リストラされた彼がそんな金を耳を揃えて払えるはずもなく、彼は強制的にここで働かされることとなっていた。

しかも、その莫大な借金に加えて、ここを壊した張本人という事実のために、彼のここでの立場はプリニー以下。

昨夜アレに殺されかけたとはいえ、プリニーにこき使われているその様には、さすがに同情の念を禁じ得なかった。

大荷物を抱えたアガシオンは、そのままフラフラと復旧現場に向かって飛んでいった。

なんとなく微妙な気分になったアサギだが――

「アサギさん。そろそろ行きましょう！」

そう言って、ウコンが一足先に駆け出していく。

それを見ると自然と意識が切り替わり、知らず、口元に笑みが浮かぶ。

――さて、少し早い朝食にしようか。

「ちょっと、待ってよ！」

柔らかな朝の日差しの中、アサギもコートを翻しながら駆け出していた――。

＊

Track 1 『アサギ・メタモルフォーゼ』 End

＊

おまけ 『武器解説』

ATA/DTD

No11. 『偽りの不殺銃』

形状

純白と漆黒、2挺のオートマティック。

特性…偽装

粒子化し、様々な形状に変形することができる。

ただし、単純な構造な物に限られる。また、元の質量より大きな物にはなれない。

白と黒の粒子を混ぜ合わせるとは基本的に不可。

使い手の近くから離れると、強制的に変形は解除される。

この特性の御蔭で、破損しても瞬時に自己修復が可能。

備考

使い手に対する、一切の状態変化を無効化する能力も備えている。

ただし、使い手自身の魔力・闘気によって行使されるものは例外となる。

契約の繋がりがあるため、ATA／DTDが手元に無くても有効。

Track-1『アサギ・メタモルフォーゼ』-C(後書き)

Track-1終了。いかがだったでしょうか？

オリジナル武器のATA/DD。

ほとんどの人が分かると思いますが、元ネタは「灰は灰に、塵は塵に」のフレーズです。

Intro-2以降は、Track-2が完成してから順次投稿しますが……。

以前の活動報告にも書きましたが、Track-2が書き直しになったうえに遅々として進まないなので、掲載時期は未定となります。

どうかご了承ください。

I n t r o - 2 『童祭〜Innocent Treasures』 - A (前書き

※『童祭〜Innocent Treasures』..『東方の夜明け』ZUN氏の入退場テーマ。

お待たせしました。

ようやくTrack-2が完成したので、投稿を再開します。

I n t r o - 2のサブタイトルはアニソン・ゲーソンとは違いますが、タイトルのこれがしっくりきたので、これにしました。

I n t r o - 2はA、Bの2つに分けて投稿します。
それではどうぞ。

朝霧アサギが今いる魔界の他にも、魔界というものが様々な世界に存在している。

“ここ”とは異なる次元、異なる時間――。

そこに、宇宙最強を自称する、魔王ゼタが支配する魔界が存在していた。

――とある事情によって1度崩壊し、現在進行形で再生の真っ最中ではあるが。

崩壊したゼタ魔界の再生。それは『全知全能の書』と、他の魔界の魔王の力を借りて失われた大地を新しく創造することで行われているのだが――。

その新しく創造した大地には、同時に創造された“先住民”が存在する。

新しく創造された彼らは誰の支配下にも置かれていないため、ただ大地を創造しただけでは、そこをゼタ魔界と呼ぶことはできない。

それゆえに魔王ゼタは、新しい大地を創造する度にそこへ侵攻し、改めてそこを支配下においているのだが――。

先住民たちからすれば、ゼタは単なる侵略者に過ぎないわけで。

当然、武器を持って反抗する。

——だが、全ての先住民が、好戦的なわけではない。

“彼女”も、その1人。

白い着物に緋袴、額には頑丈そうな赤い鉢金。

ポリュームのある銀髪を、髪留めでポニーテールのようにして束ねた、小柄な女の子。

この大地が創造された際に、ソードマスターの1人として創造された彼女だが――

当の本人は気が小さく、争い事は好きではない。

それゆえに、周りの攻撃的な気質の先住民たちとはそりが合わず、彼女はいつも1人だった。

それに加えて“ある事情”が、それに拍車をかけていた。

創造されたときからずっと、集団から離れて1人でいたために、個人を識別するための名前すら持っていなかった。

だが、それが平気なはずがない。

人であれ悪魔であれ、孤独には勝てない。気が弱い子ならばなおさらに。

けれど、談笑しているグループを見かけても、その輪に入っていくこともできなくて。

結局、離れた場所から遠巻きに眺めることしかできず。

いつしか、それが日課も同然となっていた。

そんな、ある日――。

遙か上空から、1冊の赤い本が飛来してきた――！

＊

「フハハハハ！ かかれゝい！！」

白いコートの少女に抱えられた、表紙に彫りの深い男の顔を持つ赤い本が、高笑いと共に号令を下す。

魔王ゼタの、成れの果ての姿である。

その間拔けな姿の魔王の命に従って、召喚インバイトされた配下の悪魔達が進軍する。

ある者は剣を振るい、ある者は呪文を唱え、またある者は戦車を駆って、立ち塞がる先住民たちを蹴散らしていく。

「フハハハハ！ 圧倒的ではないか、我が軍は！」

自軍の快進撃に御満悦なゼタだが――

「……あまり調子に乗りすぎないことね」

そのゼタを持つ白いコートの少女が、冷めた声でそれをたしなめる。

朝霧アサギとよく似た容貌をした彼女は――この世界の『アサギ』。

冷めた眼差しを持つ彼女は、クールで落ち着いた雰囲気纏って

いる。

「チッ……弟子の分際で水を差すな！」

「後先考えずに突っ込んで痛い目見たのが、今まで何回あったかしら。」

……それと、弟子になった覚えも無ければ、教えを受けた覚えも無いわよ」

魔王であるゼタに対し、敬称もなしにタメ口をきく。

それは、別に彼女がゼタと対等の存在というわけではなく、単に、そういった慣習とは無縁だったから。

相手が魔王だからといって卑屈になるつもりはない、というものもある。

「フン！ 手取り足取り教えてもらおうなどと思うな！
教えられるのではなく、盗め！！」

ゼタの言うことはもっともらしいのだが……。

「あなたからいったい何を盗めと？ 要らないわよ、目からビームなんて」

「口の減らんヤツめ……！」

悲しいかな、自力で動けない本の身では大いに説得力に欠ける。

だが、そうして話していると――

地響きと共に、ゼタたちの後方に、突如として新しい大地が出現した――！

そこにも武器を手にした先住民たちが存在しており、こちらに向かって進撃してくる。

「チッ！ エクステンションか……！」

「……言わんこっちゃない。こういうことがあるから嫌なのよ」

――エクステンション。

創造されたばかりの大地には空間の歪みが発生している場所が所々にあり、それによって、そこにあるはずの大地の一部が全く見えなくなってしまうている場合が多々ある。

その空間の歪みが何かの切っ掛けで補正され、突然大地が現れたように見える現象を、ゼタたちはエクステンションと呼んでいる。

地の利を持つ先住民たちは、この現象を利用して伏兵を配置することが多く、今回も、そのケースに該当していた。

――しかし、それはゼタたちも何度も経験していること。

今更、慌てたりはしない。

「フン、小賢しい連中めが。……インバイトオッ!!」

ゼタの声と共に、遙か上空から塔のような形状の城砦が飛来し、地響きを上げて大地に降り立った。

突然、空から大きな建物が降ってくるというその光景に、驚いた先住民たちの進軍の足が止まる。

「フハハハハ！ 我の裏を掻けたとも思ったか！ 愚か者どもめ!!」

「……まあ、同じ手に何度も引っ掛かっていれば、誰でも学習するわよね」

「ええい黙らんか！ ……ともかく、であえ、であえーい!!」

冷やかなツツコミをごまかすように一喝すると、召喚した城に向けて号令を掛ける。

その号令と共に、中に控えていた配下たちが次々と飛び出して――

『……………』

――こなかった。

「……むう？ おい、コラ！ 出てこんか！ おーい!!」

だが、呼べど叫べど、やはり出てくる気配はない。

「みいず臭いではないか、ゼタよ。我輩の為に、こおんな立派な城を造ってくれるとは。我輩、感動のあまり涙と汗と鼻水とよだれをちよちよぎらせてしまったではないか」

「それはキサマのために造ったわけではないわああああッ！！！」

血管がブチ切れそうな勢いで叫ぶが、アホの分身は何処吹く風。

「……それより、中で待機していたはずの連中はどうしたのよ？」

アサギが肝心なことを聞いて話を進める。

「うむ！」

無断で我輩の城に入り込むとは、まあったくもってけしからん奴らではあったが、我輩のニューコスチュームにいたく感動したらしく、おとなしく出て行ってくれたわ！」

「なにを余計なことをしとるかああああッ！！！」

ゼタのツツコミはもはや絶叫のレベルに達するが、それも当然か。

「……碌なことしないわね……」

アサギも呆れたように深く溜め息をつく。

ニューコスチュームってなんだ、とも思ったが、そこはツツコま

ないでおく。

絶対、碌なことにならないと、予感ではなく確信しているから。

——だというのに。

「だいたいなんだ！ そのニューコスチュームとやらは！！」

空気が読めないバカが手元にいた。

そして案の定——

「よおしくぞ聞いてくれたあ！！」

実に嬉しそうに、高らかに重い声を響かせる。

「皆も知ってのとおり、我輩は全宇宙で最も気高く、美しく、たくましい——素晴らしき魔王、魔帝ロイヤルキングダーク3世の分身であゝる」

さすがはアホの分身である。こいつの辞書に詐称という単語は無いのだろうか？

それに、皆も知ってのとおり——と言っているが、コイツがアホの分身であることを知っているのはこの場では2人のみ。

「だが！ しかあゝし！！ このままではいかんのであゝる！！」

！」

無駄にデカイ声を辺りに響かせる。

「いかぁに我輩のオリジナルが、他に類を見ないほどの至高の存在であつたとしてもお、我輩は我輩なのである！」

珍しく、“少しは”まともなことを言っているように見えたが――

「我輩が我輩である為にも、オリジナルとの差別化は必要不可欠なことなのである！」

――案の定、見当違いの答えに辿り着いているらしい。

「ゆえに我輩、大変身の覚悟を決めたッ!!」

身を包み隠すマントの端を強く握り――

「今の我輩は魔帝ロイヤルキングダーク3世の分身にあらずッ! しいかと刮目せよ! そして唱和せよ! 我が名は魔帝――!!」

高らかに叫びながら、その身を包み隠していたマントを空高くに

放り投げた！

「ロイヤルキングダークよ〜んせえ〜い！！」

ほとんど変わってねえよ！！——と、ツッコむ者たちはいない。

なぜなら——マントの下から現れた、岩のような筋肉に覆われたマッスルボディ。それが身に着けている物は——

女子用の体操服。

——即ちブルマ……ッ！！！！

ぴちぴちに張り詰められたそれは、見る者の視覚を破壊する——！！

『『『………！！！！』』』

突然の視覚兵器の出現に、敵も味方も、言葉が出ない。

「むっふっふ。言葉も無いほどに我輩に見惚れるとは。オリジナルをも超えたこの魅力……！！

我輩、自分のファッションセンスが恐ろしい……！」

だが、アホは沈黙を都合のいいように解釈すると――

「しかあゝし。我輩、出し惜しみはせぬぞ。

さゝあ、我輩の艶姿を、あですがたしいかとその目に焼き付けるがいゝい」

城砦の頂上のポールを使って、ポールダンスまで始めた。

「やめんかああああッ！！！！ 別の意味で恐ろしいわッ！！！！」

そのあまりのおぞましさに、ゼタが再起動してツツコミを入れる。

「バカなだけじゃなくて変態だったの……。救いようが無いわね……」

アサギも片手で頭を押さえながら、心底うんざりした様子で呟いた。

――だがそのとき、先住民たちのほうも再起動を果たし、再び進撃を始めてきた。

いい加減、城砦頂上の変態のことは無視することにしたらしい。

当然と言えば当然の帰結だが、ゼタたちの方は体勢が整っていない。変態が余計なことをしたせいだ。

「……ふう。仕方ないわね」

アサギは溜め息をついてゼタを地面に置くと、両腰に提げた2挺の拳銃を手にする。

「私が時間を稼ぐから、その間に増援を喚んでちょうだい」

「弟子の分際で指図するな——と言いたところだが、まあいいだろう」

建物ごと喚んで1回で済ませるのと、1人1人個別に喚ぶのとは、後者のほうが単純に時間がかかる。

しかも、動かない建物と違い、拠点で各々自由に行動している者たちを1人1人捕捉して喚ばなければならないため、余計に時間がかかるのだ。

なので、彼女の提案は間違ったものではなく、反対する理由もない。

「バカでも変態でもない奴を頼むわよ」

「フ……任せておけ」

軽口を交わしながら、互いに口の端を小さく上げる。

軽く緊張がほぐれ、駆け出そうとした、そのとき――

「うわっはっはっは〜!」

——その空気に水を差すバカがいた。

「我輩のことを、わあすれてはいないかね!？」

忘れていたのではなく、意図的に意識から外しておいたというのに。

これ以上変態の相手をしている暇はない。

無視を決め込もうとすると——

「ああたらしく生まれ変わった我輩に、ばあんじ任せておきたまえ
!!」

一方的に大声でそう言うと、なにを血迷ったか——血迷っているのは元からだが——進撃してくる敵軍に向かって城の頂上から一気に飛び降りた!

——ブルマを穿いたマッスルが空を舞う。

そんな悪夢のような光景を繰り広げながら、敵軍のもとへ滑空して行く——

両腕が鋼鉄のようになった大男が、釣竿を片手に進み出てきて、その手に持った釣竿を一振り。

「はぎやにやつ!？」

釣り針を口に引っ掛けられた変態が、文字通り顔を歪めて変な声をあげる。

大男は変態を空中で釣り上げると、さらにそのまま空中でブンブンと振り回し――

「ぬうううおおおりやああああッ!!!!」

全身全霊の力を込めて、空の彼方へ投げ飛ばした。

「ああ~~~~れえ~~~~……」

変態は間抜けな声をあげながら飛んでいき――やがて、見えなくなった。

オリジナルは、どんなにアホであっても魔王としての力を“一応”持っているのだが、分身のほうに、その力は引き継がれていない。

――ぶっちゃけ、変態は弱かった。

「フン。ようやく消えてくれたか」

「これで少しはマシになるわね……」

2人は邪魔な変態がいなくなったことに胸を撫で下ろすと、改めて臨戦体制に気持ちを切り替えた――。

＊

アサギは軽く地を蹴って駆け出しながら、両手の拳銃を乱射。

先頭集団に軽く一撃入れて、出鼻を挫く。

さらにそのまま乱射して弾幕を張るが――当然、1人では抑えきれない。

弾幕を迂回して接近してきた敵の1人が、剣で切りつけてきた――

――が、その剣を左の銃床で捌いて受け流すと、勢いそのままにハイキックを相手の頭に叩き込んで蹴り飛ばす。

次いで、左右から同時に2人の敵が飛び掛ってくるが――両手を広げるようにして双銃をそれぞれに向け、2人の額を同時に撃ち抜

いて撃墜。

さらに、先程蹴り飛ばした敵を右の銃で撃ちつつ、左肩越しに後ろに向けた左の銃で、こっそりと後ろを抜けようとしていた奴のこめかみを撃ちぬいて沈めた。

そこへ別の敵が槍で突撃してきたところで、その敵に向けて跳躍しつつ槍をかわす。

そのまま敵を踏み台にし、至近距離で撃ち込むと同時に後ろへ跳び、空中で身を翻して双銃を乱射して弾幕を張りつつ、いったん後ろに下がり――

ゼタが召喚した増援と合流した。

奮闘するアサギの後方では、ゼタが次々と配下を召喚する。

急いでいるためか、皆、何かをしている最中のところを呼び出されているようで。

調理中の魔界厨师。

食事中（コーンスープ）のコーンウオーク。

読書中（ホモ本）のマッスルデビル。

散髪中のボンバーヘッド。

着替え中のインキュバス。

買い物中の盗賊。

入浴中の女魔導師。

入院中の老魔導師。

喚ばれるたびにひと悶着起こしながらも、順次、戦列に加わってくる。

ただし爺さん、アンタは帰れ。——というか、帰してやれ。

最初のうちこそ手数が足りなかったものの、逐次召喚されることで盛り返していく。

——だが、それで僅かに気が緩んでしまったのか。

「——ッ!？」

不意に、アサギは右手を“見えない何か”によって後ろに引っ張られ——

直後、微かに見えた細いラインがアサギの周囲を取り巻いたかと

思うと瞬時に締め、その身を拘束した――！

「！　くっ……！！」

引っ張られる方向に目をやると、そこには先ほど変態を放り投げた大男。

釣竿なんて変な物を武器にしていると思っていたが、なかなかどうして使いこなしているらしい。

だが、感心していただける場合ではない。

左の銃を手放すと、左腕を強引にずらしながら腰の後ろに手を回し――

直後、大男が釣竿を一気に引っ張ろうとするのと同時に光が一閃し、アサギを拘束していたラインを断ち切った。

――アサギの左手には、光の刃を持つビームソード。

刀剣の類は得意ではないが、アサギはこれを重宝していた。

使わないときは小さく、使うときは適度に長く、刃に質量が無いため軽く、なにより、刃筋を立てる必要が無いため、素人が使っても十分な効果が得られる。

いざと言うときの切り札として、これほど便利な物はない。

右に銃を、左に剣を持つアサギに対し、大男のほうもラインの切れた釣竿を捨て、腰に差した刀を構えた。

そして、2人が対峙した、そのとき――

後方から飛んできた光弾が釣竿の大男に当たったかと思うと、彼は忽然と姿を消した。

――そう、吹き飛ばされたのではなく、“消えた”。

何事かと、思わず動きを止めて目を見開いていると――。

「見たか！ 時空転送弾の威力！！」

女性の声と共に、後方から1台のレーザー戦車『アイゼンクロイツ』がやってきた。

プリニーが操縦するアイゼンクロイツ。そのプリニーの頭の上に片足を載せ、いかにもそこが定位置であるかのように堂々と立っている、眼鏡をかけた黒衣の美女。

「あなたは……確か、マジヨラム」

マジヨラムⅡコリアンダー。

最近になってゼタの配下に加わった、別魔界から来たと言う女科学者である。

「実戦にはまだ早いと思ったが……案外いけるものだな」

先ほどの攻撃は、彼女が開発した新兵器らしい。

名前からして、対象をどこかに強制的に転送する兵器のようだが……。

——でも、まだ早いと思うような物を実戦に持ち込まないでほしい。

何かあったらどうするつもりなのか。

だが、そんなアサギの懸念をよそに——

「よし！ 次は最大出力で一気に薙ぎ払え！！」

そんなことを言い出してくれた。

「ほ、本気ッスか！？ 危ないッスよ！？」

パイロットのプリニーも抗議するが

「やれと言ってるのが分からんのか！ このクズ！ ドクズがッ！！」

容赦なく罵りながら、その頭をハイヒールで踏み躪った。

「いた！ 痛いッス！ 分かったッスよー！」

文字通り、泣く泣くプリニーは操縦を再開する。

「……やめてくれない。まったく……」

どうして、ああいう手合いはわざわざ失敗フラグを建てるのか。

アサギはプリニーに同情しつつも、剣を収めて銃を拾うと、その場から速やかに離れていった。

——そして、アイゼンクロイツの砲口に莫大なエネルギーがチャージされ——

「薙ぎ払え！！！！」

マジヨラムの号令と共に、光の帯が敵軍を薙ぎ払う——！

光に飲み込まれた先住民たちは次々と消えていき、敵軍のほとんどが一気に消滅した。

「いいぞお！ とどめだ、薙ぎ払え——！」

マジヨラムは上機嫌で第2射を命じる。が——

「む、無理ッスー！ 計器が滅茶苦茶ッスよー！」

プリニーは悲鳴を上げる。

マジョラムはそのプリニーの頭を押しつけて操縦席を覗き込むと

――

「狂ってやがる……！ 早すぎたんだ……！！」

忌々しげに舌打ちした。

「……なにやってるんだか」

少し離れたところでそれを見ていたアサギは、呆れて溜め息をつく

「……まあ、いいわ。大勢は決したし」

結果として特に問題は無かったし、勝利を導いたことにも違いはない。

そう割り切ると、残敵の掃討は仲間に任せて、アサギはゼタのもとに向かった――。

＊

To Be Continued

*

半オリキャラ2号のソードマスターの女の子。

今回は顔見せだけになってしまいました……。

Intro-2は『ファントム・キングダム』がメインの舞台になります。『先住民』など、ここにもかなり独自設定や独自解釈が入っています。

『ファントム・キングダム』をやったのはだいぶ昔だからほとんどがうる覚え……。

一部4コマネタも混ざってます。

『プリニー』の魔界と『ファントム・キングダム』の魔界は異なる時空にあると解釈しています。

時間と空間が異なるので、互いの世界の時間の流れが一致していません。

ただし、できるだけ過去と未来がごっちゃにならないよう、心がけます。

次回の更新は1/15の予定です。では。

※余談

『機神咆哮デモンベイン』で、終盤でアウグストウスがロイヤルキングダーク3世みたいな格好したのを見たとき、思わず笑ってしまったのを覚えてます。

しかも声まで同じ。

その頃——。

とある場所で、木の葉の衣装を纏った手の平サイズの小人が、自分の身体よりも大きなケーキを頭上に掲げて歩いていた。

この魔界のどこかに隠された、秘密工場で働く妖精の1人である。

工場長のルスカの言いつけでお使いに出たその帰り道に——奇妙な物を見つけた。

それは、地面から上下逆に生えた、筋骨逞しい男の下半身。

あろうことか女子用のブルマを穿いているそれは、ただ地面から生えているだけで周囲の空間を汚染しているかのようだ。

しかし、好奇心旺盛な妖精は、怖い物見たさでその奇怪な物体に近づいていく。

だが、そのとき——

「ふつつんぬうううッ！！！」

重く響く気合と共に、その上半身が一気に飛び出した！

「!?!」

驚く妖精の前に、正体を現した変態は、その獅子のような顔についた泥を払う。

「おおのれえ。下っ端の分際であゝまいきなあ」

なまじオリジナルが魔王クラスであるせいで、悪い意味でプライドが高い。

無駄にタフなので余計にタチが悪かった。

とはいえ、ダメージを受けていることに変わりはない。

そんな変態の目に、ケーキをもった妖精の姿が映った。

「おお。う。気が利くではないか」

勝手に自分の都合のいいように解釈すると、そのケーキを取ろうと手を伸ばし――

――その瞬間、妖精は一目散に逃げ出した。

だが、悪い意味でプライドの高い変態が黙って見逃すはずはなく。

「ぬう。う。こおの無礼者めがあゝ!」

大股開きで妖精を追いかけ始めた。

妖精も必死に逃げるのだが、如何せん歩幅が違いすぎる。

あつという間に追いつかれ――

――そうになったそのとき、1個の瓦礫が飛来し、変態の後頭部に直撃。

「ぬほうっ!？」

変態は奇妙な声をあげて倒れると、すぐに後ろを振り返った。

「なあゝに者であるかあゝ!!」

そこには、瓦礫を抱えた名も無きソードマスターの少女が1人。

変態に怒鳴りつけられると、ビクッと身を竦ませる。

――何か、考えがあつての行動ではなかった。

ただ、自分よりも小さな妖精が、この世のものとは思えない醜惡な怪物に追われていたのが見えたから。

だから、咄嗟に手近にあった瓦礫を投げつけてしまったのだが――

――後が続かない。

「我輩が誰か知っての狼藉であるかあゝ!？」

「……ッ!!」

迫り来る変態に身の危険を感じ、思わず抱えていた瓦礫を投げつける。

「ぶはあ!!」

瓦礫は見事に変態の顔面に直撃するが、タフさだけが取り柄の変態は倒れない。

鼻血をボタボタ垂らしているあたり、しっかり効いているようではあるが。

「ななな何たる暴挙! キサマには常識というものがないのであるか!？」

非常識が具現化したかのような変態にだけは、そんなことを言われたくない。

そのとき、妖精が助けを求めるように名無しの少女の後ろに隠れた。

「まあゝあよいわ。我輩が用があるのはそのケーキ妖精であるからによって。

とおくべつに、大目にみてやろうではないか」

変態は体勢を直しながらそう言うと、

「さゝあ。おとなしく、そやつを渡すがよい」

その丸太のような手を伸ばす。

しかし――

「……!!」

名無しの少女は両手を広げ、その小さな身体を壁にするかのように立ち塞がった。

ここは通さない、と言わんばかりに睨み上げているが――

その目の端には涙が浮かび、広げた両手は小刻みに震えている。

「おおーう！ 健気ではなあーいか!!」

その頼りない小さな壁を前に、変態は大仰な身振りで笑う。

「しかあゝし、悲しいかな。弱肉強食が魔界の掟なのであゝる!!」

変態は、自分より弱い者にはいくらでも強気になれる。

変態がゼタたちに嫌われる原因の1つでもある。

「我輩がたあゝぷりと教育してせんじようではないか」

幼い少女にブルマ姿のマッスルがにじり寄る――！

しかし、そのとき――

「「ゼタ式――」」

男と少女の二重唱が響き――

「「マジカルバレットオオオオオツ！！！」」

巨大な蒼い魔力弾に包まれたゼタ本が、変態めがけて特攻してきた――！！

「ぬおうっ！？」

変態はすかさずかわそうとするが――

「ゼタビィィィィムッ！！！」

ゼタの両目から放たれた二条の光線が変態を貫く！

「あばばばっ！？」

ゼタビームの直撃で変態が体勢を崩した直後——蒼い魔力弾に包まれたゼタの突撃が、変態を弾き飛ばした——ッ!!!!

「ぶるまあああああッ!!!!?」

変態は奇声を響かせながら、間拔けなガニ股ポーズでぐるんぐると回転しつつ吹き飛ばされて——顔面から地面に墜落した。

「ぶべらっちょ!!!?」

一方、反動で弾き飛ばされたゼタ本も空中をくるくる回りながら落ちていくが——

「——よ……つと」

軽やかにジャンプしたアサギが空中でゼタをキャッチし、そのまま名無しの少女の前に着地した。

「……ッ!」

名無しの少女の目に映ったのは、蒼い十字架。

白地のロングコートの背中に十文字に描かれたスカイブルーのラインが、まさに十字架のように見えたのだ。

「即興にしては上手くいったわね」

「キサマ！ 我は弾ではないわッ！！」

「ノリノリだったくせに」

「そ、それとこれとは話が別だッ！」

慣れた感じでやり取りを交わす。

そこに、しぶとく復活した変態が土煙を上げながら走ってきた。

「ひ、酷いではないかぁ！ 我輩がいったいなぁにをしたというのであるかぁー！！」

「犯罪」

一言で切って捨てる。

——想像してみてほしい。

女子用ブルマを穿いた筋骨逞しい大男が、鼻血を垂らしつつニヤニヤ笑いながら、怯える幼い少女ににじり寄る、その光景を。

変質者以外の何者でもない。

「な、なぁんたる言い草！ 我輩がいつ——ぐばぁッ！！？」

変態が反論しようとしたところで、マジヨラムを上に乗せたアイ

ゼンクロイツが突進してきて、変態を撥ね飛ばした。

大地を抉りながら急旋回しつつ停止すると同時に、マジヨラムが飛び降りる。

そして、倒れ伏す変態の元へ歩み寄ると、ハイヒールで踏みつけた――！

「ぶふうっ！？」

「わざわざ迎えに来てやってみれば……あろうことか幼女に手を出すとはな……！」

一切の情け容赦も無く踏む！ 踏む！！ 踏む！！！！

特に股間を重点的にッ！！！！

「おふっ！ ぬふうっ！！ あふん……っ！！！！」

「時空の彼方に消し飛ばしてやろうか！ この――ド変態がッ！！！！」

是非そうしてくれ。

アサギとゼタは心の底からそう思うと、変態の処理はマジヨラムに任せて、小さなソードマスターの少女のほうを向いた。

後ろから聞こえてくる変態の嬌声は意識的に聴覚からシャットア

ウトする。

「さてと、どうするの？　この子も一応“敵”だと思うけど」

「……フン。戦意の無い奴をどうこうするつもりはないわ」

アサギの形だけの確認に、ゼタは鼻を鳴らす。

無論、アサギのほうも同意見である。

そのとき、名無しの少女の背中から緑の妖精が顔を出すと、危険は去ったと判断したのか、そのままどこかへ走っていった。

「あれは……？」

「——もしや、秘密工場の妖精とやらか？」

「……秘密工場？」

「この世界に点在している不思議な道具は、どこかに隠れ住む妖精どもが工場で作った物だと、もっぱらの噂だ。——我も含めて、実際に見た者はおらんがな」

「……魔界にそんなメルヘンな話があるなんて思わなかったわ」

「まあ、所詮は噂だ」

そんな風に話していると、ソードマスターの少女がその妖精を、

少し寂しそうな様子で見送っているのに気付いた。

それを見て——ふと、思い至る。

「……もしかして、あの妖精を守っていたの？」

アサギが問いかけると、ソードマスターの少女は少し驚いた様子で目をぱちぱちさせたあと、こくん、と頷いた。

「——……そう」

その気持ちは尊いものだと思う。しかし——

「馬鹿か貴様は」

アサギが続きを口にする前に、ゼタが一刀のもとに切り捨てた。

「武器の1つも持たずに丸腰でか。しかもそんなカスみたいな魔力で。」

——貴様如きに何ができる!!」

ゼタに怒鳴りつけられ、名無しの少女はビクツと身を竦ませる。

「いいか! この魔界では力が全てだ!! 貴様のような甘——モガッ!？」

なおも叱りつけようとするゼタの口を、アサギが押さえる。

こんな、いかにも気が弱そうな子を頭ごなしに怒鳴りつけても、効果は薄いだろう。

アサギは溜め息をつくど、しゃがみこんで目線を合わせる。

「……いい？ 考え無しに飛び出すのはやめなさい。勇気と無謀は別物なのよ」

諭すようにそう言うと、腰の後ろに片手を回す。

そして、待機状態のビームソードを取り出すと、少女に差し出した。

「ほら、これでも持っていきなさい」

いかに彼女がこの先住民であろうと、丸腰でいるのはあまりに危険だから。

——だが、少女は首を横に振って、受け取ろうとしない。

「——ひょっとして、使い方が分からない？」

しかし、やはり黙って首を振る。

——が、まるで喋らない彼女に、もともと気の長くないゼタが焦れた。

「ええい！ 一言ぐらい喋らんかッ！！」

また怒鳴りつけられて、びくりと震えて縮こまる。

「よしなさいよ」

ゼタを止めつつ、小動物のようにびくつく少女を見て——思い至る。

「……嫌いな？ 戦うことが」

言われ、少女はびくつきながらも首肯した。

「馬鹿か貴様はッ！ この魔界で——モガッ!？」

また怒鳴ろうとしたゼタの口を塞ぎつつ、アサギは確信する。

——要するに、優しすぎるのだ。この子は。

アサギは深く溜め息をつく、ゼタを膝に乗せたまま少女の手を取り——

「優しいのは大いに結構だけどね……。

時には牙を剥いて戦いなさい。何かを守りたいと思ったのなら、なおさらね」

その手に、ビームソードの柄を握らせた。

——そのとき——

けたたましいサイレンの音が辺りに響いた——!!!!

＊

遡ること、数分前――。

「うう……ヒリヒリするツス……」

アイゼンクロイツの操縦席で、プリニーが頭をさすっていた。

なにしろ、マジヨラムがさも当然であるかのようにハイヒールの足を乗せるのだから、痛くなって当然である。

口答えしようものなら容赦無く踏んでくるものだから、黙って我慢するしかない。

下っ端の悲哀がそこに漂っていた。

――だがそのとき、操縦席内を小さな緑の影がウロウロしているのが見えた。

それは、どこかに去ったと思われいてた緑の妖精。

秘密工場で働く妖精は、見慣れない機械に興味を惹かれたらしく、こっそり内部に潜り込んだらしい。

——だが、プリニーからすれば堪ったものではない。

今は主砲のシステムを落として危険が無いようにしているとはいえ、勝手にいじくられたら何が起こるか分からない。

「コラ！ 勝手に触るんじゃないツス！！」

さっさと摘み出すべく手を伸ばすが、妖精はその小さな身体を生かして狭い操縦席内を逃げ回る。

「コ、コラ！ やめろツス！ そんなことしたら……！！」

プリニーの制止も空しく、逃げ回る妖精はコンソールの上を駆け抜け――

直後、危険を示すけたたましい警報の音が響き渡った――！！

「ヒィィィ！ い、言わんこっちゃねーツス……！！」

プリニーは大慌てで転がり出るようにして操縦席から飛び出し、一目散に逃げ出す。

——が、そこに警報の音を聞きつけたマジヨラムが追いついてプリニーを捕まえ、その胸倉を掴みあげた。

「キサマあ！ 何をした！！」

「お、オイラじゃないッスよ！！」

マジヨラムがプリニーを締め上げる間にも、アイゼンクロイツはスパークを撒き散らしながらガタガタと激しく振動し――

やがて、その周囲の空間が半球状に歪み始めた。

「チツ……！ 離れろ！ 巻き込まれるぞ！！」

マジヨラムが腕を振るって警告を飛ばすや否や

「うむ！ 聡明なる我輩はちゃんと引き際というものを心得ているのである！

……決してとって付けた言い訳ではないぞ！？」

一瞬にしてしぶとく復活した変態がそう言い残すと、誰より早く、風より早く、一目散に逃げ出していった。

その逃げ足の速さに呆れつつも、皆、後退するように暴走する戦車から離れていく。

――だがそのとき、小さな緑の妖精が操縦席から顔を出したのが見えた。

「あれは……！！」

「よさんか馬鹿者！」

咄嗟に駆け出そうとしたアサギを、ゼタが一喝して止める。

「でも！」

「手遅れだ！ 諦めろ！」

その言葉に、アサギは齒噛みしつつもその足を止める。

——だが、そのアサギの横を銀髪が駆け抜けていった。

駆け寄り、一足飛びで操縦席の上まで飛び上がると同時に妖精を片手で掴み、そのまま空中でアサギに向けて放り投げる。

アサギが妖精を受け止めると同時に、少女はそのまま操縦席の中に落ち込み——

直後、空間の歪みが強い閃光を放ち——少女は戦車ごと、この世界から消失した。

後に残ったのは、空間ごと半球状に抉られた地面の傷跡のみ。

「くッ……！」

後味の悪い結果に、アサギは知らず、口の端を噛み締める。

「……貴様が気負う必要は無い。止めたのは我だからな」

思いもかけず手元からかけられた神妙な声に、アサギは思わず目を見開く。

——まさか、気を遣われるとは思ってもみなかった。

そして、片手の中にいる緑の妖精に目をやる。

『考え無しに飛び出すのはやめろ』——確かに自分はそう言ったが……

だが、自分はこの妖精を見捨て、そして、名前も知らないあの子は見捨てなかった。

その結果、救われた命が、確かにこの手の中にある。

——そして、彼女が身代わりとなった。

身体も小さく、気も小さいくせに、きっと誰かを助けるためなら、精一杯の“勇気”を振り絞れる心優しい少女が。

——それに引き換え、自分は……。

「……それでも、この足を止めたのは私よ」

いかにゼタに言われたからとて、言われるままにあっさりと見切

りをつけてしまうような自分が、どうして彼女の行為を否定できようか。

——義を見てせざるは、勇無きなり——。

偉そうにもっともらしい理屈を語っておいて、その結果がこれか。

……なんという、無様。

「……フン。ならば、勝手に背負うがいい」

ゼタはどこかわざとらしく鼻を鳴らし、続ける。

「そして、その重さの分だけ強くなることだな。

——二度と、こんなことを体験したくなければな」

「……そうね……」

空を仰ぎ見て、それから深く息をつく。

強引にゼタの弟子扱いにされてから、かなり腕を上げたつもりでいたが……。

とんだ思い上がりだったようだ。

——もつと、強くならなければ。

今はせめて、あの子の無事を祈ろう——。

「……まるで、師匠みたいなことを言うのね？」

少しだけ気が楽になり、冗談交じりを口にしつつ、少しだけ微笑みかける。

「フ……。我は貴様の師匠だからな」

ゼタも微かに口の端を上げて、それに返した。

＊

その頃、異空間では――

「ゼタ……」

黒いドレスの女魔王――背徳者サロメが、その場に不釣り合いな旧式のブラウン管TVを食い入るように見ていた。

そこには、ゼタとアサギのやり取りが映し出されている。

「ゼタの弟子は私だけなのに……ッ！」

その背中からは、周囲の空間を歪ませるほどの暗く濃密なオーラ

が滲み出ている。

「こ、怖いよあれ……」

「ガハハ！ いいオーラだ！」

「あらあら、ミッキーちゃんたら怖がりなんだから」

4本腕の悪魔の上半身『ミッキー』に邪竜の頭の下半身『ドライゼン』、その中央に女性の顔『オルフェリア』を持つ、邪神ヴァルヴォルガも形無しである。

怯えているのはミッキーだけだが。

「ほっほっほ。ゼタ坊も随分と丸くなったもんじやのう。——いや、ええ傾向じゃて」

巨大な老ドラゴン——暗黒竜バビロンが好々爺然とした笑みを浮かべる一方で、青緑の服の青年魔王——破壊神アレクサンダーは不満気に毒づいた。

「けっ……！ 腑抜けやがって。人間の女なんかと仲良くしてんじやねえよ」

しかしそれは、怒っているというよりも、拗ねているように見える。

「おまけに合体攻撃かよ。な～にがゼタし……き……」

なおも不機嫌そうに続けようとして、それが途中で止まる。

「……合体攻撃……」

サロメから放出される負のオーラが一気に増大したから。

「私だってまだやったことないのに……ッ!!!!」

並みの者であれば、その場にいるだけでその精神を破壊されてしまふであろうほどの、ドス黒い暗黒のオーラがさらに放出される。

「……とりあえず、今は下手に刺激しないほうがいいわね」

白いドレスの少女魔王——予言者プラムも遠巻きにしている。

すると——

「うわっはっはっはっ！　だあらしないのう、プラムよ！」

獅子のような顔の半裸のマッスル——某変態のオリジナル、魔帝ロイヤルキングダーク3世を自称するただのアホが、無駄にデカい笑い声を上げながら姿を現した。

「なによアンタ。……余計なことしないでよ？」

プラムはゴミを見るような目でアホを見るが——

「むっふっん。まっあ、そこで見ておれ」

アホはまるで気にした様子もなく、サロメのもとへのっしのっしと歩いていく。

「聞きなさいよ！ 人の話を！」

プラムが制止するがそれも聞かず、空気の読めないアホはサロメが放出する暗黒の空気も気にすることなく近づき、サロメの肩にぽんと手を置いた。

「我が友サロメよ。お前の気持ちはよくわかるぞ」

アホは腰の前垂れの中に手を突っ込んで股間の中をこそごと探ると、そこから黄ばんだシミのついたハンカチを取り出した。

「さーあ、これをくれてやろう。涙を吹くなり、噛み締めるなりするがいい」

それを見た瞬間、プラム、アレク、ミッキーの心は1つになった。

——コイツは本当に碌なことをしないな、と

「……………」

サロメは無言のまま、ゆっくりと立ち上がり——

次の瞬間、ポーーーー！ という衝撃波と共に、アホの姿が掻き消えた。

——いや、消えたのではなく、一瞬にして遥か彼方に吹き飛ばされたのだ。

アホは小さなゴミ粒のようになって飛んでいき——遠くに漂う魔界の1つに衝突した。

「ああゝ！　ボクの魔界がゝ！」

「ガハハ！　よく飛んだな！」

「困るのよねえ。ウチの魔界に生ゴミを捨てないでくれるかしら」

アホが衝突したのはヴァルヴォルガの魔界らしい。

それぞれの人格が三者三様の反応を示す。

「み、見えなかった……。魔力が衰えてるんじゃないかねえのかよ……」

アレクサンダーも思わず冷や汗を流す。

「うゝむ。さすがはヘン……。えゝつと……。なんとかじゃ。ワシらにはできんことを平然とやってのける」

「痺れも憧れもしないけどね……。ッ！」

バビロンがアホに対してズレた評価をする横で、プラムは頭を抱えるようにして吐き捨てた。

「……ところで、あやつは何て名前じゃったかのう？」

「……覚えなくていいわよ。

むしろ、存在そのものを記憶から抹消しなさい。残り少ない記憶容量の無駄だから」

たぶん最初っから間違えて覚えているみたいだが、どうでもいいので訂正もしない。

「チッ……！ 無駄な魔力を使っちゃったよ……」

一方、サロメは心底忌々しげに舌打ちをする。

彼女にとって、魔力は無駄遣いしていい物ではないというのに。

そこに――

「クックック……」

着流しの着物を纏った隻眼の魔王――冥王シールドルが瘴気と共にゆらりと姿を現した。

狂気を湛えた嘲笑を浮かべる魔王の来訪に、サロメだけでなくプラムたちも眉をひそめる。

某アホとは別の意味で、碌なことをしそくない招かれざる客だから。

「……何の用だい？ シールドル」

底冷えするような冷たい目と声で迎える。

不機嫌なのは変わらないが、先程までとは明らかに、そのベクトルが違う。

「いや。なかなか面白いものを見せてもらったと思ってなあ……」

クククと喉の奥で嗤う。

その態度にサロメが眉をひそめ、剣呑な雰囲気が場に流れるが――

「……フン。まあいいさ。面白いものを見せてもらったのは私も同じだしね」

「……なんだと？」

思わぬ切り替えしに、シードルの嘲笑が止まる。

「確か、あの魔界はアンタが創ったんだよねえ」

「……それがどうした」

別に、ゼタの手助けをするつもりでやったわけではない。

新しく創造された大地は、それを創った魔王の性質を反映している。

ならば自分がやればどんな大地が創造されるのか、そこに少し興

味がわいただけ。

「そのアンタが創った魔界に、あんな可愛らしいのがいるなんてねえ」

あの、小さなソードマスターのことを言っているのだろう。

シードルが僅かに顔をしかめた。

「かつての仲間を文字通り地獄の底に叩き込んだアンタの中にも、ほんの一欠片くらいは良心ってヤツが残っていたってことかねえ——勇者シードル」

「貴様ア……ッ！」

さも不愉快そうに顔を歪め、シードルの身体から瘴気混じりの怒気が立ち昇る。

それに対し、サロメも魔力を高めていき、ピリピリと緊迫した空気が立ち込めた。

そのとき——

「ちようちよさん、待ってえ」

場違いな無邪気な声と共に、青緑の髪の少女——トレニアが1匹の蝶を追いかけながら、とてとてとその場を駆け抜けていった。

『『『……………』』』

水を差され、何ともいえない沈黙が場に流れる。

そして——

「…………ふむ。まあ、なんじゃ。その辺にしとかんかのう？」

バビロンがその巨大な顔を近づけて、仲裁に入る。

「そ、そうだよ。2人とも落ち着いて」

「…………私たちは、魔王同士で争うためにわざわざ集まったわけじゃないのよ」

ミッキーとプラムも口添えする。

「…………チッ…………とんだ興醒めだ…………」

1つ舌打ちをして怒気を収めると、着物を翻しながら背を向け、その場から去っていく。

「…………私も失礼させてもらうよ」

サロメも纏っていたオーラを納めると、同様に去っていった。

そうして2人が去った後――

「ぬわぁゝにをするのであるかぁゝゝゝ!!」

遠くのほうから、復活したアホが走ってくるのが見えた。

「……………」

プラムが黙ってその方角に片手を向けると、そこに純白の魔力が収束し――

極太のレーザー状の魔力砲が放たれた。

「ぶるああああッ!!!?」

純白の魔力はアホに直撃すると、さらにそのまま突き進み、アホを再びヴァルヴォルガの魔界に撃ち込んだ。

「ま、またぁゝ!?!」

「ちょっと! ゴミを捨てないでって言ってるでしょ!?!」

「プラム! 迷惑だぞ!」

3人格が苦情を向けてくるが、それをおざなりにあしらいながら、

プラムは深々と溜め息をつく。

「……まったく……なんだか無駄に疲れたわね……」

「……ふむ。なんなら、少しばかり気晴らしでもしてきたらどうじゃ？」

「そうね——いや、でも……」

バビロンの提案に同意しかけて、しかし思案する。

すると——

「心配しなくても、しばらく大きな変化は起こらないわよ」

蝶を追いかけていたはずのトレニアが戻ってきた。

先程までと打って変わって、その物腰は落ち着いている。

「それも予言ってやつか？」

「うん。そうね」

アレクの問いに首肯し、それにプラムが少しムツとした表情を浮かべる。

自分のお株を取られた形になっているのでプラムとしては面白くないのだが、その予言で益を受けたことのあるアレクはトレニアの言を信用している。

「よっしゃ！ んじゃあ、どつか適当なトコでひと暴れしてくっか！」

元々、好戦的な性分である。

ゼタの魔界再生の様子を見続ける日々に退屈していたらしく、雷光と共に姿を消した。

「じゃあボクたちも、ちょっと自分の魔界の様子を見てくるよ」

「ガハハ！ ミッキーは真面目だな！」

「ま、ゴミの処理もしなくちゃいけないしねえ」

ヴァルヴォルガも、遠くに見える自分の魔界に向かっていく。

「ふむ。ワシはこのままゼタ坊の様子を見るとするかの」

他にすることもないしの、と続け、髭を器用に使ってTVを近くに寄せる。

「……なら、私も少し出掛けてくるわね」

癪ではあるが、トレニアの“予言”が当たるのは事実。

それに、バビロンが残るのなら、特に問題は起こらないだろう。

——なにより、しばらくアホの顔は見たくない。

ゼタの所はより凶悪化したアホの分身がいるので却下。

どこか、別魔界にでも足を伸ばしてみようか。

そう思いながら立ち去ろうとした、そのとき——

「——プリニーに気をつけてね」

その背中に、トレニアが声をかけてきた。

——だが『プリニーに気をつけろ』とは、いったいどういう意味だろうか……？

聞き返そうとして足を止め——

「……ッ！ フン、馬鹿馬鹿しい……！」

——ようとして、やめる。

やっぱり、癪に障ったから。

そのまま、振り返ることなくその場から去っていった。

——そして、その場にはバビロンとトレニアだけが残される。

「あーあ、行っちゃった。

ちゃんと教えてあげようと思ったのに」

言いながら、トレニアは意味深な笑みを浮かべる。

「ま、いっか♪ うふふ」

別に、困ることになるわけじゃない。

ちよつと、彼女の経歴に余計な傷がつくだけだ。

「お嬢ちゃんや。こっちにきて一緒に見んかね」

バビロンが髭で手招きしてくる。

まるで、孫を誘うお爺ちゃんのようなのである。

「はーい♪」

トレニアも無邪気にそれに答えると、とてとてとバビロンの元へ
駆けていった――。

＊

To Be Next Track

*

名無しのソードマスターの女の子。

シールドの中に僅かに残っていた勇者の魂を受け継いだ、いわばシールドの娘のような存在です。

……母親がゼタということになるかもしれないけど、そこは気にしない方向で。

ここのアサギはゼタとの関係が良好。

原作のどの“アサギ”とも違う道を歩むことになりそうです。

それにしてもキングダークがやけに目立つ……。

若本ボイスを文字で再現するのは思った以上に難しい……。

さておき。

次回の投稿は1／22の予定です。では。

Track-2『Garnet Moon』-A(前書き)

※『Garnet Moon』..『Another Century
Ys Episode』のOP。

Track-2はA,B,Cの三部構成です。

大幅に予定が変わった結果、バトル無しの日常編になってしまいました
ですが……。

それではどうぞ。

Track 2『Garnet Moon』—A

魔海。元・空中庭園カジノ『アリア』——。

「……えーっと……」

中東の宮殿のような造りをしたそこに造られた舞台の裏で、今回のステージ衣装に着替えたアサギが、衣装をチェックしながら待機していた。

現在、百花殿は復旧までの暫定的な活動場所として、その機能を一時的にここに移して運営を行っていた。

かつては空中に浮かんでいたというアリアだが、下っ端悪魔たちに荒らされて倒産してしまっただけからはその機能も停止し、地上に降りてきていた。

当然、百花殿から毎日アリアに出勤するのは効率が悪いので、主なメンバーはアリアの近くにあるスパリゾートホテル跡地を寝泊りに利用していた。

こちらにも、倒産してしまった施設。

なんでも、忍者とドラゴンが暴れたらしい。物騒な話である。

これらの施設の元の持ち主であるバクチーは、百花殿のお得意様だったらしく、いざという時に、これらを使わせてもらう許可は取り付けてあったらしい。

さすがはカラシナ。おっとりしているようで、抜かりない。

だからこそ、この魔界で百花殿の主として君臨できるのだろうか。

もっとも、そのバクチーとは連絡がつかなかったとのことだが。

アサギが百花殿で勤め始めるより少し前から、ぷっつり音信が途絶えたらしい。

何があったのかは分からないが、碌なことではないだろう。

……やはり、魔界は恐ろしいところだ。

仕方がないので、結局、アリアとホテル跡地をほぼ無断で借りて使っている。

一応、無許可ではないし、既に倒産して持ち主が手放しているとはいえ——これが人間界ならいろいろと面倒な問題が起こりそうなものだが、そこは魔界。

やったもの勝ちというか、その辺りは融通が利くようだ。

ちなみに、何故ホテル跡地で直接運営を行わないかといえば、荒れ具合がかなりひどいからである。

湯治場は壁や天井がブチ抜かれているし、残った壁や床も亀裂だらけ。焼け焦げた跡もいたるところにある。

——当然、全ての穴は大型の厚い布や急造の木の板でしっかりと塞いである。

元々、半露天風呂だったようで、外から見えなくするのには少し骨が折れたが。

庭園も似たような惨状であり、海上コテージとなっている宿泊小屋の中にも、いくつか焼け落ちた物がある。

もっとも、壊されたのは表層だけで内部の機構は無事だったらしく、ちゃんと温泉も出るので、使う“だけ”なら問題は無いのだが――。

とてもじゃないが、接客に使える場所ではない。

アリアは、中の設備や遊具がほとんど無くなって空っぽになっていただけだったので、簡単な改修で使えるようにすることができたのだ。

「……よし。こんなものかな」

チェックを終えたアサギは、一息つく。

今回の衣装は、カラシナやチアダンサーたちが着ているのとはほぼ同じ踊り子の装束。

——というよりも、この前の騒動のせいで作ったばかりのステージ衣装が破れてしまったので、やむなく間に合わせて流用した、というのが実情だったりする。

色は黒。——これも、間に合わせて染めた結果。

当然、かなり露出度が高いのだが、この前よりはましだと思う。

アレに比べれば生地が厚くて身体のラインが出にくいし、アンダーコートもある。

それに、見た目に反してかなり丈夫に作られている。

カラシナたちはこれが戦闘装束も兼ねているというのだから、当然といえば当然か。

この前のようなことにならないように、今後のステージ衣装は戦闘にも耐えうるように作ってくれるとのこと。

これだから頭が上がらない。

「アサギちゃん、出番よっ」

そこに、チアダンサーの1人が呼びにきた。

「ん。はい」

アサギも小走りでそちらに向かう。

——さて。舞台も衣装も間に合わせだけど、だからこそ無様は晒せない。

アサギは気を引き締めると、舞台へと足を進めた。

『——みなさんっ、お待たせしました！

では『月と太陽のめぐり』。どうぞ——！』

＊

夜。アリア裏口——。

「う~~~~ん……！」

今日の仕事を終えたアサギは、ひとつ、大きく背伸びをする。

周りでは、同様に仕事を終えた者たちが、雑談を交わしながら帰

路についている。

コンサートはうまくいったようでなにより。

とはいえ、やはり疲れた。

早く戻って、一風呂浴びて休みたい。

——こんなとき、やはり不便さを感じてしまう。

近くとはいええ、やはり、エリアとホテル跡地との間には、それなりの距離がある。

疲れているうえに、暗い中を歩いて戻らないといけないのは、やはり不便だ。

そもそも、いかに戦う術を持つとはいえ、女の子の夜歩きは危険なのだし。

魔界ならばなおさらに。

早いところ、復旧して欲しいものだ。

もっとも、建物や施設自体の復旧は既にほぼ完了しているのとこのだが——。

やはり、万年桜の植え直しがネックとなっているらしい。

そうそう簡単に用意できる物でないことは、素人目に見ても分かる。

以前、新しい万年桜を発注するために呼んだ妖花族の花屋——たしか、ブーケガルニと言ったか——も、かなり難しい顔をしたのを覚えてる。

まあ、それももうしばらくの辛抱だろう。

お得意様である魔界議員のモーガンの伝手で、調達の目処が立つたらしい。

バクチーの件といい、仕事柄とはいえ、顔が広い。

……それにしても、よくこれだけ色々とこなせるものだ。

観衆の前で歌を披露しても、歌えばそれで終わりの自分とは大違いだと思う。

——それはさておき。

「ウコンはまだ終わらないのかな……？」

一時的に場所を移っても、やることもシフトも基本的にな変わっていない。

なので、一緒に帰る約束をしているのだが――

友達と一緒に帰る約束をして、それを今こうして待っているなんて、なんだか学生みたいだなと思えてくる。

――なんとなく、セーラー服姿の自分とウコンが一緒に下校している光景をイメージしてしまう。

そんな、埒もない思考にふけていると――

「アサギちゃん、まだ帰らないの？」

チアダンサーの1人が話しかけてきた。

「うん。ウコン待ってるから」

アサギは頷きながらそう答えるが、それを聞いたチアダンサーは首を捻る。

「あれ……？　ウコンちゃんなら、少し前までここにいたはずだけど……」

「ふえ？」

思わず、一瞬、固まってしまう。

……もしかして、すっぱかされた？

が、一瞬浮かんだそんな疑念を振り払うように首を振る。

いくらなんでも、それはないと思う。

……素でド忘れしている可能性もくはないのだが。

あるいは――

「待ってください……い……い……!!」

そのとき、遙か前方から聞きなれた声が聞こえてきた。

弱々しい月明かりを頼りに目を凝らしてみると、ウコンが砂煙を巻き上げながら、何かを追い掛け回しているのが見えた。

「……………」

……あるいは、こんなふうに余所事に夢中になってしまっているか。

それはさておき。

「あれは……エリンギヤー？」

暗くてよく分からないが、砂煙を上げながらウコンから逃げ回っているのは、エリンギのような特徴的なシルエットから、おそらくキノコ型の魔物のエリンギヤーだろう。

……ただ、エリンギヤーはあんなふうに爆走できるものだっただ

ろうか？

エリンギヤー自体は所々で目にしているが、それこそキノコのようにじっとしているところしか見たことがない。

まあ、さすがにまったく動けない、ということはないのだろうか。

——ともあれ。

どうして、ウコンが爆走するキノコを追いつけ回しているのかは分からないが——

とりあえず、ちゃんと前を見て走るべきだと思う。

全力疾走なのは分かるが、あれはもう頭からぶつかっていく体勢だ。

そう心中でツッコむやいなや——

「あわわわわっ!？」

案の定、ウコンは何かにつまずいてバランスを崩し、頭から砂浜に突っ込んだ。

そしてその隙に、爆走するキノコはどこかに走り去ってしまった。

「ぺっぺっぺ!……す、砂があ……」

砂まみれになったウコンは、涙目で口に入った砂を吐き出す。

その様子にアサギは小さく溜め息をついて駆け寄ると、片手を差し出した。

「……大丈夫？」

「は、はい……。あうう……。口の中がジャリジャリしますう……」

片手で口を押さえながら、アサギの手を取って立ち上がる。

「――で、なんであんな変なキノコを追いかけていたわけ？」

「……まさかとは思うけど、食べるつもり？」

「いえ、違いますけど……。アサギさんって、キノコ嫌いなんですか？」

「そうじゃなくて……。気持ち悪いでしょ、あんなの」

いかに魔物とはいえ、意思疎通が可能な相手を食することには忌避感がある。

「……どうも魔界の住人は、その辺りを気にしない連中が多いようだが。」

そんな風に話していると――。

「……あれ？」

遠くのほうから、何かが砂煙を上げながら接近してくるのに、チ

アダンサーが気付く。

アサギとウコンもその方向を見ると、先程逃げ去ったはずのエリンギヤーが戻ってくるのが見えた。

なんでわざわざ戻ってきたのか——と思っていたら、そのエリンギヤーはいったん足を止めるとアサギのほうを向いて——

「オマエ……ムカつくエリ！」

言うと同時に、いきなり目から白い光線を発射した！

「んなああああ!!?」

咄嗟に横に跳んで回避する。が——

そのまま頭から砂浜に突っ込んでしまい、今度はアサギが砂まみれになってしまう。

一方、外れた光線はそのまま真っすぐ海のほうに向かって飛んでいき、やがて見えなくなった。

「うっ……ぺっぺっぺ！」

アサギが砂を吐き出しながら起き上がる隙に、エリンギヤーは用は済んだとばかりに砂煙を巻き上げながら逃げ去っていった。

「あ！ 待て、この……!!」

だが、アサギが顔の砂を払いながら体勢を立て直したときには、

既に手の届かない所まで逃げてしまっている。

「なんなのよ、まったく……！」

身体の砂を払い落としながら立ち上がり、不機嫌そうに息をつく。

「……『気持ち悪い』って言ったから、怒ったんじゃないですか？」

「そういう意味で言ったんじゃないのに……」

「というか、聞こえたのか。 なんていう地獄耳。」

「いや、それよりも――」

「……あれ、ホントにエリングガー？」

走るだけならともかく、まさか目からビームを撃つとは。

「……たぶん、エリンダムじゃないかしら」

チアダンサーが自信なさげに答える。

「……えりんだむ？」

「何ですか？ それ」

アサギとウコンの問いに、チアダンサーは「アタシもよくは知らないんだけど」と前置きして、続ける。

「珍茸族の最上位種らしいんだけど……魔王の魂が宿っている、な

んて噂もあるのよね」

「「ま、魔王!？」」

思わず、驚きの声がハモる。

「ああああの。ひょっとして、かなりヤバイ相手だったりします?」

ウコンが慌てるのも無理はない。

魔王クラスなんて、とてもじゃないが勝てる相手じゃないのだ。

アサギの中に魔王クラスの記憶は無いが、それでも、暴走したカラシナの相手はしたことがあるし、その暴走カラシナなんか比べものにならないほど強いとのことなのだから、自分が勝てない相手だということは分かる。

稀に、一般クラスの悪魔が魔王クラスから一本取るという話もあるそうだが、そういう場合、魔王のほうが相手に合わせてやっているから、勝負が成立しているとのこと。

——あるいは、その魔王が何かしらの理由で大幅に力を削がれた状態であるか、だ。

真偽の程は分からないが、魔王クラスは惑星破壊が可能だとも聞いたことがある。

そんな相手とガチでやり合おうものなら、ウコンはもちろんのこと、人間であるアサギなんかはひとたまりもない。

「うゝん……。あくまで噂だし、そんなに気にすることはないと思うわよ？」

「……まあ、ホントに魔王クラスなら、逃げたりしないだろうし」

「チアダンサーの意見に、アサギも同意する。」

「そ、そうですね。……はぁ……」

あからさまにほっとした様子で、ウコンは息をつく。

……まあ、気持ちは分からなくてもないが。

「……とにかく、もう帰ろ？ 早くお風呂に入りたいし」

言いながら、アサギは髪についた砂をうっとうしそうに払う。

「そうですね。——でも、ちょっと待っててください」

ウコンはそう言うところかへ走っていき——

自分の身体よりも大きな箱を、頭上に持ち上げて戻ってきた。

「な、何それ！！？」

思わず、指差してしまう。

「アサギさん待ってる間に、ちょっとキノコ狩りしてたんです」

ウコンが持ち上げている巨大な箱からは「やめろエリ」とか「ここから出すエリ!」とか言う声が聞こえてくる。

「……食べないんじゃないの?」

アサギはうんざりした顔で指摘するが――

「食べませんよ?」

ウコンはきょとした顔で小首を傾げてくる。

「……あゝ……もういいわ、後で聞くから」

いい加減、疲れてきた。

今はとにかく、先に休みたい。

「じゃあ、アタシも一緒させてもらっていいかしら?」

チアダンサーの伺いに首肯すると、アサギたちはようやく帰路についた。

*

「ふう……」

ホテル跡地に戻ったアサギとウコンは、一風呂浴びてさっぱりした後、寝泊りに使っているコテージに戻ってきていた。

そこで、共用しているツインのベッドの上で横になっていたのだが……。

『『エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。』』

表に置いてある箱から響いてくるキノコの合唱が、大変うるさい。

「……ねえ。アレ、ホントにどうするつもりなの？」

うんざりした顔で合唱の響いてくるほうを指差しながら、隣のウコンに聞く。

まあ、どのみち聞くつもりではあったのだが。

「ちょっと送ろうと思ひまして」

言いながら、ウコンは身体を起こすと近くに置いてある自分の荷物のところに向かい、中から1枚の手紙を取り出した。

そして、それをアサギに差し出してくる。

「……これは？」

アサギも身体を起こして、それを受け取る。

「実は、マノアカズのアサギさんと文通を始めたんです」

「マノアカズの……」

確か、この前の騒動の原因となったナスビを送ってきた相手だったか。

まあ、向こうも意図したものではないのだろうが。

その手紙を渡すということは、読めば分かる、ということなのだろう。

「読んでいいの？」

「はい」

一応、断りを入れて許可を貰うと、アサギはその手紙を開いてみた。

『せ” んりやく ウコンさま

せんし” つは、こちらか” おくったナスヒ” か” け” んいんて” おさわか” せして

しまったように”、たいへん もうしわけ ありませんて”した
おわひ”に こちらて”とれた くだ”ものを おくります
おおきくなるといへは”、さいきん、マノアカス”に、あたらし
い ほ”うけんしゃ
か”やってきました

なんて”も、キノコをたへ”ると おおきくなれる そうて”す
て”も、このキノコでは おおきくなれす” しょんほ”り
していました

マノアカス”て” かせいた”おかねて” マンションをかって、
あにを みかえして
やるのだと いきこ”んで いました

かれ とは、なかよくなれる ような きが しました
そちらに、なにか よいキノコは こ”さ”いませんて”しょう
か？

もし よろしければ こ”いっほ。う ねか”います
けいく”』

「……………」

なんというか、随分と変わった書き方である。

ひらがなとカタカナばかりなうえ、濁音・半濁音の使い方が独特すぎる。

——まあ、それはともかく。

要するに、向こうがキノコの情報を欲したから、現物を送ろうと思った、ということなのだろうが……。

「……なんで、よりによってエリンギヤーなのよ」

どのみち食用なのか、あいつらは。手紙の内容的に。

というか、自分では食べない物を送るつもりなのか。コイツは。

魔界の住人のこういうところには、時々ついていけないことがある。

「普通のキノコ送ればいいのに」

そう指摘するが——

「大きくなるキノコがないので、大きなキノコを送ろうと思いついて」

……どうしてそういう発想が出てくるのか。

あんなものを大量に送りつけられても、向こうだって困るだろうに。

「……はあ。まあ、いいか」

いい加減、ツツコむのにも疲れてきた。

手紙をウコンに返すと、再び横になる。

——今日は、なんだか無駄に疲れた。

さっさと寝てしまおうとしよう。

ウコンも手紙を片付けると、隣で横になる。

枕元のライトを消すと、目を閉じて眠りにつく。

——が……。

『『エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。エリー。』』』

「……ああもう、うるさいなあ……!」

外のキノコの騒音のせいで寝付けない。

寝返りを打ちながら横を見ると、既にウコンは穏やかな寝息を立てている。

……なんで、このうるさい中で眠れるのか。

他から苦情とかが来ないあたり、気にしているのは自分だけかもしれないが。

すると――

「うゝん……」

ウコンのほうも寝返りを打って、アサギとの距離が近くなる。

そして――

「え……」

抱き枕か何かと間違えたのか、そのまま両手と両足を回して、木にしがみつくコアラのように抱きついてきた。

「ちょ、ちょっと!?!」

さすがに慌てる。

断じてそっちの趣味は無い。無いのだが――

ウコンは普通に可愛い女の子だから、いろいろと困る。

――妙に心臓がドキドキしてきているのは、単にちょっと驚いた

だけ。きつとそう。

「ほ、ほら。ちょっと離して……！」

声をかけながら、とにかく離れようと身体を動かす。

——だが、アサギは失念していた。

——ギシ……ッ——

「い、痛っ……！？」

今抱きついているのは、巨大な斧を軽々と振り回す怪力の持ち主だということを。

アサギが離れようとしたために、ウコンは寝たまま無意識に力を入れたのだろうが、寝ているせいで力加減が碌にできていないらしい。

万力のような力で締め上げられて、アサギの身体が軋みを上げる。

「い、いだだだだ！ 痛いってば……！」

——前言撤回。

全っ然可愛くない。この馬鹿力。

振りほどこうにも、両腕を抑えられた体勢になっているし、そも

そもパワーが違う。

おまけに完全に熟睡しているらしく、すぐ間近で半泣きで訴えているというのに、全然起きる気配がない。

「こ、の……！ 起、きろお！！ あたしを、殺す気かあああああッ……！！」

とうとう耐えかねたアサギの怒鳴り声が、夜の魔海に響き渡った――。

＊

翌早朝――。

「たのもーでござる！ たのもーでござる……！！」

コテージのドアをドンドンと叩く来訪者の声に、アサギは覚醒を余儀なくされる。

眠いのを我慢しながらノロノロと上体を起こすが、室内はまだ暗い。

まだ日の出前ではないのだろうか。

「うう……。誰よ、まったく……」

いっそのこと無視してやろうか、とも思ったが――

「たのもーでござる!!」

いまだにドアを叩いてくるので、そういう訳にもいかない。

深々と溜め息をつく、嫌々ベッドから出て、パジャマのままドアに向かう。

そしてドアを開けると――

「おはようでござるっ!!!!」

いまだ薄暗い中、流れるような長い黒髪をポニーテールにして、背中に籠を背負った少女が、ぺこりと頭を下げた。

「……誰？」

アサギは初めて見る顔である。

巫女装束に良く似た服装をしているが、上の着物の丈が極端に短い。

胸にはさらしを巻いて隠しているものの、巫女にしては肌の露出が多い気がする。

「これは申し遅れました！ 拙者、本日より運送の仕事を任される運びとなりました、魔界運送兼、配達侍の八ツ墓かいがらと申します！」

なにやらテンションが高い様子で自己紹介をして、続ける。

「配達のご用命とのことで、急ぎ参上した次第でござる！」

「……そう」

変わった名前だな——とか、魔界運送と配達侍がどう違うのか——とか、そもそも配達侍ってなんだ——とか、ツツコミどころはいろいろあるが——

とりあえず、眠そうな半目のまま、黙って東の方角を指差した。

——その先にあるのは、魔海の水平線。

太陽はいまだに昇っておらず、水平線付近の空が、夜明けが近いことを示す薄紫色に染まっている。

「……今、何時だと思ってるの？」

不機嫌な様子を隠そうともせずにそう告げると、

「あ、朝駆けは迷惑でござったか……。そうとは知らず拙者は……。とんだ阿呆でござるな……。……ぐすん」

ひどくショックを受けた様子でみるみる落ち込んでいき、しょんぼりした様子で涙ぐみながらすすごすこと立ち去ろうとする。

「ああもう！ 帰らなくていいから！」

なんだか、自分のほうが悪者のような気分になってくる。

……間違いなく、被害者は自分だというのに。なんだ、この理不尽は。

半ばやけっぱちで自分の頭をぐしゃぐしゃと掻きまわすと、諦めたように溜め息を1つついた。

……まあ、悪い子ではないと思う。

なんとなく、真面目で純朴そうに見えることだし。

ただ、ちょっと張り切りすぎただけなのだろう。

「……とりあえず、上がって？」

アサギは思考を切り替えると、かいがらをコテージに招き入れた。

「お、お邪魔するでござる」

かいがらをつれて室内に戻ると、十中八九、彼女を呼んだ本人であらうウコンは、いまだにベッドで熟睡していた。

……なんだか腹が立ってくる。

が、それをぐっと堪えて起こしにかかる。

「ほら、起きて！」

配送するのは表にあるキノコの箱だろうし、アサギが代わりに手続きをやっても構わないのかもしれないが、やはり、そういうわけにはいかないだろう。

「……う、ううん……。なんですかあ……」

肩を掴んで揺さぶると、目を閉じたまま眠そうに反応を返す。

「配達侍とかいうのが来たの。呼んだのウコンでしょ？」

「……はいたつ……。ああ、はい……」

やはりかいがらを呼んだのはウコンらしく、ノロノロと起き上がりがながら、ひとつ大きく背伸びをする。

「――さて、と……」

ウコンが起き出すのを確認したアサギは、次いで、所在無さげに立ち尽くしているかいがらに目を向ける。

——とりあえず、お茶のひとつでも出すべきだろうか。

そう思い至ると、荷物から『ウーシャン五香茶』のペットボトルを取り出す。

そして、コテージ備え付けのコップを3つ用意してそれぞれに注ぐと、1つをウコンに、1つをかいがらに手渡す。

——客にペットボトルの茶を出すのもどうかという気がしなくもないが、どうせ、既にパジャマで応対しているわけだし、今更だ。

「あ、どーも」

「か、かたじけないでござる……っ!」

ウコンは慣れた感じで、かいがらはやや緊張気味の反応を返す。

アサギも最後のコップを取ってベッドに腰を下ろしてお茶を一口ほど口にとすると――

「とりあえず、配達侍って何？ 魔界運送とどう違うの？」

かいがらに話を向ける。

——聞いたことに、特に深い意味は無い。

ただ、どうもカチカチに緊張しているように見えるので、少し話したほうがいいような気がしただけ。

「はい！ 我々ハツ墓一族は先祖代々プリニーに武器を配達することを生業としておりまして、それ故に配達侍を名乗っているのだから」

先祖伝来の仕事のことを話すのが嬉しいようで、はきはきと話し出す。

――が。

「うわ。思いっきりニツチな商売ですね。それ」

ウコンがいつもの直球な物言いです。

……まあ、アサギも同様の感想を抱いたわけだが。

いくらなんでもピンポイント過ぎる。よく先祖代々続けられたものだ。

「は、はい……。おっしゃるとおりでござるう……」

ウコンに指摘されたかいはらは、目に見えてしょんぼりしていく。

「やはり、配達侍だけでは食べていけず、こうして魔界運送を二足目の草鞋として履いている次第でござる……」

……思ったことをそのまま口にするのは、もう少し控えて欲しいと思う。

アサギ自身は既に慣れているが、やはり初対面の相手には堪える

場合があるだろう。

「……まあ、それでも先祖代々の仕事を絶やしてないのは、たいしたことだと思うけど」

仕方ないので、アサギがフォローに入る。

「そ、そうでござるか!？」

途端に、顔がぱあっと明るくなる。

……なんというか、素直というか、子供のような反応をする子である。

外見はアサギと同年代くらいに見えるのだが——実年齢は遥かに上だろうが——精神年齢は見た目より幼いのかもしれない。

——それはさておき。

「——じゃあ、ウコンもしっかり目を覚ましたみたいだし、表の荷物のお話でもする?」

いつまでも雑談をしているわけにもいかないので、話を戻す。

「そ、そうでござった。して、配達のご用命はいかに!？」

……もしかして、忘れていたのか。

本当にこの子は大丈夫だろうか？

そんなアサギの懸念をよそに――

「荷物外に置いてるんで、ちょっと来てください」

ウコンは特に気にした様子もなく、かいがらを連れて外に向かい、アサギもそれについて外に出た。

「――と、いうわけなんで、よろしくお願いします」

「はっ。承知仕った！」

特に問題も無く話は進み、手続きは終わる。

箱の中のキノコたちも眠っているらしく、おとなしいものだ。

――しかし、だ。

「……コレ、本当に1人で運べる？」

全部で8匹ものエリンギヤーが入っているというこの箱は、そうとうな大きさがある。

もちろん、重さも。

彼女に運べるかどうか、アサギは不安に思っていたが――

「心配御無用でござる！」

かいがらは背負っていた籠を放して、両手に持ち直す。

そして、それを上下逆にひっくり返すと――

「とうっ」

掛け声と共にジャンプして、巨大な箱の上に載せるように叩きつける。

――それと同時に、巨大な箱がまるで柔らかいゼリーか何かのようになり、つるんつとも、にゆるんつともいえない奇妙な感じで、籠の中に吸い込まれていった。

「……………」

アサギは思わず呆然として――

「……これだから魔界は嫌なのよ、もう……」

うんざりしたように呟きながら頭を押さえた。

こういう非常識には、心底ついていけないと思う。

「……アサギさん、いい加減に慣れたほうがいいですよ？」

ウコンが少し呆れたような目を向けてくる。

「……それは嫌」

うまく言えないが、なんというか、越えてはならない一線のような気がする。

「……どうかしたでござるか？」

籠を背負いなおしたかいがらが小首を傾げてくる。

「ん。なんでもないから。こっちの話」

軽く手を振ってごまかすと――

「それより、今度からは普通の時間に来てよ」

冗談交じりに笑みを浮かべながら言う。

「はうっ！ 肝に銘じておくでござる……！」

かいがらは申し訳なさそうに縮こまると、しかしすぐに気を取り直して

「……では、拙者の命に代えても配達しておくでござる！」

ひとつ敬礼をすると、一目散に駆け出していった。

その後姿を見送り、やがて見えなくなると――

「ん……ふぁあゝゝ……」

アサギは大きなあくびをすると、がっくりと脱力した。

碌に眠れてないので、やはり眠い。

隣では、ウコンも同様に眠そうにしている。

さすがのウコンも、これだけ早く起こされると眠いらしい。

東の水平線を見ると、薄紫の部分がだいぶ広がって、空が白んできている。

もうすぐ日の出だろう。

とはいえ――

「……寝よ」

眠いものは眠いのだ。

二度寝するべくコテージに向かう。

――だが、そのとき――

何の前触れも無く、コテージの上の空間がぐにやりと歪んだ――！

「「な……ッ！！？」」

2人が足を止めてそれを見上げると、それはすぐに“孔”となり

――

そこから“何か”が落ちてきて、コテージを押し潰した――！

「「……………！」」

あまりの出来事に、思わず呆然と立ち尽くしてしまう。

そして――

「…………泣いていい？…………もう…………」

誰に問うでもなく、本当に泣きそうな声でアサギは呟いた。

疲れているのに、昨日の夜からトラブル続き。

爆走キノコにビームを撃たれるは、キノコの合唱のせいで眠れないは、ウコンに締め殺されそうになるは、ほとんど寝てないのに夜明け前に叩き起こされるは。

挙句、休もうとした矢先に寢床を粉碎される。

……自分がいったい何をしたというのか。

「え、えっと。元気出してください」

「……うん。……ありがとう」

……もう少しだけ、我慢しよう。

大変な目に遭っているのは自分だけではないのだから。

——事ここに至って、さすがに他の者たちも起きたらしく、周りのコテージから次々と外に出てくる。

「——さて、と……」

いつまでもこうしてはいられない。

とりあえず、何が起こったのか確認しなければ。

「——来い」

両手を突き出して呟くと、コテージの残骸の隙間からATA／D TDが飛び出してくる。

その双銃をキャッチすると同時に粒子化。

粒子がアサギの両手を包み込むと、そのまま白と黒の手袋へと変化した。

「……よし」

手の開閉を繰り返して具合を確かめると、残骸の山に向かう。

「あ、待ってください」

ウコンもそれに続いてくる。

「大丈夫？」

アサギは手袋で両手を保護しているが、ウコンは素手である。

A T A / D T D は使い手から離れすぎると元の銃に戻ってしまうから、どちらか片方を貸したとしても、意味は無い。

「へーきです。わたし、頑丈ですから」

そう言うのと、早速コテージの残骸をどかしにかかり、アサギもそれに続く。

いっそマジカルバレットで一気に吹っ飛ばしてやりたい気分だが、まだ中に荷物が残っているから、そういうわけにもいかない。

仕方がないので手作業でどかしていくと、“それ”がすぐに姿を現した。

「これって……戦車？」

「……ですね」

前部にリーダーのような形状の主砲を持つレーザー戦車、アイゼンクロイツ。

いったい何トンあるのか知らないが、こんな物が落ちてきたら、確かにコテージなんかひとたまりもないだろう。

むしろ、よく床が抜けなかったものだ。

とりあえず、荷物は無事のようにだ。

木屑やら粉塵やらにまみれているが、戦車に押し潰されるよりはマシだろう。

だが、ベッドは完全に使い物にならない。

「うつわゝ。危なかったです……！」

ウコンが身を竦ませながら口にしたのを聞いて、アサギもそれに気付いた。

そういえばそうだ。

もし起きていなかったなら、何も分からないまま押し潰されてしまっていただろう。

そう思うと、背筋がぞつとする。

偶然とはいえ、そういう意味では、かいがらに感謝すべきだろう。

今度会ったら、頭でも撫でようか。

「アレですね。『早起きは3文の得』ってヤツです」

「あたしらの命は3文か」

安い命である。

——ちなみに、正しくは『3文の得』ではなく『三文の徳』なのだが、どちらもその間違いに気付いていない。

それはともかく。

「それにしても、いったいどこの馬鹿よ。まったく……」

故意か偶然か知らないが、迷惑千番極まりない。

パイロットに文句のひとつでも言ってやろうと、アサギは戦車に飛び乗ると、操縦席を覗き込んだ。

そして――

「……子供？」

気を失った、銀髪の小さな女の子を発見した。

* To Be Continued *

Track 2『Garnet Moon』-A(後書き)

※『月と太陽のめぐり』…『ルパン三世 トワイライト☆ジェミニの秘密』のED。

デイスガイア世界はパワーバランスが分かりにくいです……。特に『プリニー』だと尚更に。

マノアカズの文通ネタはほぼ思いつき。
いつまで続けられるかは分かりません。

次回の投稿は1／29の予定です。では。

Track 2『Garnet Moon』— B

「——とりあえず、これでよし、と」

戦車に潰されたコテージから別のコテージに移ったアサギたちは、戦車から連れ出した女の子をベッドに寝かせると、一息ついた。

ここに運んでくるまでに、物珍しさから野次馬に囲まれたりもしたが、朝が早く、当の本人に意識が無いこともあって、今は静かなものである。

——アサギとしては、本当は自分も寝たいところなのだが、初対面の子供と一緒に寝るわけにもいかなかったので我慢する。

赤い髪留めでポニーテールのようにしてまとめた、ボリュームのある銀髪。

白が基調の着物に緋袴と、服装はかいがらとよく似ている。

彼女と違って露出はほぼ無いし、赤い鉢金をしている点も異なるが。

「さて、と。……どうする？」

「とりあえず、着替えませんか？」

女の子を運ぶアサギの代わりに、2人の荷物をまとめて持ってきて

てくれたウコンが、その荷物を降ろしながら答える。

「……そうね」

いつまでもパジャマのままというわけにもいかない。

さっさと脱いで2人ともショーツ1枚になると、アサギはキャミソールを、ウコンは胸に巻く太いベルトを手取る。

「……なんにせよ、カラシナさんにはちゃんと言わないと」

「そうですねー。わたしがひとつ走りしてきましようか？」

「……いや、もう朝だし。向こうからこっちに来ると思うけど」

「――ああ、確かに」

着替えながら会話を交わす。

「じゃあ、わたしは外で待つとします。アサギさんはどーします？」

頭用のベルトを額に巻きながらウコンがそう言うと、

「あたしは――」

アサギはコートを羽織ながらテーブルに向かい、椅子に座ると――

「寝る」

自分の両腕を枕にして机に突っ伏した。

「ちょ、ちょっと!?!? ずるいですよ!?!?」

当然、ウコンから苦情が来るが

「……昨日の晩、あたしを絞め殺しかけたのはどこの誰だっけ」

「あう!?!?」

「……誰かさんが集めたキノコがうるさい御蔭で全然眠れなかったし」

「あううっ!?!?」

突っ伏した姿勢のままアサギがジト目で睨みながら反撃。

痛いところを突かれて、ウコンも引かざるを得ない。

「……とにかく。少しでもいいから寝たいの、あたしは……」

少し悪いと思うが、事実として、睡眠時間はこっちのほうが少ないのだ。

譲るつもりは無い。

「あうう……。わかりましたあ……」

ウコンもしぶしぶ引き下がると、コテージから外へ出て行った。

アサギはそのまま、ドアが閉まるのを見届けると――

「…………ふう…………」

数分もしないうちに、眠りに落ちていった。

——それから、しばらくして——

「……………」

ベッドで眠っていた、名無しの少女が目を覚ました。

「……………?」

見覚えの無い天井。見覚えの無い室内。

どこか不思議な香りがする空気に、外から聞こえてくる水のような音。

状況を把握できないまま周囲を見回して——すぐに、見覚えのあるものを見つけた。

白地に青い十字のラインが描かれた、ロングコートの背中。

ベッドから降り、歩み寄ってみるが——コートの主は寝ているらしい。

起こすわけにもいかないけれど、今どうすればいいのかも分からない。

所在無く室内を見回していると、ふと、開きっぱなしの丸い窓が目に入った。

外から聞こえてくる音に興味を引かれて、そこに向かう。

自分の目線より高い位置にある窓に、ぴよんと飛びついて外を見ると——

「……………！」

辺り一面が水に浸かっている。

周囲には、同じような形をした小屋が、いくつも水の上に建てられている。

始めてみるその光景に、思わず目を奪われる。

外の様子に大いに興味を引かれ、しばらくそれを眺めていたが——

勝手に外に出るわけにもいかないだろう。

いつまでも外を眺めていても仕方がないので、とりあえず、ベッドに戻って腰掛ける。

「……………」

やることもなく、手持ち無沙汰に足をぶらぶらさせていると――

「……………うん……………」

コートの主のほうから声が聞こえ、ほぼ反射的にそっちを見るが、別に起きたわけではなく、ただ寝返りを打っただけのようだ。

――だが、それでバランスが崩れてしまったらしい。

ずるりと、その身が滑るように傾いていき――

「……………ッ！」

咄嗟に座っていたベッドから飛び出して、倒れそうになるその身体を支えた。

「んなッ!? わわッ!?」

さすがに目を覚まし、慌てて手足をばたつかせ、机にしがみついて身体を支える。

「あ、危な……」

なんとか体勢を立て直すと、頭を振って起き上がり――

「……うん？　――ああ、起きたんだ」

名無しの少女の存在に気付いた。

「もしかして、さっき支えてくれた？」

問いかけに、コクンと首肯して答える。

「そっか。ありがとう」

優しげに微笑みながら頭を撫でてくる。

――だが、名無しの少女はそれに違和感を感じた。

……なんだか、どこかおかしいような……？

会ったのは、本当に、ほんの少しの間だけ。

時間にして、10分にも満たないだろう。

だが、それにしても性格が違って見えるように見える。

もっと落ち着いた、冷静な雰囲気の人だったように思ったのだが……。

思わず、まじまじと観察してしまう。

服装は同じだと思う。少なくとも、背中の青い十字架ははっきりと覚えている。

顔立ちは——少し、違うような……？

うまく表現できないが、もっと真面目で大人っぽい感じだったと思う。

この人は、なんというか、可愛い感じがする。

それに——声が、違う……？

……別人、なのだろうか？

しかし、それにしては良く似ている気がする。

——名無しの少女が不思議に思う一方で——

アサギもまた、困惑していた。

銀髪の女の子が、じくじくっと見つめてくるのだから。

「え、えつと……何？」

とりあえず、しゃがみこんで目線を合わせながら聞いてみる。

が、女の子はなおも黙ったままアサギの顔をじっと見つめ――

一歩近づくと、アサギの顔をぺたぺた触り始めた。

「ちょ、ちょっと!？」

慌てるものの、対処に困って体が固まってしまう。

これが悪戯なら遠慮なく叱りつけてやるところだが、悪意を感じないので、どうすればいいのか分からないのだ。

女の子はすぐにそれをやめて離れると――

「……………?」

不思議そうに、小首をかしげた。

……首をかしげたいのはこっちのほうだ。

アサギはそう思うものの、悪意の無い子供を相手にそんなことを言うこともできず。

お互いに見つめあったまま、なんともいえない沈黙が流れる。

そのとき――

「アサギさーん！ 起きてくださーい！」

ボタンと音を立ててドアが開き、ウコンがカラシナを連れて戻ってきた。

——いや、カラシナだけではない。

「どんな子？ ちょっと見せて」

「お邪魔するわね」

「2人に子供ができたって？」

わらわらと夜魔たちが入ってくる。

……どうやら、事のついでに深夜組みの連中の耳にも入ったらしい。

が、狭いコテージの中にこんなに入ってこないで欲しい。

——あと、子供ができたと言った奴。拳骨^{ツッコミ}入れてやるから前に出ろ。

「へえ。この子が……」

「可愛い子じゃない」

「どっちにも似てないわね」

似ていてたまるか。

外見的にも目立つ女の子は、たちまちムチムチの美女たちに囲まれる。

だが、いきなり大勢——それも、見慣れない面々に囲まれて怯えたいらしい。

ビクリと身を竦めると、

「————ッ!」

逃げ込むように、涙目になってアサギの胸に飛び込んできた。

「おおっ!」

思わぬ行動と、小柄な体軀からは予想もつかない衝撃の強さに、アサギは面食らう。

——この子、意外と力が強い。

それより、なんでこっちにくるのか、アサギとしては戸惑うばかりなのだが——

ぎゅっと、コートにしがみついてくる小さな手を放ってもおけず。

「ほ、ほら。大丈夫だから」

困惑しつつも、そのまま抱き上げながら、なんとかだめる。

女の子は一瞬、少し驚いたようにアサギの顔を見上げて――

「……………」

少し安心したかのように、その身を任せてきた。

「あらあら。懐かれちゃってるわね」

「む、む………」

リリスがからかうように言ってくるが、アサギとしてはどう返せばいいのか困る。

――まあ、懐かれて悪い気はしないのだが。

「はむはむ……。そろそろいいですか？　みなさん」

カラシナの一声で、皆がそこに注目する。

「はむはむ……。これからお話しするので、ちょっとお席をはずしてくださいね」

『『『は〜い』』』

カラシナの言葉に夜魔たちは素直に従って、次々と退室していく。

そして、室内はアサギ・ウコン・カラシナ、そして女の子の4人だけになる。

「えーっと……」

抱きついているのを降ろすべきか、迷っていると

「そのまま、お席にどうぞ。……はむはむ」

カラシナに促され、抱きかかえたまま椅子に座る。

続けて、カラシナとウコンも席に着く。

「はむはむ……。はい、どうぞ」

カラシナはドーナツを食べながら、他のドーナツを取り出して皿に乗せると、女の子の手前に押し出す。

「……………?」

女の子は手前に差し出されたドーナツを見て、カラシナを見て、アサギを見て――

小さな両手でドーナツを掴むと、アサギに向けて差し出した。

「ふえっ?」

いきなり顔のすぐ前にドーナツを向けられて、一瞬、面食らうが

「いやいやいや。あたしのじゃないから。あなたのだから」

首を横に振ってそれを押しとどめる。

「……………」

女の子はぱちぱちと瞬きしてから手に持つドーナツに目をやると、そのドーナツを皿の上に置きなおして――

ドーナツのリングの一部を、その小さな手でちぎり分けた。

「「「?」」」

アサギたちが不思議に思っただけの様子を見ると、さらに続けて2箇所をちぎり、いびつながらも3分割する。

そうして3分割したドーナツの1つを掴むと、ウコンに向けて差し出した。

「はい？ わたしに、ですか？」

思いもよらない行動にウコンが驚いて聞き返すと、女の子はコクンと頷く。

「えっと、どーもです」

ウコンが戸惑いながらもそれを受け取ると、女の子は続けてもう1つのドーナツをアサギに差し出す。

「あ、うん。ありがとうね」

さすがに今度は断るわけにもいかず、受け取ると、

「……………♪」

女の子は、そこで初めて笑みを浮かべた。

そうしてテーブルに向き直ると、残ったドーナツを両手で掴んで口に運ぶ。

……………なにこの可愛い生き物。

自分の貰ったドーナツをアサギとウコンにも分けるところといい、膝の上にちょこんと座って幸せそうにお菓子を口に運ぶ仕草といい、愛らしすぎる。

「もぐもぐ……………ごくん。……………なんてゆるか、いい子ですね」

あっという間にドーナツを平らげたウコンの言葉に、アサギも同意して首肯する。

そこへ――

「はむはむ……………。では、いいですか？」

カラシナが話を切り出し、3人の視線が集まった。

「わたしはカラシナっています。あなたのお名前は？」

当たり障りの無い質問。

初対面なら、まず、お互いに自己紹介しないことには話が始まらない。

――が、その途端に、女の子は悲しそうな顔になってしょんぼりと俯いた。

「あら〜？」

その反応に、カラシナはもちろん、アサギとウコンも首をかしげる。

「えっと……どうしたの？」

アサギがそっと尋ねてみるが、女の子はますます落ち込むばかり。

何か言ってくれないと分からないのだが――……？

そこで、気付く。

（そういえば、全然喋ってない……？）

今までの、この子の行動を思い返す。

頭を撫でたとき。顔を触ってきたとき。怯えて飛び込んできたとき。抱き上げたとき。

そして、お菓子を差し出してきたときに、微笑んだとき。

——いずれも、“まったく言葉を発していない”。

(……もしかして——)

1つの推論に思い至る。

しかし、アサギがそれを口にするより先に、

「んゝ。もしかして——」

思案気に左の人差し指を口元に当てたカラシナが、口を開いた。

「……お名前、無いんですか？」

それは、アサギの考えていたこととは異なる内容で。

いくらなんでもそれはないだろうと、口を挟もうとすると——

「……………」

女の子は、それにコクリと頷いて答えた。

「——って、ええ!？」

「名前が無いって……!？」

あまりに予想外の答えにアサギは驚き、ウコンも絶句する。

「記憶が無いとかじゃなくて？」

自分がそうだっただけに、アサギは思わずそう聞き直してしまうが、女の子はふるふると首を横に振る。

記憶はあるのに、名前は無い。

「えっと、それって……ええ？」

ウコンは軽い混乱に陥っているようだが、

「たま〜にですが、ありますよ。そういうこと。……はむはむ」

カラシナはお菓子を食べながら、さらりと流す。

しかし――

「――それって……」

アサギには、なんとなく推察できた。

名前が無いということは、名前を貰えなかった、ということではないのか？

たとえ親がいなかったとしても、大抵は、誰かから名前を貰える

ものだ。

それがない、ということは――

……物心ついた頃から、この子はずっと一人ぼっちだったのでは――？

それだけではない。

自分の推論が正しければ、この子は――

「……ねえ。ずっと気になっていたんだけど――」

これを聞くのは少し酷かもしれないが、はっきりさせておかねばならない。

意を決して、膝の上でこちらを見上げてくる女の子に問いかける。

「……声が出ないの？」

その問いに、女の子は一瞬ビクツと震えると――

「……………」

ほとんど泣きそうな顔で、頷いた。

「ええッ!？」

ウコンが再び驚いて声をあげる一方で――

「……そっか」

知らず、アサギは女の子をぎゅっと抱き寄せて、その頭を撫でていた。

女の子は少し驚いたような顔をしたが、すぐに静かに目を閉じると、力を抜いてアサギに身を任せた。

——我ながら、似合わないことをしているとは思う。

しかし、あまりにもこの子が可哀想に思えて、自然とこうしていた。

冷笑ぶる連中は同情だの偽善だの言って否定するかもしれないが——今、こうしていることが間違いだとは思わない。

「あらあら」

そんなアサギの様子をカラシナは微笑ましげに見つめ、

「アサギさん、おかーさんみたいですネ」

「おか……っ!？」

ウコンは率直な意見で水を差さした。

いつものことで、悪気は無いのだろうが。

「せめて、お姉さんと言えっ!」

思わず、いつもの調子に戻ってしまおう。

いくらなんでも、この歳で一児の母になるつもりはない。

「はむはむ……。では、他のことを聞いてもいいですか？」

場の空気が変わったところで、カラシナが話を戻す。

「はむはむ……。ここがどこ分かりますか？」

女の子は首を横に振る。

「はむはむ……。では、あなたはこれからどうしたいですか？」

その問いに、女の子は不思議そうに目をぱちぱちさせると、考え込むように首を捻る。

それから、しばらく思案し続け――

困りきった顔で、助けを求めるようにアサギの顔を見上げた。

「え、えーっと……」

そんな目で見られても困るのだが。

どうするべきかアサギが窮していると――

「どうしたらいいのかわからない、ということですか？」

カラシナが再び問いかけ、女の子はそれに頷いて答えた。

「……そうですか。……はむはむ」

それだけ聞くと、カラシナはお菓子を口にしながら思案する。

状況やこれまでのやりとりからして、ほぼ間違いなく、この子は偶発的な事故でここに来たのだろう。

家族や知り合いなどについては聞かない。

もしいるのなら、名前が無い、などということはありえない。

そして、何より重要なのが――

これからどうしたいかと聞かれて、“どうしたらいいか分からない”と答えたこと。

――“帰りたい”ではなく、だ。

“名前が無い〓交友関係が無い”という時点で、予想はついていたが――

やはり、この子には“帰る場所”が無い。

だから、“帰りたいという気持ち”それ自体が、生まれない。

たとえ口が利けなくとも、表情・仕草・気配などから、充分それ

が分かる。

——ならば、カラシナとしては、言うことは1つ。

「はむはむ……。よろしければ、わたしたちと一緒に暮らしますか？」

この子は悪い子ではない、ということは分かる。

そんな子を、右も左も分からない土地で放り出すほど、カラシナは非情ではない。

女の子は心底驚いたように目を見開くと、アサギを見上げ、次いでウコンを見る。

「あたしはいいけど」

「わたしもです」

2人からも賛同の声が上がると、女の子は戸惑いながらも——コクリ、と頷いた。

「決まりですね。——それではアサギさん。よろしくお願いしますね」

「ふえ？ あ、あたしっすか？」

いきなり言われ、少し面食らう。——が、

「はい。……はむはむ……今のところ、アサギさんに懷かれているみたいですから」

「……あゝ。そうっすね。わかったっす」

言われて納得し、受諾する。

理由は分からないが、今一番懷かれているのが自分なので、そうなるのは必然だろう。

子供の世話の仕方なんて、皆目見当もつかないのだが――

この子は素直でおとなしそうなので、自分でもなんとかやっていけると思う。

だが――

「それから。この子にお名前を付けてあげてくださいね」

「ふえっ!?!」

続けて言われたそのことには、さすがに即諾できなかった。

「お名前が無いと、いろいろと困りますし」

「い、いや、それは分かるっすけど……。いきなり言われても……」

カラシナの言うことはもったもである。

確かに、いつまでも名無しというわけにはいかないだろうが――

「今すぐでなくてもいいですよ」

そうは言われても、困る。

そんな大事なことを、自分が決めてもいいのだろうか。

相手は犬や猫じゃないのだ。

そう思って迷っていると――すぐ近くから視線を感じた。

そちらに目を向けると、膝の上の女の子が不安そうな顔でアサギを見上げていた。

――これは、嫌がっているわけではなさそうだが……。

――不安？　――何が？

そこで、思い至る。

――渋っているから、名前を考えることを嫌がっているように見えたのでは――？

「あ………」

自分の間抜けさ加減に、思わず天井を仰ぐ。

この子の目の前で断ったりすれば、この子は傷つくに決まっているではないか。

——責任重大だが、腹をくくるか。

そう決めると、アサギは女の子と目を合わせる。

「あたしが決めて、いいの？」

これ以上不安にさせないように、できるだけ優しく問いかけると、女の子はおずおずと首肯した。

「そっか。……じゃあ、ちゃんとした名前、考えないとね」

優しく微笑みかけながらそっと頭を撫でると、女の子はぱあっと表情を明るくして、コクコクと頷いた。

「はむはむ……ごっくん。それでは、決まりですね」

いったんお菓子を食べ終えたカラシナが、ぱんっと手を軽く打ち合わせながらそう締めくくると

「ああ、それから——」

新しいお菓子を取り出しながら、思い出したかのように付け加えた。

「お仕事のほうも、ちゃんとやってくださいね♪」

いきなり現実に戻されて、アサギはガックリとうなだれる。

「お、オチを付けないで欲しいっす……」

「あはは。大変ですね」

「……他人事だと思って……」

能天気な笑うウコンにジト目を向けると、嘆息して意識を切り替える。

「――さて、と。それじゃ、そろそろご飯にしなきゃ」

正直言えば寝足りないのだが、三度寝するわけにもいかない。

「あ。わたしもまだなんで、一緒にします」

続けて言われたウコンのその言葉に、少し驚く。

てっきり、先に済ませていたものだと思っていたが――

わざわざ待っていてくれたのか。

意外ではあるが、そういうところが少し嬉しくもある。

「では、わたしはそろそろお休みさせていただきますね」

カラシナもそう言って席を立つ。

基本深夜組みなので、生活リズムが逆なのだ。

——その割には、普通に昼間にその姿を見かけることも多いのだが……。

どうも、百花殿の主には謎が多い気がする。

影が無いし。

……それはさておき。

「どうする？　一緒に食べる？」

膝の上の女の子に問いかけると、コクンと頷く。

「よし！　それじゃ、行こっか」

女の子を抱えたまま席を立つと、アサギたちはコテージの外へ向かった――。

＊

今使用しているアリアとホテル跡地、その両方で食堂は機能している。

はつきり言って厨房組みの負担が無駄に大きく、非効率的なのだが――

これも、カラシナに暴走されないようにするためである。

ウコンを含む厨房組みも、暴走されるよりはマシと割り切って頑張っているらしい。

それはともかく。

「あ、起きたんだ」

「あれが例の子？」

「見せて見せて〜♪」

女の子を抱えたままアサギたちが食堂に入ると、案の定、先客たちに囲まれた。

同時に、やはり女の子は怯えたようにビクツと震え、ぎゅっとしがみついてくる。

「ああもう！ 囲むな囲むな！ 怖がるから！！」

アサギはそう言いながら、人垣を軽く散らして空いた席のひとつに向かう。

みんな悪気は無いのは分かるが、この子を怖がらせてしまうのも困る。

人見知り——というより、おそらく、大人数に慣れていないだけなのだろう。

何故自分に懐いているのかは分からないが、それは別としても、同じ初対面のウコンやカラシナと接しているときは、割りと普通にしていたように見えたから。

きっと、そのうち慣れてくれると思う。

それよりも、まずはここにいる面子にいろいろと話す必要があるだろう。

席に着いて女の子を膝の上に載せるが、あちこちから来る好奇の視線を感じているのか、女の子は落ち着かない様子でいる。

チアダンサーや夜魔たちだけでなく、雑用係のプリニーやモーブたちもこちらを見ているのを感じる。

「……幼女分キタブー！　これで勝つるブー！……」

……とりあえず、後ろで不穏当なことを呟いた豚の頭に一発撃ちこんで黙らせる。

非殺傷って超便利。

「……………?」

位置的に死角になっている女の子は、アサギが何をしたのか分
らず、不思議そうな顔で見上げてくるが――

「ん、なんでもないから」

アサギはそれを適当にごまかすと、周りの者たちに、この子のこ
とを話し始めた。

――まず、口が利けないこと。

――自分が面倒を見ることになったこと。

――そして、名前が無いこと。

名前のことに關しては少し迷ったが、まだいい名前を考え付いた
わけではないし。

それまでは名無しであることは事実なので、予め話しておいたほ
うが後で余計な混乱がなくて済むだろう。

それに、参考意見も聞けるかもしれない。

そして、アサギの期待通りに、話を聞いた周りの者たちは次々と
意見を出してきた。

が――

「トンヌラというのはどうだろうかっ!？」

「ボンゴロ」

「ギコギコ」

「ビビンバ」

「ゲレゲレ」

「ベホイミ!」

……碌なのが無い。どう見ても遊んでいる。

「お前ら……真面目に考えろー!ー!ー!」

そんな変な名前付けられたら可哀想だろうが。

というか、口火を切った髭面のプリニー。

見覚えが無いがどこから来た。そしてどこに消えた。

——と、ふと気付けば、女の子は泣きそうな顔をしている。

どうやら、周りの冗談を真に受けたらしい。

「だ、大丈夫。みんな本気じゃないから」

慌ててフォローを入れる。

子供というのを抜きにしても、この子には冗談が通じなさそうだ。言われたことを、そのまま受け止めてしまうのだろう。

……困ったことに、ここは悪気無くからかったりする奴が多そう
だ。

いずれ慣れてくれるだろうが、それまでは自分が気を付けなければ。
ば。

——それにしても、ツツコミを入れたりフォローを入れたり、
大変である。

「あはは。ゴメンね〜♪」

サキュバスの1人が笑いかけながら頭を撫でると、女の子は少し
安心したかのように、それを受け入れる。

「……とにかく、あんまりからかったりしないですよ？」

一応、釘を刺しておく、そのサキュバスをはじめとした周りの
連中が、生温かい目でニヤニヤ笑みを浮かべながらアサギを見てき
た。

「な、なに？」

戸惑いっつも怪訝な顔で聞くと、サキュバスたちは顔を見合わせながら――

「なんていうか、すっかりお母さんよね♪」

「「ね♪」「」」

声をそろえて、ウコンと同じことを言ってくる。

そろいもそろってのその反応に、アサギはガツクリとうなだれると

「お前らもか……。――あたしはまだ17だああああっ!!」

食堂にアサギのツツコミが響き渡った――。

＊

To Be Continued

＊

Track 2『Garnet Moon』—B（後書き）

I n t r o — 2 — A で出ていた、名無しのソードマスターの女の子の『ある事情』。

それが、今回明言された『口が利けないこと』です。
わざわざ伏線張るほどのことでもなかったかもしれませんが……。

ドラクエネタを少しだけ。

髭面のプリニーの正体は多分あの人。

次回の投稿は2／5の予定です。では。

Track 2『Garnet Moon』—C

昼になってアリアに移動するときにも、アサギは女の子を連れて行った。

1人にしておくのは不安があった、というのもあるが――

1人残ってお留守番なんてのは、何故だか無性に気に入らなかった。

さすがに昼にもなれば、物珍しさで囲まれる、ということにはならない。

既に朝の話は広まっているのだろう。

御蔭で、思っていた以上に滞り無く仕事が進んだ。

――仕事といっても、アサギが昼にやるのはコンサートの打ち合わせや練習なのだが。

さすがに、そんな最中にまで女の子を抱えているわけにはいかなかったが――

アサギが思っていたとおり、女の子は素直なもので、言い聞かせておけばきちんとそれを守って、邪魔にならない場所にちょこんと

座っておとなしくしていてくれた。

手がかからなくて助かる。助かるが――。

もう少しぐらいワガママでもいいんじゃないか、とも思ってしまう。

そもそも、待っている間、寂しそうにしているのが分かる。

雰囲気とかいう以前に、この子は顔に出るのだ。

今回は初めてだったから、仕方なかったかもしれないが――

だからといって、このままでいいはずがない。

今後も同じようなことを続けていくわけにはいかないだろう。

なんとか解決策を見つけなければ。

「……ふう……」

思わぬ問題にアサギが頭を悩ませている間にも、時間は流れ――

――やがて、夕方のコンサートの時間が近づいてくる。

さすがに、いつまでも考え込んでいるわけにもいかず――

アサギは女の子を連れて、更衣室へと着替えに向かう。

――それにしても――

チラッと、後ろに目をやる。

雛鳥みたいに後ろをちょこちょこついて来る様子が、なんとうか、愛らしい。

そうして更衣室まで辿り着くと、

「――あ。やっと来た」

先客のチアダンサーたちの1人が駆け寄ってきて、

「はい、これ」

アサギに衣装を手渡してきた。

それは、薄紅色を基調としたビキニの水着。

同系色をした、シースルーのパレオもセットになっている。

元々、スパリゾートホテルで来客のレンタル用に用意してあった

ものらしい。

「うゝゝん……」

正直、こういった色はあまり自分には似合わないと思うのだが――

まあ、今更とやかく言っても詮無いことだ。

――気にするのが露出の多さでなく色であるあたり、既にそういった感覚が麻痺しつつあるのかもしれないが、アサギはそれに気付いていない。

着替えるべく、コートに手をかけると

「ほら、こっちおいで」

先程とは別のチアダンサーが、女の子を手招きした。

――着替える間、相手をしてくれる、ということだろう。

女の子も、チラッとアサギのほうを見ると、素直に手招きされたほうへととてと駆け寄っていった。

アサギはその様子を見つめながら、考える。

とりあえず、舞台裏までは連れて行くつもりだが――

それでも、コンサートになれば、その間は結局1人にしてしまうことになる。

だからといって、当然ながら舞台に上げることはできない。

……いったいどうしたものか。

「どうしたの？ 着替えないの？」

そこで声をかけられて、気付く。

手が止まっていた。

慌ててコートを脱いで手渡しながら、思考を続ける。

今までのあの子の様子からして、やはり、人の温もりに飢えてい
るようなフシがある。

間違っても、ゲームを与えて放っておく、なんてことをするわけ
にはいかない。

となれば、仕事の間は誰かに任せるのが妥当なのだろうが――

やはり、それは気が進まない。

「じゃあ、これ――」

「(……ちよーっと待った)」

交代制なのだから、手の空く者は必ずいるだろう。だが――
根本的なレベルで、何かが違う気がする。

「（……いいもの見つけたんだ）」

「（……コレ？　すぐバレるんじゃない？」

うまく表現できないのだが――

それは、懐いてくれるあの子に対する裏切りのような気がするのだ。

「（……大丈夫、気付いてない）」

「（……よし。）……はい、これ着てね♪」

だからといって、何か妙案があるわけでもなし。

……やはり、折を見てカラシナに相談してみるべきだろうか。

「（……ぷぷっ）」

向こうも忙しいだろうから、正直、気が咎めるのだが――

他に、こういったことを相談できそうな人物、も……？

「……うん？」

そこで、ようやく違和感に気付く。

…なにやら重く、冷たく、ひどく頼りない感じがするようない…？

視線を下ろすと

細いチェーンと宝石で作られた、超極小サイズのビキニ。

「~~~~ツ!!?」

驚きすぎて声が出ない。

一瞬で真っ赤になって、咄嗟に身体を隠すようにしゃがみこんでしまう。

前は本当にギリギリでしか隠せてないし、後ろに至ってはほぼ丸見え。

「あ。ようやく気付いた」

「あははは。結構似合ってるわよ?」

コレを渡したと思しき2人のチアダンサーが、さも可笑しそうに声をかけてくる。

「――な、何よこのエロ水着はああああッ!!!!」

「たしか、フォーチュンだっけ？」

水着置き場の奥のほうにあったんだー、と続けながら、紙袋の中を漁る。

「やっぱりアレクサンダーのほうが良かった？」

言いながら、ほとんど同じようなエロ水着を取り出してみせる。

違いといえば、薄紫で、前の隠す部分が小さなホタテ貝になっていることだけ。

――ちなみに、とある別魔界の破壊神と同じ名前だったりするのは、当人すらあずかり知らぬことだが――

「良くないわッ！」

色はともかく、そんなエロ水着を着るつもりはない。

ふと気付けば、女の子も不思議そうな顔でこっちを見てくる。

……その穢れの無い視線が痛い。

「せっかくだからコレで行く？ お客さん喜ぶわよ」

「こんな格好で人前に出れるかああああッ！！！！」

ほとんど裸じゃないか。どこの痴女だ。

そもそもコレ、ちょっと動いただけで絶対にずれる。

社会的に死ねと言うのか。

「ほら。二挺拳銃トウハンといえばエロ衣装でしょ？」

「どんな偏見だそれはッ！！」

「先陣ヴァンガード的な意味で？」

「わけの分からんことを言うなッ！！」

——このまま喋ってても埒が明かない。

「もういい！ えっと——」

さっさと切り上げると、本来の水着を置いたところに手を伸ばす。

——が、そこに置いたはずの水着が無い。

「「これなくんだ？」」

言われたほうを見れば、2人のチアダンサーがそれぞれ水着とパレオを手に入っていた。

「こら！ 返せ！」

「おゝっと」

取り返すべく片手を伸ばすが、チアダンサーたちはひょいっとそれを避ける。

「逃げるな！！」

「「あはははは」」

アサギは追いつがるが、決して広くない更衣室を、2人して巧みに逃げ回る。

さすがに身が軽い。

無論、2人はただアサギ“で”遊んでいるだけなのだが――

「――お・ま・え・らあああ……」

いい加減に、堪忍袋の緒が切れた。

外して置いてあったホルスターから双銃が飛び出し、アサギの両手に収まる。

「「げ」」

事ここに至って、さすがに2人もやりすぎたと気付いたが、後の祭り。

「い・い・か・げ・ん・に、しろおおおおッ！！！」

怒声と共に、更衣室に立て続けに銃声が鳴り響いた。

＊

「まったく、もう……！」

憤慨しながらも、シースルーのパレオを腰で結んで着替え終わる。

後ろのほうで、アサギが撃沈した2名のところに女の子が駆け寄って、おずおずとしながらもその頭を撫でているのが見える。

——自業自得なんだから気にすることは無いのに。

まあ、優しいことは悪いことじゃないと思うから、わざわざ止めはしないが。

「……あゝ。痛かったゝ」

「ありがと。いい子ねゝ」

そこで、2人も復活してくる。

別に本気でやったわけではないとはいえ、もうケロッとしている。

……ちったあ反省しろ。

女の子の背中越しに一睨みしてやると、2人して「ごめんね♪」とばかりに手を合わせてきた。

あまり誠意は感じないが——まあ、いいか。

ともあれ、とんだ余計な手間がかかってしまった。

もうすぐコンサートなのだから、いつまでも引きずるわけにもいかない。

椅子に腰を下ろしながら一息ついて、頭を切り替えると——

「アサギさんっ！　いますか！？」

いきなり、ウコンが乱入してきた。

「なに？　いきなり」

思考を中断して問い返すが、ウコンはまるで聞いていない様子で室内を見回す。

そして女の子に目を留めると、歩み寄って後ろからひょいっと抱え上げた。

「ちょっと、この子借りますね」

「か、借りるって……」

いきなりのことに、思わず絶句する。

抱えられている女の子も、目を丸くしてぱちぱちさせている。

「いーこと思いついたので」

ウコンはそう言いながら、女の子を肩車する。

「まあ、あたしはいいんだけど……」

どのみち、これからコンサートなのでこの子の相手をすることはできない。

が、重要なのは本人の意志だろう。

「どうする？ いいの？」

肩車されて頭の位置が上がった女の子を見上げながら問いかける
と――

女の子はアサギの顔をじっと見つめ――それから、コクンと頷いた。

……間が空いたのは、やはりこれから仕事だということを察したからだろうか。

空気が読めるのはいいことなのかもしれないが……。

なんだか、複雑な気分だ。

さておき、本人の了解が取れたからいいが――

「……その子で遊んだりしないでよ？」

一応、釘を刺しておく。

「滅相もない。ただちょっと――っ？」

そこまで言いかけて、言葉が止まる。

肩車された女の子が、ウコンの頭をぽふんと押さえたから。

女の子が押さえたその手を放すと、ウコンの頭頂部で一房だけ反り返った髪の毛――通称アホ毛がぽよんと起き上がる。

「……………？」

押さえる、放す、起き上がる。

押さえる、放す、起き上がる。

……どうやら、目の前でぷらぷらしているアホ毛に興味を惹かれたらしい。

「あ、あの。それ、いじらないでください」

ウコンが困惑気味に制止すると、女の子は素直にそれをやめる。

が、やっぱり気になるようで、アホ毛をじっと見つめている。

……このぶんなら大丈夫そうだ。

「じゃあ、任せてもいいかな？」

「はい！ 任されました！」

ウコンは笑みを浮かべながら敬礼のポーズをとると、女の子を肩車したまま出入り口のドアに向かう。

そして――

ガンツと音を立てて、肩車された女の子がドア枠上部の縁に頭をぶつけた。

「あ」

「ちよつとおおおおッ!!?」

いきなり何をやらかしてくれるのか。

慌てて駆け寄り、女の子の様子を確認する。

「だ、大丈夫!!?」

しかし、女の子は額当てを押さえて、驚いたように目をぱちぱちさせているだけ。

やけに硬い音がしたとは思ったが――

頑丈そうな額当ての御蔭で、特に大事には至らなかったようだ。

「び、びっくりしたあ……」

心底ほっとして、胸を撫で下ろし――

「もう！ 気をつけてよ！」

「あううつ。すみません！」

ウコンを叱ると、身を竦めて謝ってくる。

「過保護よね。アサギちゃん」

後ろでその様子を見ていたチアダンサーの1人が少し呆れたよう

に笑いながら言う。

「この子も魔族なんだから、多少ぶつけたぐらい平気だと思うけど」

「それとこれとは話が別でしょうがっ！」

身体的に問題無くとも、痛いことに変わりあるまい。

アサギとしては、真っ当な対応をしているつもりなのだが。

「お母さんだから仕方ないわよ」

「お母さんなら仕方ないか」

「ね〜。お母さん」

……まだ言うか。

「お前ら……。いい加減しつこいわああああっ！！！！」

——そして、コンサートの時間になり——

舞台上上がったアサギは、思わぬものを目に入れて、思わずぎょ

つとする。

観客席の最前列、その中央。

そんな特等席に――

女の子を肩車したウコンがいた。

「アサギさー！ーん！！」

向こうもアサギが自分たちを見たことに気付いたらしく、周りの観衆の声援に紛れて手を振ってくる。

――何故そこにいる。

他にもいろいろとツツコミどころはあるが、まさかステージ上でツツコミを入れるわけにもいかないので、ぐっと堪える。

とはいえ、まるっきり無視するわけにもいかないので、小さく手を振って答えておく。

いい事思いついたっていうのは、このことか。

――まあ、確かに、ちゃんとした位置からコンサートを見せるというのも、いいかもしれないが……。

それにしたって、突拍子もないことをしないでほしい。

女の子が周りの人ごみにすっかり怯えてしまっているじゃないか。

そもそも、すっかり忘れていたが――

お前、自分の仕事はどうした。

『それでは『Rainbow Notes』、お聞きくださーい！』

そこで、司会のアナウンスが入り、イントロが流れ始める。

――気にしている場合じゃないか。

歌に集中するべく、アサギは思考を切り替えようとして――ふと、思いつく。

せっかく、ウコンがここまで連れ出してくれたのだ。

だったら、この子1人だけに聞かせるつもりで歌ってみるのも、いいかもしれない。

そう思い直し、アサギは意識的に客席の女の子に目を合わせると

小さく笑みを浮かべて歌い始めた――。

そして、コンサート終了後――。

舞台裏で、アサギはウコンたちと合流する。

女の子はアサギの姿を認めると、ウコンの肩からぴょんと飛び降り、とてとてと駆け寄ってきた。

「……！ ……！！！」

女の子はアサギの元に駆け寄ると、なにやら興奮した様子で身振り手振りをして何かを伝えようとしてくる。

この子でもテンションが高くなるのか。

少し意外に思いながらも、その表情や仕草から、言いたいことを察する。

「コンサート、気に入ってくれた？」

しゃがんで目線を合わせながら問うと、女の子はコクコク頷く。

――喜んでもらえたようで、何より。

わざわざ意識して歌った甲斐があったというものだ。

この子は、最初るときこそ周りの観衆に怯えていたが――

歌が始まってからは、周りが気にならなくなるほどに魅入っていたようだった。

意図的に目を合わせるようにしていたので、アサギにはそれがよく分かった。

「――ほら、おいで」

嬉しくなって、なんとなく両手を広げて招くと、女の子もそれに応じて胸に飛び込んでくて、それを抱きとめる。

そのまま抱き上げながら立ち上がると、

「それじゃー、わたしも厨房に戻りますね」

「！ ま、待った！」

ウコンがそう言って立ち去ろうとするので、慌てて呼び止める。

「？ 何ですか？」

「すぐ着替えるから、ちょっと待ってて」

「は、はあ……。いいですけど」

要領を得ない様子で曖昧に頷く。

この分だと、やはりウコンは理解していないのだろう。

どう見ても仕事をサボっているのだから、戻ったら絶対怒られるだろうに。

しかし、それは純粹な厚意からきたことなのだろうから、アサギとしては、それをそのまま見過ごすのは気が引けた。

多少なりと、フォローはしてあげないと。

「すぐ戻るから！」

そう言い残すと、アサギは急いで更衣室へと駆けていった――。

＊

ホテル跡地――。

結果として、何故かアサギも一緒に怒られることになってしまったが、それ以外は特にお咎めも無く、いつもどおり一緒に戻ることに

ができた。

どうにも理不尽なような気もするが、この際それは諦め、今日の疲れを流すべく、3人連れ立ってお風呂に向かう。

脱衣場で服を脱ぐ際、アサギは女の子を手伝おうかと思っていたのだが、どうやらその必要は無かったらしい。

服を脱ぎ散らかすことなく、アサギが渡した籠にきちんと畳んで入れている。

考えてみれば、今まで1人でいたのなら、ほとんどのことが自力でできて当然か。

一抹の寂しさを感じながらも、自分でできることにまで手を出してはいけないだろうと思い、アサギも自分の衣服を脱いでいく。

途中、女の子が白い棒らしき物を、大事そうに畳んだ服の上に置くのが目の端に入ったが、さして気に留めることもなかった。

そして、全部脱いで浴場に移動しようとした、そのとき――

「あ………！ ああ………！！」

ウコンがわなわなと震えながら、女の子を指差していた。

何事かと思って、すぐ傍の女の子に目を向けて――言いたいこと

を理解した。

「子供に負けた……ッ!!!!」

ふらふらと後ろを向きながらガックリと両膝をつくと、続けて両手を床につき、力無くうなだれる。

——まあ、何に負けたかといえば……ぶっちゃけると、胸。

胸といっても、女の子のそれは慎ましやかなもののだが……。

それでも、平原と丘とでは天地ほどの差を感じるものなのだろう。

気持ちは分かるので、かける言葉が見つからないが——

しかし、女の子は何故ウコンがこうなったのか分からず、おろおろするばかり。

——なににせよ、いつまでも脱衣場で裸でいるわけにもいかない。

というか、ずっとこっちにお尻を向けられていても困る。

「あゝ……。とにかく、お風呂行こ？」

「は、はい……。そうですね」

とりあえず無難に促すと、ウコンもそれに応じて立ち上がる。

続けて、アサギは未だにおろおろしている女の子の頭を軽く撫でる。

「大丈夫。誰のせいでもないから」

こればかりは仕方がない。

——ともかく。

2人を促して、ようやく浴場に向かう。

「足元、気をつけて」

壁や天井の穴は即席で塞いであるが、床のひび割れなどは、ほぼそのまま。

大きな破片などは当然取り除いてあるが、それでもいたる所に床石が欠けている箇所があるので、ここが初めての女の子は気を付ける必要がある。

すでに何人もの先客がおり、女の子はきょろきょろと落ち着き無く周りを見回しながらまっすぐ湯船に向けて歩みを進めてゆき――

「あ、ちょっとストップ」

それをアサギに止められた。

「先に身体洗わなきゃ」

「……………」

女の子は不思議そうに小首を傾げるが、無理もあるまい。

おそらく、今まで池や川での水浴びがお風呂代わりだったのだから。

習慣が違うのは仕方がないこと。

——が、水浴びのときと同じように湯船の中で体を洗ってもらっては困る。

「ほら、座って」

軽く促してお風呂用の座椅子に座らせると、お風呂道具が入った桶を前に置く。

「……自分でできる？」

一応、聞いてみるが——

「……………」

女の子はスポンジをぐにぐにしながら、小首を傾げるばかり。

やはり、勝手が分からないようだ。

「ふふっ……。仕方ないわね」

その様子に自然と顔を綻ばせながら、アサギはシャワーを手に取り、お湯を調節。

「ほら、髪洗うから目を閉じて」

そう言って頭からお湯をかけると、女の子は少し驚いたようにビクツと身を竦ませる。

かけ終わると、長くボリュームのある銀髪が、お湯を弾くように再び広がる。

かなり髪質が硬いようだ。

アサギはそう思いながら、シャンプーをやや多めに手に取る。

背中をほとんど隠してしまうほどに長い髪を洗ったことなんて無いので、適量がよく分からない。

というか、他人の髪を洗うなんてこと自体が、初めてだ。

——シャンプーハットが要るかな？　とも思ったが、そもそもそんな物は無い。

まあ、それほど役に立つ物でもなし。別にいいかと思考から切って捨てる。

「シャンプーが目に入ったら痛いから、しっかり目を閉じてて」

そう声をかけると、力を入れすぎないように気を付けながら女の

子の髪を洗っていく。

——そこに、隣で身体を洗うウコンが声をかけてくる。

「アサギさん、なんか嬉しそうですね」

「……そう？」

自分では分からないが——周りからはそう見えるのだろうか。

——まあ、こういうのも悪くないと思っていることは確かだが。

ぎこちないながらも洗い終わると、シャワーで泡を洗い流す。

いったんタオルで顔を拭いてあげると、

「じゃあ、次は身体ね」

スポンジを手に取り、女の子に見せるようにしてボディソープを付けて泡立てる。

そして女の子の右手を取って、泡立てたスポンジで右腕全体を優しく洗って見せると、そのスポンジをそのまま右手に持たせる。

「ほら、やってみて」

スポンジを渡された女の子は、アサギがやったのと同じようにして左腕を洗うと、そのまま続けて身体を洗っていく。

そして、最後に背中を洗おうとするが――

「……………っ」

やはり、背中はどうまくできないようだ。

「はい、貸して」

アサギは女の子の手からスポンジを取ると後ろに回ると、背中を隠す長い銀髪を、中央から左右に分けながら肩越しに前に回してどかす。

そうして露わになった小さな背中を、スポンジで洗っていく。

あっというまに洗い終わり、再びシャワーを使って身体の泡を洗い流す。

「よし！――じゃあ、先に入ってて」

髪を戻すと、軽く肩を叩いて促す。

女の子は少し躊躇っているように見えたが――

「それじゃー、わたしが見ておきますねー」

先に身体を洗い終えたウコンに手を引かれて、湯船へと向かっていった。

「…………さて、と」

アサギはそれを見送ると、シャワーへと手を伸ばし、自分のことに取り掛かり始めた。

＊

コテージ――。

お風呂を終えたアサギたちは、コテージに帰還。

早速パジャマに着替え始めるのだが――

「――あ。そういえば……」

そこで、女の子の寝間着のことを失念していたことに気付いた。

「この際、このままでもいいんじゃないですか？」

「そんなわけにはいかないでしょ」

女の子は額当てを外し、髪も下ろしているが――

野宿ならともかく、ベッドで寝るのに普段着というわけにはいくまい。

——そういえば、寝間着とは別に、この子の着替えも必要だ。

まあ、それはおいおい考えるとして——

「……とりあえず、あたしので間に合わせるか」

仕方なく、アサギは荷物から替えのパジャマを取り出す。

「ほら。着替えるからおいで」

アサギは女の子を手招きして呼ぶと、着替えを手伝う。

この子なら着替えぐらい自分でできるだろうが、サイズが違えば手伝わねばなるまい。

袖や裾を折り込んで強引に長さを合わせるが、当然ながらだばだばになってしまう。

「……まあ、仕方がないか」

とりあえずは、これでよしとする。

アサギは女の子を抱き上げてベッドに腰掛けると、女の子を膝の上に乗せる。

「さて、と……」

言わねばならないことがあるのだが——どう切り出すべきか、迷

う。

なんとなく、女の子の長い銀髪を手で梳いていると

「——そういえばアサギさん。その子の名前、考えました？」

思い出したかのようにウコンが聞いてくる。

——渡りに船。

そのことを言おうと思っていたのだから。

1日もあれば、それを考える時間は充分にあった。が——

「う、うん……。まあ、ね」

しかし、いざそれと言うとなると、妙に気恥ずかしいものがある。

——と、女の子が膝の上で向きを変えて、アサギの顔を見上げてきた。

「う……」

期待と不安が入り混じったその視線が重い。プレッシャー的な意味で。

とはいえ、いつまでもこうしているわけにもいかない。

意を決して、口を開く。

「――スズナ」

.....。

一瞬、沈黙が流れ――

「――えつと.....どうかな？」

おそろおそろ、膝の上の本人に聞いてみると――

女の子はぱあつと顔を輝かせると、喜びを全身で表すかのようにアサギの胸に飛び込んで、ぎゅつと強く抱きついてきた。

――どうやら、気に入ってもらえたようだ。

見た目の割りに結構力が強い子だから、少し痛いのだが――

それすらも、愛しく感じている自分がいる。

こちらからもそつと抱き返すと、優しくその頭を撫でる。

ふと、窓の外に目を向ければ、魔海の海面に何か赤いものが映っているのが見えた。

――それは、魔界特有の緋色の月。

ゆらゆらと揺れながら静かに輝くそれを見つめながら、アサギは

自然と、スズナを抱くその腕にほんの少しだけ力を入れていた――。

＊

T r a c k ー 2 『 G a r n e t M o o n 』 E N D

＊

Track-2『Garnet Moon』-C(後書き)

※『Rainbow Notes』…『マーメイドメロディーぴちぴちピッチ』のOP

『フォーチュン』『アレクサンダー』は『Dead or Alive Xtreme 2』に登場する水着です。

エロ衣装のトゥーハントは『ヴァンガードプリンセス』の『姫木ルナ』のことです。

Track-2終了。

元々、Track-2-Aだけでまとめる予定だったのが、書いてるうちに量が増えてこの結果に。

現在、Track-3を執筆中ですが、なかなかうまく書けません……。

ゆえに、次回の投稿は未定となります。

できるだけ早く仕上げるよう、頑張ります。では。

I n t r o - 3 『 R u n n i n g S h a d o w 』 (前書き)

※『R u n n i n g S h a d o w』.. 『マナケミア〜学園の錬金術師たち〜』の戦闘BGM

※『R A G N A R O K B A T T L E O F F L I N E』にも、同名のステージBGMが存在します。

大変お待たせしました。

ようやくTrack-3が完成したので、投稿を再開いたします。

それではどうぞ。

Intro-3『Running Shadow』

サンドウィッチパレス――。

かつて、異世界からきたという魔女が住み着いていた砂漠の研究所。

その周囲の砂漠は、魔女が開発した兵器の実験場にされており、危険な地帯であったのだが――

その魔女が別魔界へ去った今となっては、それほどでもなくなっていた。

そんな砂漠の中を駆け抜ける影がひとつ。

長い金髪をポニーテールにした、青い忍装束のくのいち。

腰の後ろに大きな巻物を備え付け、背中には大きな風呂敷包みを背負っていた。

――彼女の名は星影。

火山帯の隠し砦に住まう忍の集団、『星陰一族』の若き頭領である。

紛れもない天才であり、実力も確かなのだが――

「お師匠さま、お腹空いたデース」

およそ忍とは思えない性格の持ち主でもあった。

星影が走りながら愚痴ると、その頭の上にボンツと音を立てて煙が上がり――

「バツカもん！ さっき食ったばかりじゃろうが！」

目元を赤い布の覆面で隠したカエルが現れ、星影を叱りつけた。

――このカエルこそが、星影の師匠。

カエルが師匠というのも変な話ではあるが、これは、強力な呪いでカエルにされて戻れなくなってしまっただけで、彼もれっきとした忍者である。

師匠ということで、お目付け役も任されている彼だが――

破天荒且つフリーダム極まりない星影に、手を焼き、胃を痛める日々である。

お目付け役というより、面倒事を押し付けられているというべきだろう。

――ちなみに、現頭領の星影があまりに不真面目すぎるために、

仕方なく先代の頭領が事実上の代役を勤める羽目になってしまっている。

普段は隠し砦にいる彼女たちが何故、今砂漠を渡っているかというところ――

「こんだけ沢山あるんだから、少しぐらい食べても平気ネ」

「少しは忍耐というものを覚えんかッ!!」

食糧の調達である。

風呂敷包みの中身は、大量の『魔力の玉』。

その1つ1つが、食糧が詰め込まれた大きな箱を変換した物であり、星影の言うとおり、それらは総じて膨大な量となる。

――ちなみに、個人差はあれども、ほとんどの悪魔にこんな芸当はできない。

それは即ち、星影がそれだけ強い魔力の持ち主であることと、この魔界においても非常識の度合いがかなり強いことを如実に示していた。

それはさておき。

一般的には、忍は隠れ里で自給自足を行うものなのだが、星陰一族が住まう忍砦は火山帯にあるため、作物が育たない。

魔界の各地には、あらゆる商品を扱うローゼンクイーン商会の支店や出張所が点在しているが、忍の隠し砦にそんなものがあるはずもない。

それ故に、外部からの食料調達は必須。

そしてそのために、星影たちは魔風草原まで出向いたわけである。

魔風草原を支配するグルメオーガは少し前に結婚しており、今ではその愛妻に貢ぐために、積極的に食糧の販売を行っていた。

——かつて、サンドウィッチパレスの魔女に貢ぎ続けた1人の悪魔と同じ轍を踏んでいるようにも思えるが、本人は至って幸せなのだろう。

本来、食糧調達のようなことは頭領自らが行うことはないのだが

これは、ただ単に星影が砦の外に出たがったがために過ぎず、そこに深い理由はない。

——ただ、わざわざ魔風草原まで出向かせたのは、普段から修行をサボりがちな星影に対する修行の一環、という師匠の思惑があったりはしたが。

「細かいこと気にする男はでっかくなれませーん。」

だから、お師匠様いつまでもちっちゃいままネ」

「お主という奴は……！」

師弟の関係なので、カエルにされて戻れないという事実は、当然、星影も知っている。

おちよくっていることは、火を見るよりも明らか。

……とても、師匠に対する態度ではないが――

そもそも、この弟子の脳内に“師を敬う”という概念はまったく無い。

走りながら師匠をおちよくる星影と、頭の上で叱る師匠とのやりとりがしばらく続いていると――

「――ん？」

不意に、星影がその足を止めた。

「どうしたんじゃ？」

砂の上でもバランスを崩すことなく、器用に急停止した星影の頭の上で、師匠が問う。

「あそこに、何かあるデース」

性格に難はあれども、忍としては卓越した星影の目が、それを捉

えていた。

「ちょっと見てみるネ」

「こ、コラ！ 待たんか！」

余計な寄り道はするなと師匠は制止するが、星影はそれを完全に無視して駆ける。

滑るように砂の上を駆け抜けた、その先に――

「あれは……」

半分砂に埋もれかけた、1人の男がいた。

背中には大きな荷物を背負い、頭に骨製のフェイスガードを付けている。

「――行き倒れじゃな。哀れな……」

「死んでるデスカー？」

「ちょっと待っとれ」

師匠は星影の頭から飛び降りると、様子を見るために男に近づく。

が、その瞬間――

突然男の腕が動き、師匠を鷲掴みにした――！

「ぎゅおっ！！？」

握り締められて奇声を上げる師匠の目の前で、男はゆっくりと砂に埋もれていた顔を上げる。

「め、飯い……」

その目は、まさに餓えた獣のように暗くギラついていた。

「……この際、カエルでも構わねえ……！！！」

「ま、待……！」

師匠は身の危険を感じたものの、間に合わず――

「ギャアアアアアアッ！！！」

砂漠に、師匠の悲鳴が響き渡った。

＊

「うめえ……！ 久しぶりの食いモンだ……！」

コンフリーと名乗ったその男は、ガツガツと遠慮なく果物を貪っている。

さすがに砂漠のど真ん中で食事というわけにはいかず、コンフリーを含めた3人は、近くにあった今は主のいない研究所に入り込み、そこで食糧の一部を広げていた。

とはいえ、調理なしで今すぐ口にできそうな物はパンや果物ぐらいしかなかったが。

その身にくつきりと齒形を残した師匠は、呆れたようにそれを見る。

——ちなみに、変わり身の術で脱出した。危ないところだった。

正直、少しは遠慮してほしいものだが、それはこの際仕方があるまい。

しかし、だ——

「なにをどさくさに紛れてお前まで食つとるか！」

星影まで一緒になって怒涛の勢いで食べているのはどういうことだ。

「据え膳食わぬは武士の恥ネ」

「バツカもーん！！ 意味が違うわ！」

正しい意味で使われても困るが。

というか、このバカ弟子、師匠が喰われそうになったときに助けようとしなかったくせに、自分はしっかり飯を食うとはどうゆう了見だ。

神経が太いにも程がある。

そもそも、忍なのだからガツガツ食べていいはずがない。

——いや、忍の中には太っていることを武器にするものもいるかもしれないが……。

少なくとも、星影はスピードタイプなのだ。

ただでさえ修行をよくサボるのだから、食事制限がつくのは当然。

本人はそれを不満に思っているようだが、自業自得というものだ。

——と、そこで、星影とコンフリーが伸ばした手がぶつかり合った。

が、餓えた2人では色気のある展開になどなるはずもない。

2人が伸ばした手の先には、1つのリンゴ。

2人の視線が交差し、間に火花が散る。

「……悪いがコレは譲れないなあ。お嬢ちゃん」

コンフリーは不敵に口の端をあげる。

——とてもじゃないが、食事を奢ってもらっている者の態度ではない。

対する星影も、

「ここは飯場……。せんじょう早い者勝ちネ」

引き締まった目で言いながら、座ったままの姿勢でゆらりと構えた。

——修行もそれぐらい真面目にやれ。

互いにリンゴに狙いを定め、座ったまま対峙し——

次の瞬間、空を切り裂いて開かれた掌が奔った——！

動いたのは——コンフリーが先！

既にリングは捕獲寸前――！

（――獲った――！）

コンフリーは勝利を確信する。

だが――

コンフリーの手がリングを捕らえるその寸前に、一瞬にして影が
奔り、リングが消失。

「!？」

コンフリーの手が空しく床を掴むその向こうで、星影がリングを
その手にしていた。

「なん……だと……ッ!!?」

――後の先。

それは、まさに目にも留まらぬ早業。

「フフン。ワタシに速さで勝とうなんて、100万光年早いのでー
ス」

驚愕で固まるコンフリーを尻目に、星影はホクホク顔でリングを
口にする。

「……光年は距離の単位じゃ」

実にアホ且つ不毛な勝負を、師匠がツツコミで締めくくった。

そして、食事が終わると――

コンフリーは御礼にと、荷物の中から1つのケースを取り出し、2人に渡した。

1m強ほどの長さの細長いケースで、『No. 7』と書かれている。

例によって、コンフリーは説明という名の作品自慢をしていたが

――「――で、契約の方法なわけだが――」

「ちょっと待った！」

そこで、師匠がストップをかけた。

「うん？　なんだ？」

「……契約をせんと、コレは使えんのじゃな？」

「ああ。さっきも言ったけどな」

わざわざ念を押してくる師匠に、コンフリーは不思議そうな顔をする。

「……なら、それについては後でワシだけが聞くとするわ。

——特に、こやつには絶対に教えんようにな」

「ええー!? どーしてデスカ!?!」

言外どころか、あからさまに言われて星影が苦情を上げるが

「バツカもん! お主にこんなものを使わせられるかッ!」

既に、この武器の能力の説明は聞いている。

こんな物を星影に使わせてしまえば、最早、誰にも止められなくなるだろう。

だからといって、まったく使わない、というのも勿体無いが……。

とりあえずは、星影の目に付かない場所にも隠すでしょう。

幸い、忍の住処はそういう場所には事欠かない。

「それにしても、非殺傷とは変わっとるの」

星影がブーブー文句を言っているが、それを無視して話題を変える。

「絶対、というわけではあるまい？」

「……ま、そりゃあな」

師匠の指摘にコンフリーは小さく肩を竦める。

「ものには限度ってもんがあらあ。いくら基本的に相手を殺傷できないようにしてあるつつつても、使い方や状況次第じゃ防げねえよ」
それに、と続ける。

「不殺銃の中にゃあ、生物を殺傷する可能性がある特性を持つモンもあるしな。

基本的に固有特性のほうが優先されっし、その場合も防げねえな」
4番とか9番——11番なんかもそうだな、と口の中で呟く。

「なら、なんでそんな面倒なことしてるデスカー？」

星影からすれば、当然の疑問。

結局相手を殺傷してしまう可能性があるというなら、わざわざ非殺傷なんてことにする意味があるのだろうか？

無駄に武器の威力を落としてしまうだけではないだろうか？

そんな星影の疑問に対し、

「武器を造るのは、単に俺の趣味だ。けどな——」

言いながら、コンフリーはお茶の湯呑みに手を伸ばす。

「俺の作品で無闇に殺しなんかされたら、気分が悪いじゃねえか」

自画自賛するつもりはないが、それなりに優秀な武器を造っている自負はある。

一職人として、自分の造った作品に愛着だってある。

それを、つまらない殺しの道具にされて、いい気がするはずもない。

「――ま、要するに、気分の問題ってだけの話だ。深い意味はねえよ」

そう締めくくると、一気にお茶を飲み干した。

――そう。結局のところ、非殺傷なんて気休め程度のものにすぎない。

自分の手元を離れてしまえば、その武器がどう使われるかなんて、分かるはずがない。

今までにも、いろんな連中に渡しているが――

その中のいくつかが悪用される可能性は、かなり高いだろう。

なにしろ、ここは魔界なのだから。

だからといって、誰にも渡さない、なんて選択肢を選ぶつもりは毛頭ない。

武器というのは使ってなんぼである。

使い手がなくて仕方なくしまっている、というのならともかく

――
装飾品として飾る、なんてのは、その武器に対する侮辱とも思っている。

ましてや、造っておいて誰にも使わせないなんて、論外。

それは、その武器の存在意義そのものを全否定する行為に他ならないのだから。

「……しかし、惜しいよなあ。

嬢ちゃんほどの使い手なら、そいつを存分に使いこなせるだろうに」

7番は割り自信作なんだぜ、と続けるコンフリーに、師匠はポツリと呟く。

「……お主は、星影の本当の恐ろしさを知らんからの」

破天荒で、ワガママで、フリーダムで、そのくせ實力だけはあつて。

拳句、師匠の言うことなどまったく聞かない、とびっきりの問題児なのだが――

それは、まだ“マシ”なのだ。

いかに、この武器が非殺傷であっても、星影本人が振るう技や術はそうではない。

故に、危険。

間違っても、この武器を星影に渡すわけにはいかない。

「――って、あれ？ 嬢ちゃんはどこ行ったんだ？」

「む？」

言われて見回してみれば、いつの間にか、星影はその姿を消していた。

「まったく……世話の焼ける奴め」

師匠は溜め息をつくが――同時に、これはある意味都合なことにも気付く。

「まあ良いわ。――今のうちに、契約とやらについて聞いておこうかの」

心配は無用。

あれでも、実力だけは確かなのだから。

あの馬鹿弟子については、後で探せばいい。

そう判断すると、師匠は再びコンフリーの説明を聞き入った。

＊

一方、星影はサンドウィッチパレスの中を跳びまわりながら探索していた。

魔女が去って以来、無人になったはずのこの研究所。

風の流れに乗って微かに聞こえてきた声に、興味を引かれたのだ。

——もつとも、それは星影の聴覚でなければ捉えられないほどの極微音だったのだが。

壁や天井を走り、柱や梁を跳び渡りながら奥へ進んでいくと、やがて、その声のはっきりと聞こえてきた。

『……チー……ラム……テル……』

そして、そこに辿り着いた。

天井の梁にぶら下がった体勢のまま、下の様子をうかがうと――

『ボクバクチー。ボクバクチー。マジヨラム、アイシテル』

1台の変わった戦車が、何かに向かって語り続けていた。

ベースはアイゼンクロイツだろうか。

前面に備え付けられているはずのレーザー型の砲口が、1本の角を持つドクロのような顔へと変更されているが。

それに操縦席に当たる場所には、透明な半球型のケースに収められた脳味噌が見える。

――それは、かつてこのサンドウィッチパレスの主だった魔女、マジヨラムに尽くした男、バクチーの成れの果ての姿。

夫婦であり、間違いなく相思相愛の仲であったのだが、マッドサイエンティストであるマジヨラムの愛情表現は大いに歪んでおり――

その結果が、コレ。

挙句、そのマジヨラムは相思相愛であったはずのバクチーのこと

をコロツと忘れて、研究のために別魔界へと旅立ってしまったのだから、酷い話である。

にもかかわらず、バクチーは未だにマジヨラムのことを愛し続けていた。

——それは、頭の中まで改造された結果、というのもあるのだが……。

バクチーの前には、1つの写真立て。

そしてそれには、マジヨラムの姿を写した写真が収められていた。

『ボクバクチー。ボクバクチー。マジヨラム、アイシテル』

マジヨラムがこの魔界から去ってからというもの、バクチーは来る日も来る日も、ただ黙々と写真の中のマジヨラムに愛を囁き続けていた。

——その姿は、あまりにも哀れだった。

だが——

「……つまんないデース」

そんなことを知らない星影からしてみれば、バクチーのしていることは意味不明。

星影の位置からでは、角度的に写真立てに語りかけていることも分らない。

最初のうちこそ喋る戦車に興味を引かれたものの、いつまでたっても動こうともせず、ただひたすらに同じ言葉を繰り返すその姿を見ることに、すぐに飽きてしまった。

——さっさと戻るとしよう。

そう決めると、重力を無視した動きで別の梁に飛び移ろうとして

「!?!」

その瞬間、目の前を1匹のサソリが落下していった。

別にサソリの1匹や2匹が怖いわけではないが、すぐ目の前を、完全な不意打ちで毒虫が通り過ぎたことで、さしもの星影もバランスを崩した。

そして、そのまま下に落ちていく。——が、

「……ちよっと、驚いたネ」

この程度のことでは、忍は勤まらない。

慌てず騒がず、器用に空中でくるりと体勢を立て直し——着地する。

——ベギンツ——

着地と同時に、何かが踏み砕かれる音が室内に響いた。

——目の前には、喋る戦車のドクロのような顔。

そして、足の下に違和感。

「『……………」

気まずい沈黙が、場に流れる。

こころなしか、金属のドクロの顔が驚愕で固まっているようにも見える。

そして——

「……じゃ、そういうことネ」

何がそういうことなのかはともかく。

星影は強引にごまかすと、文字通り一瞬にしてその場から逃走した。

その場に残された戦車——バクチーの目の前には、踏み潰されてしまった写真の残骸。

『……ボクバクチー。ボクバクチー。マジヨラム、アイシテル』

——星影は知らない。

『……マジヨラム、アイシテル。マジヨラム、アイシテル……』

——自分が、何を踏んでしまったのか。

『マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。
マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。
マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。
マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。
マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。
マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。
マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。マジヨラム。』

——そして、自分が何をしでかしてしまったのかを。

『——MARrrrJOOoRAaaaaMッ!!!!』

なんとも形容しがたい慟哭が、サンドウィッチパレスを揺るがした——。

＊

「な、なんだあ!？」

「むう……!？」

バクチーの慟哭はコンフリーと師匠の所にまで届き、直後、何かを破壊して回るような轟音も響いてきた。

「おいおい……。なんかヤバくねえか？」

「……星影の奴め……。何をやらかしおった……」

動揺を隠し切れないコンフリーの横で、師匠が呻く。

——既に、師匠の中では星影が何かしたことになるっていた。

日頃の行いのせいであり、事実、間違っていなかったりする。

すると――

「――ただいま戻ったネ」

建物全体を揺るがするような振動が伝わってくる中、星影が煙と共に姿を現した。

「星影! いったい何事じゃ!？」

「さあ？ 知らないネ」

原因は紛れもなく星影だというのに、当の本人は素知らぬ顔でしれっと答える。

――が、星影は別に嘘をついているわけではない。

ただ、自覚がないだけである。

その方がタチが悪いが。

「こりゃあ……何かが暴れてるみてえだな」

ここの兵器が暴走でもしたか？ とコンフリーがあたりをつける。

「ちようどいいデース。昨日思いついた『エセ科学忍法・水の龍』を試してみるネ！」

こんな状況にもかかわらず、星影は交戦する気満々で大量の水筒を取り出した。

「バツカもん！！ 砂漠のど真ん中で水を無駄遣いする奴がおるかッ！！！！」

当然、師匠が一喝して星影の暴拳を止めると――

「ひとまず、脱出じゃ！」

そう促しながら、星影の頭に飛び乗った。

「だな」

「えゝ。つまないデース」

同意するコンフリーとは対照的に、星影は不満の声を上げるが――

「……ええ加減にせんと、晩飯抜きじゃぞ」

師匠にそう言われ、しぶしぶながらも手早く、荷物をまとめ始めた。

そうして、荷物をまとめて背負うと、3人は脱出するべく走り出した――。

そして――

「――ここまでくれば、大丈夫じゃろ」

無事に脱出した3人は、サンドウィッチパレスの全貌を眺めることが出来るほど離れた場所まで逃げたところで、ようやく足を止め

た。

魔女が開発した兵器がゴロゴロしているような場所である。

あんなことになった以上、距離をとるに越したことはない。

遠目では何も起こっていないように見えるが、今でもその内部では“何か”が起こっているのだろう。

何も確認しないまま脱出したため、それが何なのかは分からないが――蛇がいると分かりきっている藪をわざわざつく必要もない。

「――さて、どっちに行きゃあいいんだ？」

いつまでもそれを眺めているわけにもいかず、コンフリーが切り出す。

それに応じて、師匠が地図と方位磁石を取り出す。

そして、広げた地図の上に乗りながら現在地を確認し――

「……このまままっすぐ行けば、サタンランドに続く街道に出られるの」

地図の上に乗ったまま、進行方向を指差した。

「遊園地デスネー！　楽しみデース！」

サタンランドとは、ナイトメアブラザーズことガラム・マサラ兄

弟が運営する遊園地。

遊園地という割には非常に物騒な場所ではあるのだが、腕に自信がある者たちにとっては、ほどよいスリルを味わえるものらしい。

星影は既に遊ぶ気満々でいるが――

「言っておくが、サタンランドには寄らんからな」

『サタンランドに続く』とは言ったが、当然ながら、その街道はサタンランドにだけ繋がっているわけではない。

あくまで分かりやすい基準として口にしただけで、師匠としては遊園地なんか寄り道するつもりはない。

「ええ〜〜!?」

「当たり前じゃ！ バッカもん！」

当然星影は不満を口にするが、師匠はそれを一喝し、

「――で、お主はどうする？」

コンフリーのほうに向き直って問う。

「どうするつつつても、別に目的地があるわけじゃねえし。

――ま、砂漠を抜けるまでは一緒にさせてもらっていいか？」

基本的には気楽な1人旅をしている身だが――

砂漠はもうこりこりである。

ぶっちゃけ、この砂漠を抜けるまでは食い物の当てと一緒に行動したいのだ。

「――ま、よからう」

そんなコンフリーの思惑を知ってか知らずか、師匠はあっさり了承すると

「では行くぞ！」

ひとつとびで星影の頭に飛び乗ると、進行方向を指差した。

未だに星影は不満気ではあったものの

「ふう……分かったヨ」

ひとつ息をつくと、砂の上を滑るようにして一気に駆け出す。

「――って、おい！ 速えよ！！」

それはまさに、砂の上を奔る影。

その影を、慌ててコンフリーが走って追いかけていった――。

*

* To Be Next Track

I n t r o - 3 『 R u n n i n g S h a d o w 』 (後書き)

今回は不殺銃の説明っぽくなってしまいました。

当初は地の文だけで説明する予定でしたが、うまくいかなかった
ので、説明役としてコンフリーが再登場することに。

しかし今回も行き倒れ……。我ながらワンパターンです……。
もっと精進せねば。

それにしても、遅くなっていました……。

デイスガイア4の発売までには間に合わせたかったのですが、遅
れに遅れてこの始末。

しかも、ノロノロしている間に大震災で東日本が大変なことに。

幸い、自分のところには影響は無かったのですが……。
まったくもって恐ろしい限りです。

次回の更新は4／9の予定です。では。

Track 3 『炎のオーバードライブ』 - A (前書き)

※ 『炎のオーバードライブ』 .. 『トランスフォーマー・カーロボット』のOP。

Track 3 は A, B, C, D の四部構成です。

また、思いのほか長くなってしまいました……。

それではどうぞ。

Track 3 『炎のオーバードライブ』 - A

夜。魔界国道の、とある地点――。

すっかり日が落ちて暗くなったその道を、3匹の魔物がゆっくりと進んでいた。

黒い棘鉄球のような頭部に、白いドクロマークのような顔。

紫と白のストライプの布袋らしき物にその身を包んだ彼らは――
ゴーストボンバー。

手足がないせいか、身体を前後する勢いでゆっくりゆっくり前進している彼らだが――

こう見えても、暴走族である。

かつては、珍走団『チーム梵婆』のリーダーであるボンバーヘッドの舎弟だった彼らだが、そのボンバーヘッドが暴走族を卒業したため、彼らは『新生チーム梵婆』を結成してその跡を継いでいた。

継いでいたのだが……――

彼らは、下り坂でなければ走れなかった。

さらに言えば、走るというより、胴体を引っ込めた頭部だけで転

がり落ちるだけ。

仕方ないので、彼らは――

「ぶるるん、ぶるるるん！」

「ばりばりばりー！」

「ぎゅいん、ぎゅいーん！」

とりあえず、声だけで爆走気分を演出していた。

……傍から見れば、虚しいのを通り越して、悲しい。

幸か不幸か、当人たちはその虚しさに気付かぬまま“爆走”を続けていたが。

と、そこへ――

彼らの遠く前方から、何かが接近してきた。

「ぶおーん、ぶー……んん？」

先頭のゴーストボンバーが、それに気付いて足を止める。

頼りない月明かりだけなので、はっきりと見ることはできないが

――
シルエットから、自分たちより大きい相手だということだけは分

かった。

そしてそれは、物凄いスピードで見る見るうちに接近してきていた。

「や、ヤバイ！ 逃げろ！」

慌てて横道に逃げようとするゴーストボンバーたちだが、気付くのが遅かった。

彼らの鈍い動きでは間に合わず――

「――ぶげらあッ！！？」

一瞬にして、3匹まとめて跳ね飛ばされた。

――跳ね飛ばされる瞬間、彼らは見た。

相手は、1本ツノのドクロのような顔をした戦車であったことを。

跳ね飛ばされたゴーストボンバーたちが次々と落ちていく中――

犯人である戦車は、そんな彼らを振り返ろうともせず土煙を巻き上げながら爆走。

そのまま、夜道の闇の中へと消えていった――。

＊

翌日。アリアー。

観客のいない、昼のコンサート会場。

そこで、アサギたちコンサート組みの面々が、舞台の上で通し練習をしていた。

昼に行うコンサートの打ち合わせ・練習は屋内の広間でやることも多いが、実際に舞台上がって通して練習を行うことも、当然ある。

「――ふう……」

振り付けを一通り流し終えて、アサギは一息つく。

コートは無く、キャミソールとホットパンツのみの身軽な服装となっている。

ただし、これは邪魔になるからコートを脱いでいる、というわけではない。

今日のコンサートの衣装用に手を加えたい、とのことだったので、提供したのだ。

いつも世話になっているので、是非も無い。

着替えのためにもう1着同じコートは持っているので、別に不都合も無かった。

魔海のエリア。その屋外に設けられた舞台。

本来ならば、海ならではの潮風でも満喫するところなのだが――

アサギは、どこか落ち着かない様子でいた。

心ここにあらずといった感じで、妙にそわそわしているのが傍目からも丸分かり。

練習にも、碌に集中できてない有様だった。

――そこに、チアダンサーの1人が溜め息交じりに声をかけてきた。

「……アサギちゃん。調子悪そうね」

ここである『調子悪そう』は心配ではなく、苦言。

別に、何かしらのミスをしたわけではないのだが――

練習といえど、それに身が入っていないのはいただけない。

「う……」

言われて、アサギは気まずそうに目を逸らす。

さつきから、どうにも集中できてない自覚はあるのだ。

「……そんなに心配？」

「……う、うん。まあ……」

目を逸らしたまま、肯定する。

アサギが、何の心配事をしているかというと――

スズナのことである。

コンサートや練習のときには、どうしてもスズナのことを1人にしてしまう。

それについて、先日、カラシナに相談した結果が

『何でもいいので、スズナちゃんにお手伝いを頼んでください』

であった。

最初は、そんなことでいいのか？　とも思ったのだが――

『あの子は、とても優しい子ですから。
誰かの役に立つことに幸せを感じる、そういうタイプの子です』

『そして、あの子はアサギさんに一番懐いています。
なので、アサギさんから頼られることは、あの子にとってとても
嬉しいことです』

『何より。アサギさんも気付かれたように、あの子は人の温もりに
飢えています。』

——大事なのは、“皆の輪の中に、自分も参加できる”ことです』

『ただし。お手伝いを“やらせてあげる”のではなく、お手伝いを
“お願いする”。

——そのところにだけ、気をつけてくださいね』

……相談して良かったと思う。

——『やらせてあげる』と『お願いする』——。

よく考えてみれば、これらは天地の差どころか、ほぼ真逆の意味
となる言葉だ。

『やらせてあげる』だと、『やらせたくないけど、仕方ないから
“やらせてあげる”』という意味になってしまう。

——そんなのは違う。絶対に違う。

アサギにそんなつもりはない。断じて。

だが、そのつもりはなくとも、うっかり言い方を間違えてしまう可能性はあった。

事前に釘を刺しておいてくれたことには、素直に感謝したい。

さすが、人材活用のエキスパートと呼ばれるだけのことはある。

信頼できる上司の存在がありがたい。

——これで、暴走さえなければ完璧なのだが。

ともあれ。

そういうわけで、スズナにちよつとした『お使い』を頼んでみたのだ。

食堂から人数分のジュースを貰ってくるだけの、簡単なお使い。

ちゃんとメモを渡して、送り出したはいいのだが――

いざ送り出したとなると、急に不安が湧き上がってきた。

道を間違えて迷ったりしないだろうか。

転んで怪我したりしないだろうか。

誰かにかかわれて困ったりしてないだろうか。

喋れないのに、ちゃんと相手に意図は伝えられるだろうか。

……自分の見てないところで、何かあったりしたら――

そう思うと、どうにも落ち着かなくなってしまったのだ。

――
そんな胸中を口にすると、チアダンサーは深々と溜め息をついて

「過保護！」

言うと同時に、アサギのすぐ目の前に、ビシッと指を突きつけた。

「しっかりしてよね。本番のときもこんなだと困るのよ？」

珍しく、真面目な顔で苦言を呈する。

しかし、それも当然だろう。

いつもはおちやらけることが多い彼女たちだが、仕事はきちんとこなしている。

保護者として、アサギがスズナのことを気にかけるのはいいのだが――

それで仕事に支障が出るようでは困るのだ。

「う……」

対するアサギも、言われるとおりで、返す言葉もない。

いくらスズナのことが心配だとはいえ――

それで、自分が自分のことに集中できていなければ世話はない。

――もつとも、仕方がないといえる部分も、無いことはない。

『初めてのお使い』というものは、実行する“子供”はもちろん、それを頼んで送り出した“親”も緊張するものなのだから。

――と、そこで――

大きな袋を両手で抱えたスズナが、とてとてと走りながらこちらに戻ってきた。

その姿を認めたアサギは、知らず、ほっと息をつく。

そんなアサギの様子に、チアダンサーは苦笑すると

「ま、区切りもいいし。いったん休憩にしましょっか。――ほら、行った行った」

そう、アサギを促した。

「う、うん。――ありがと」

気を遣われたことにどこか気恥ずかしさを感じつつも、スズナの元に駆け寄ると

「おかえり。大丈夫だった？」

しゃがんで目線を合わせながら問いかける。

スズナはそれにコクンと首肯して答えると、袋の中から小さな缶ジューズを取り出し、アサギに差し出した。

「うん。ありがとね」

それを受け取りつつ、そつと頭を撫でると

「……………♪」

それだけで、スズナは嬉しそうに笑みを浮かべた。

――本当に、無垢な子だと思う。

たったそれだけのことが幸せであるかのように、両手で抱えた荷物をきゅつと抱きしめている。

その仕草が愛らしくて、つい抱きしめてやりたくなってしまう。

こうしてみると、この子が悪魔に属する者だなんて、とても思えない。

どちらかといえば天使の方だろう。

「——っ!？」

そこで不意に、アサギは妙な感覚を感じて、動きが止まる。

違和感というか、何かが意識に引っ掛かったような——

——そう、まるで“何か忘れていることに気付いた”ような——
そんな感覚。

だが——

(うゝゝん……?)

それが何なのか、分からない。

今日やるべきことを思い出してみるが——特に、忘れていることはない。

誰かと、何か約束でもしただろうか? ——それも、ない。

他にも、いろいろと思索してみるが——やはり、心当たりが無い。

——ただ——

単なる物忘れにしては、妙に寂寥感せきりょうかんのようなものを感じているの

だが……。

そもそも、どうして急にそんなことを感じたのか、それ自体が分からない。

——しかし、それは無理もないこと。

かつて、墮天使の友達がいたために『天使』のキーワードに反応こそしたが——

その記憶は、“忘れているの”ではなく“無くなっている”。

故に、思い出すことは叶わない。

出ない答えにアサギが首を捻っていると——ふと、視線を感じた。

思考を中断してそっちを見ると——

「……………?」

スズナが不思議そうな顔で小首を傾げて、アサギの顔を見つめていた。

「つと——なんでもないの。ごめんね」

慌ててスズナの頭から手を離す。

目の前でいきなり人が考え事を始めたら、誰だって変に思うだろ

う。

この、物寂しいような感覚が、少し気にはなるのだが――

――これ以上、分からないことを考えていたって仕方がない。

少なくとも、仕事がらみで忘れていることはない。

「じゃあ、皆にも渡してあげて」

アサギは意識を切り替えて、そう促す。

スズナはコクンと頷くと、とてとてと近くのチアダンサーのところに歩いていった。

「さて、と――」

肩の荷が下りたアサギは、一息つくべくジュースの飲み口を開けようとする。

が――

「じゃあコーヒーちょうだい」

「なら私は紅茶」

「アタシ五^{ウーシヤン}香茶」

「だったら――魔苦シェイク」

「え〜〜つと……悪まつ茶!」

あちらからも、こちらからも次々と声がかかる。

「……!?!? ……………!?!?」

抱えた袋の中を何度も見ては、おろおろとするばかり。

というか、半分泣きそうになっている。

「お前らあっ!! 意地悪するな!!!!」

コーヒーだの紅茶だの、最初から頼んでなかっただろうが。

が、スズナは自分が失敗してしまったんじゃないかと思ってしまう
っているのだろう。

慌ててスズナの元に駆け寄ると、

「ほら、大丈夫。間違えてないから」

安心させるように語りかけながら、頭を撫でる。

——まったく、油断も隙もない。

スズナを落ち着かせる一方で、チアダンサーたちをギロツとばかりに睨みつけると

「あはは……。ごめんね。つい」

笑いつつも、一応、手を合わせて謝ってくる。

「――まったく、もう……」

いつものこととはいえ、困る。

自分で遊ぶのはこの際……。良くはないけど、まあ、妥協するとしても――

この子でまで遊ばないで欲しい。

とはいえ――

なんだかんだで、いつもの調子に戻った感じがする。

これも彼女たちなりの気遣い――と思うのは、考えすぎだろうか？

ともあれ。

改めてジュースを配るように促すと、今度は滞りなく配れていく。

その様子を見送ったアサギは、今度こそジュースを開けて一気に飲み干すと――

「ん、ん………！」

ひとつ、大きく背伸びをした。

暖かな陽射しとそよぐ潮風が、実に心地いい。

こうしていると、ここが魔界であることを忘れてしまいそうだ。

——遠くのほうに見える、浮かぶ龍の化石とかがなければ、もっと良かったのだが。

あと、たった今視界に入った空飛ぶ魔物も。

空気読め。

「——って、あれは……？」

よく見ると、人型に近い。

一見すると、白いベレー帽に白いワンピースを着た、赤い髪の子
さな女の子。

ただし、その下半身は筆のようになっている。

レッドアイドルと呼ばれる、女の子型の魔物である。

その下半身と、なにやら荷物を抱えているせいで、遠目だとよく
分からなかったのだ。

見上げていると、向こうもこちらに気付いたらしい。

こちらに向けて降下してきた。

そして、すぐ近くまで降りてくると――

「すみませ〜ん。こちらに朝霧アサギさんはいませんか？」

そう聞いてきた。

「それはあたしだけど……誰？」

レッドアイドルに知り合いはいない。

いぶかしみながらも聞いてみると

「色変え屋のリツ子です〜」

そう答えると、抱えていた風呂敷包みを差し出してきた。

「頼まれていたコートをお持ちしました〜」

「――ああ。そういうこと」

手を加えるといっていたアレか。

終わったら、直接こっちに持ってくるように頼んであったのだらう。

納得して荷物を受け取る。

……それにしても、『色変え屋』とはまた随分と限定的な仕事だ。

それはさておき。

風呂敷包みを開けてみると――

「うわっ!？」

白かったコートが、見事に黒に変わっていた。

青色だったラインは深紅へと変わっており、以前とはだいぶイメージが違っている。

仕上がりも非常に綺麗であり、最初からこうだったと言われても違和感がない。

「はぁ……。この短時間で、よくもまあ……」

感心のあまり、思わず息が漏れる。

手を加えるとは聞いていたが、ここまでとは思わなかった。

よく、短時間でここまで仕上げられたものだ。

「えっへん。色の塗り替えは、アタシたちの得意分野ですから」

誇らしげに胸を張る。

曰く、アイドル系の魔物の特殊能力とのこと。

……随分とピンポイントな能力もあったものだ。

しかし、それならこの仕事の早さも納得できる。

『色変え屋』なんて専門職をやっているのも、伊達ではないようだ。

……そういえば以前、黒く染めたチアダンサーの衣装を借りたことがあったが――

もしかして、アレも彼女の仕事だったのだろうか。

ともあれ。

とりあえず、袖を通してみる。

「……うーん……」

元々、自分のコートなので特に不都合などはないのだが……。

「……ちよつと、黒すぎるかなあ……」

コートのことではない。

下に着ているキャミソール・ホットパンツ・そしてロングブーツ。

その全部が黒を基調としているために、黒ばっかりになってしまっているのだ。

悪くはないのだが、全体的に地味と言わざるを得ない。

地味なのはいただけない。

私服として使うならともかく、客の前で着るのだから。

「やっぱり、コートの下は赤系にしたほうがいいんじゃない？」

「パンツとブーツはそのままでもいい……か、な？」

チアダンサーたちも意見を出してくる。

そこへ――

「ぬりぬりしますか？」

ふわふわ浮かびながらリツ子が近づいてきた。

「今できるの？」

聞き返すと、コクンと首肯する。

「じゃあ、お願いしようかな」

まあ、たぶんキャミソールの色を変えるぐらいで済むだろう。

当然着替えは持っているので、それぐらいなら、さして困ることもない。

「じゃー、ぬぎぬぎしてくださいー」

「——って……そっか」

一瞬面食らうが、すぐ納得する。

いくらなんでも、着たままじゃ無理だろう。

「じゃあ、ちょっと——？」

更衣室に——と言おうとした矢先に、両肩と両腕をガシッと掴まれる。

振り返ると、2人のチアダンサーがしっかりとアサギのことを捕まえていた。

実にいい笑顔で。

——実に、嫌な予感がした。

——そして——

「やっぱり、こんなものじゃない？」

チアダンサーたちが、コートやキャミソールを手にとって合わせてみながら、意見を交し合っていた。

結局、キャミソールを深紅を基調にした色に変えただけで済んでいた。

「パンツはこのままでいいとして……」

「ブーツはどうする？」

ホットパンツとブーツを合わせているチアダンサーたちが首を捻っている。

このままでいくか、丈の短い他の靴にするかで迷っているらしい。

「ねー。アサギちゃんはどう思う？」

アサギ本人にも話を振るが――

「うるさいバカ！！ さっさと服返せ！！！」

返ってきたのは怒声。

――まあ、当然だろう。

屋外でショーツ1枚にひん剥かれたら誰だって怒る。

両手で胸を隠してしゃがみこみ、顔を真っ赤にしたまま半分涙目で睨みつけている。

直に肌で感じる潮風が、余計に羞恥心を煽っていた。

すぐ傍ではスズナがおろおろとするばかり。

おどおどしながらも止めようとはしたのだが、『いつものことだから』とか言われて、止められなかったのだ。

——これが『いつものこと』とか言われるアサギはたまったものではないのだが。

「ごめんごめん。——はい」

笑いつつも謝りながら駆け寄ってきて、アサギの堪忍袋が切れる前に衣服一式を返す。

アサギはひったくるようにしてそれを取り返すが——

「む……」

両手が塞がっていては着れない。

「——えっと……ちょっと持ってて」

近くにいたスズナにいったん渡すと、手早く着始めた。

そして、すぐに着終わる。

「まったく……!」

憤慨しつつも、それを抑える。

正直、1人ずつ拳骨でも入れてやりたいところだが——我慢する。

いつまでも、ふざけているわけにはいかないから。

ひとつ、大きく深呼吸をして気を落ち着けると――服を確認する。

キャミソールが赤系になったただけだが、やはり、それだけでだいぶ印象が違う。

――こんなものでいいだろう。

……というか、たったこれだけのために白昼の屋外でひん剥かれたのか。自分は。

また腹が立ってきたが、頭を振って気を落ち着ける。

「ふう……。よし！」

意識を切り替えて一息つくと、そこにリツ子が再びふよふよと近づいてきた。

「髪の毛も、ぬりぬりしますか？」

「かみ――って、いやいやいや！ それはいい！」

思わず頭を押さえつつ、慌てて首を振って断る。

それは断固拒否する。

アサギに髪を染める趣味はない。

だいたい、戻せなくなったらどうする気だ。

その旨を告げると――

「あ、それなら大丈夫ですよ」

リツ子は言いながら、1本の細いスプレーを取り出した。

「『速乾性ヘアカラスプレー・ぬりぬりくん』」

まるで秘密道具を取り出したときのようなノリで、続ける。

「至って無害。シャンプーすれば簡単に落とせる一品です」。

赤・青・黄色の3色に、今なら緑もお付けして、お値段据え置き
3980ヘル！

「お買い得ですよ」

「TVショッピングか！」

つい、反射的にツツコミを入れてしまった。

と、そこへ――

「面白そうじゃない？」

「ちょっと見せて」

興味を引かれたチアダンサーの何人かが、リツ子の周りに集まってきた。

そして、そのまま商談に入る。

「……やれやれ」

嘆息しつつ、アサギはそこから離れる。

小さい外見に似合わず、商魂逞しいことだと思う。

しばらくして、やり取りが終わると――

「じゃあ、アタシはこれで」

リツ子はその小さな手を振って、ふよふよと飛びながら空へと去っていった。

アサギはそれを見送ると――

「――さて、と！」

意識を切り替えて、みんなへと向き直る。

「それじゃ、もう1回、通してやってみようか？」

その意見に、みんな首肯して応える。

変な騒ぎもあつたりしたが、今は練習時間なのだから。

各々が配置についていく中、スズナだけがおろおろとしていたが

「はい、コレ」

そんなスズナに、アサギは小型のCDラジカセを手渡した。

「合図をしたらココを押して。――で、終わったらココを押せばいいから」

簡単に使い方を説明すると、スズナはコクコクと頷いて、自発的に邪魔にならない所へ離れていった。

アサギも、それを見送りながら自分の配置につく。

そして、全員が移動し終わったのを確認すると――合図を送った。

「それじゃ――『Black MUTATION』、スタート!!」

＊

To Be Continued

＊

Track 3 『炎のオーバードライブ』 - A (後書き)

※『Black MUTION』…『TatshMusic Circle』オリジナル。『WHITE MUTION』収録。

百花殿におけるスズナの立ち位置は、こんな感じになりました。

アサギは反応こそしましたが、フロンのことは思い出せません。

記憶喪失はよく、頭痛がするとか、フラッシュバックするとかありますが、アサギの場合、対価として持っていかれてしまったので、それもあります。

なので、特に突発的な場合、日常の物忘れとの区別がつかなくなりつつあります。

ただし、心理的には反応する、といった感じですよ。

レッドアイドルのリツ子はシークレットファイルから。

アイドル系はファントムキングダムで戦車の色変えができたので、色変え屋として登場させました。

次回の更新は4/16の予定です。では。

Track 3 『炎のオーバードライブ』 — B

夜――

今日の仕事を終えたアサギは、スズナを連れて出口へ向かう。

そこで、待っているウコンの姿を確認した。

なにやら、紙袋を提げているのも見える。

「お待ちせ」

声をかけると、ウコンはこちらを振り向いて――

「うわ！？ どーしたんですかアサギさん？」

案の定、アサギの姿を見て驚いて声をあげた。

アサギは、コンサートで使用した黒いコート姿のままでいた。

元々アサギの私物なので、そのまま私服として使ってもいいとのことだった。

もっとも、そもそも着替えなんて持ってきてなかったのだが。

その旨を伝えると――

「えっと……。どうかな？」

ウコンに感想を聞いてみる。

アサギとしては、悪くないと思っているのだが……。

「2Pカラーみたいですな」

「!?!?!」

ウコンの実に率直な感想が、ストレートにアサギの胸を貫いた。

「つ、2Pカラー……」

かなり効いた。

思わず、両膝と両手を地面についてしまうほどに。

「ちょ、アサギさん!?!」

ウコンが慌てて声をかけてくるが――

ヘコみながらも、同時に、自分でも驚いていた。

別に、それほど酷いことを言われたわけじゃないのに――

どうして自分は、こんなにダメージを受けているのか。

「う、うん。大丈夫」

——そう。

気にするほどのことを言われたわけじゃない……はず。

そう思い直しながら、砂を払いつつ立ち上がる。

そして、軽く頭を振って気持ちを切り替えると——

「——じゃあ、帰ろっか」

2人を促して歩き出した。

「——ところでウコン。それ何？」

歩きながら、ウコンの提げた紙袋を指差して聞いてみる。

「これですか？　これはですね——」

言いながら、ウコンは紙袋の中に手を突っ込むと——

少しよれた感じの、ワインレッドのつば広帽子を取り出した。

「どうしたの？　それ」

「実はですね……——」

——昼のエリア——

魔海の一带には、パイナップルとヤシの木を合わせたような特有の植物が、いたるところに植生している。

完全に育ってしまったものは食用に向かないが、まだ幹が青い若木のものは、その果実部分を食することができる。

厨房組みとしては、現地に生えている食材を使わない手はなく、採取を言いつけられたウコンは籠を背負って外に出ていた。

「えいっ！」

ジャイアントアックスが一閃し、手頃なパイナップルの木から果実が落ちる。

「——ま、こんなものですね」

落ちた果実を拾いながら、そうひとりごちる。

果実は結構大きく、数個だけで籠はいっぱいになっていた。

最後に採取した果実を片手に持ったまま、速やかに戻るべく駆け出していく。

そして、アリアの手前まで来た、そのとき――。

「――とうっ！」

ワインレッドのつば広帽子にコートを纏った魔物が、ウコンの前に飛び降りてきた。

目元を黒い布の覆面で隠しているが、猪のようなその顔からモーブ族だと分かる。

――が、一般的なモーブ族と違って背が高く、体格もスマートだった。

百花殿ではモーブ族が多く働いているが、彼のような個体は見たことがない。

「おや、見つかってしまいましたか」

見るからに怪しい外見とその一言から、やはり部外者だと分かる。

――しかし、ウコンは彼に見覚えがあるような気がしていた。

「……あの……。どちら様でしょう？」

見覚えがあるような気がするのだが、思い出せず、とりあえず聞いてみる。

「ふむ。問われたならば答えぬわけにはいきますまい」

片手に持つステッキをクルクルツと器用に回すと――

「これ、麗しき怪盗の美学なり！」

ビシッと構え、堂々と名乗りを上げた。

「世間を風靡するダンディー悪魔、『怪盗魔人』とは我輩のことですぞッ！！」

――だが、それに対するウコンの反応は、実に薄かった。

「あゝ……。そういやいましたっけ、そんなのが」

「な、なんですとおッ！！？」

相手を驚かせるはずが、逆に自分が驚愕する羽目になってしまう。

「まるで流行が過ぎ去って廃れた、一発屋芸人の如き扱い！！
我輩、おおいに傷つきましたぞ！！！」

ウコンの言い様に憤慨する怪盗魔人だが――

はつきり言って、それは仕方ないことでもあった。

確かに以前、怪盗魔人は“ある目的”のために各地で精力的に活

動を行い、それによって噂もよく流れたものだったのだが――。

その目的については自分の中で既に決着が付いたため、自ずと活動も下火に。

それに加え、以前使用していた『強襲飛行船ツヴァイハンダー』を壊してしまったことで魔界エアラインから貸し渋りにあい、以前のような派手な逃走劇を演出できなくなってしまっていた。

そうになると、元々、盗賊行為など珍しくもない魔界においては、みるみるうちに話題は沈静化していつってしまったのだ。

流行が廃れたと言え、まさにその通りであった。

とはいえ、怪盗魔人は美学を重んじ、紳士を自称する男でもある。

「――と、失礼。……我輩としたことが、取り乱してしまいましたな」

自制して気を落ち着かせると、気を取り直して――

「ともかく、珍品『海のお土産ヒトデナシ』は、確かにいただきましたぞ！」

ビシッとステッキを突きつけて、宣言した。

――『海のお土産ヒトデナシ』――

元々、アリアが空中庭園カジノだった頃にお土産として販売していたお菓子のようで、今でも在庫が結構な数で残っていた。

アリアが倒産して生産が行われなくなった以上、確かに珍品かもしれないが――

ウコンからすれば、はっきり言って、どうでもよかった。

最初っから、百花殿の備品ですらないのだ。

盗まれたところで、ウコン個人としても、百花殿全体としても、痛くも痒くもない。

日々の糧を得るに苦勞していた頃なら話は別だったろうが、今はそうでもない。

なので――

「……はあ。どうぞ」

ウコンとしては、そうとしか返せない。

「なんですと!?!」

予想外の反応に驚く怪盗魔人に構わず――

「それじゃ。わたし、これでも忙しいんで」

そう言いながら、さっさと戻るべく歩みを進めようとする。

だが――

「ちょーっとお待ちなさい！」

再び怪盗魔人がステッキを突きつけて、それを制止してきた。

「……まだ何か？」

いい加減、ウコンもうんざりした顔を向けるが――。

「……貴女はいささか、様式美というものを理解しておられない御様子」

どこか押し殺したような雰囲気で、怪盗魔人は語る。

「よーしき……――って、あれ？　もしかして怒ってます？」

相手から滲み出ている魔力の気配で、ウコンも相手の様子に気付くが、後の祭り。

1度ならず2度までもコケにされて、さしもの自称紳士もカチンときたらしい。

「我輩がたっぷりとレクチャーして差し上げましょうぞッ！！」

宣言すると同時に、ステッキの先端を頭上に掲げた。

「世の元素を管理する、偉大なる氷の大悪魔よ……」

「って魔法ですか!!?」

さすがに慌てる。

ウコンは魔法には詳しくないが、元素を管理する大悪魔に呼びかけるその呪文から、それがかなり大規模な魔法であることは察することはできた。

それ故に、ほぼ反射的な動きで――

「我が魔力の呼びかけに応じ、凍てつく刃を降らっばあああッ!!」
「？」

手に持っていたパイナップルを、全力で投げつけていた。

怪盗魔人の顔面に炸裂した果実は、ほぼ半分が砕け散り――

果肉と果汁と鼻血をぶちまけながら、怪盗魔人はもんどりうって倒れていく。

――そして、その一撃で外れた怪盗魔人の帽子が、ゆっくりと地面に落ちていった。

「……ふう。危なかったです」

ほっと一息ついているウコンの向こうで、しぶとく怪盗魔人は起き上がる。

「う、うむむ……! あろうことかこんな物で詠唱の邪魔をすると

は……！

美学に反すること、甚だしいですぞ……！」

鼻を押さえながら起き上がろうとする怪盗魔人の顔を見て――

ウコンは再び、既視感を覚えた。

「……やっぱり、なーんかどっかで見たことあるような気がしますね……」

ウコンにそう言われながら、まじまじと顔を見られ――

帽子がないことに気付き、今度は怪盗魔人のほうが慌て始めた。

「ムッ！？　これはいけませんぞ！」

怪盗魔人の正体は――魔界の貴族、ガラクター卿。

ウコンは以前旅をしていたとき、ガラクター卿に珍品を売って路銀を稼ごうとしていたことがあったため、ガラクター卿のことは知っていた。

それが、見覚えがあるような気がした理由。

しかし、まだ覆面が残っていたことと、ガラクター卿のこともほとんど忘れかけていたため、その答えには辿り着いていなかった。

「やむを得ませんな……！」

言うや否や、怪盗魔人は煙と共に姿を消すと、少し離れた木の上

に転移した。

少し驚いているウコンを尻目に――

「正体がバレてしまつては元も子もありませんね。

――去りどきの心得。これ、一流怪盗のたしなみなり!!
これにて、おサラバです!!」

そう言い残すと、怪盗魔人は再び煙と共に姿を消し――そのまま、逃げ去っていった。

後には、怪盗魔人が落とした帽子だけが残されていた――。

「――と、いうわけなんですよ」

回想が終わり、ウコンとアサギの会話に戻る。

「はあ……」

とりあえず、帽子を手に入れた経緯は分かった。

しかし、白昼堂々盗みに入るとは、変な奴と言うべきか、大胆と言うべきか。

――まあ、別に大したものは盗られてないし、それはこの際どうでもいい。

それよりも――

「そんなの、いったいどうするつもり？」

まさか、自分が被るわけでもあるまい。

そう思っている――

「こうするんです」

言いながら、ウコンはアサギの頭にその帽子を被せた。

「――って、ちょっと!？」

帽子はアサギの頭よりサイズが大きく、かなり目深に入り込んで視界を遮ってしまう。

こんな大きすぎる帽子なんて貰っても、正直、困るのだが。

すると――

「こうして帽子のつばを照準代わりにすれば、遠距離狙撃もいけるはずです！」

いきなり、こんなことを言ってきた。

「……えーっと……。ごめん、無理」

コメントに困るが、とりあえず、無理なものは無理とだけ言っておく。

むしろ、邪魔なのだが。

そもそも、帽子を被っただけで命中率が上がったら苦勞はしない。

というか、悪かったな。狙撃が下手で。

「――むう……。やっぱり、サイズ58・25cm、つばの長さ8・6cm、厚さ1・5mm、オス4歳のゾウアザラシのお腹の皮で作った帽子でないとダメですか……」

「細かつ!?!」

なんだ、その仔細すぎるデータは。誰の帽子だ。

「あゝ。でも、ゾウアザラシとか面倒ですよ。――プリニーの皮でいいですか？」

こう、顔の上半分くらいを斧でスパッとすれば――」

「そんなスプラッタな帽子はいらん!!!」

いくらプリニーでもそれは怖すぎるだろうが。絶対に被るものか。

だいたい、完全に話の趣旨が変わってるし。

と、そこで――

スズナがウコンの足にしがみついて、泣きそうな顔でウコンを見上げながら首を振る。

「あ、あの……？」

ウコンはそれに困惑するが、アサギはだいたい察した。

仕方ないなと息をつきつつも、歩み寄ってひょいっとスズナを抱き上げる。

「大丈夫。ただの冗談だから」

プリニーを切るなんて可哀想だからダメ、と言いたかったのだろう。

……良くも悪くも冗談の通じない子だ。

「あゝ。さすがに、ホントにやったりしませんよ？」

ウコンも気付いたらしく、苦笑しつつそう言うてくる。

と、そこで――

「――うん？」

遠くのほうから、何かが砂煙を上げながら爆走してくるのが見えた。

暗くてよく分らないが、月明かりに浮かぶキノコのようなシル
エットは――。

「エリндаム!？」

右腕でスズナを抱えたまま、反射的に左手をホルスターに伸ばし
て身構える。

以前、いきなりビームを撃たれた身としては、当然の反応である。
そのまま体当たりされたりしないよう、速やかに進路上から退避。
ウコンもそれに倣うように、反対側へと退避する。

そしてすぐに、相手をはっきり視認できる距離にまで間合いが近
づいた。

――やはり、エリндаムだ。

どうやら、相手もこちらに気付いたらしい。

いつでも動けるように、腰を落として身構える。

そして――

――何事もなく、エリндаムは通り過ぎていった。

「……ふえ？」

予想外の反応に、思わず固まってしまう。

後ろを振り返ってみるが——戻ってくる気配はない。

「……なんだったんでしょね。いったい」

「……さあ……」

なんとも拍子抜けである。

——まあ、何もないに越したことはないのだが。

首を傾げつつも、アサギはウコンと合流すると、改めて帰路についた。

＊

ホテル跡地——。

入浴を済ませたアサギたちは、自分たちのコテージへと戻って着

替えていた。

「――よっ、と」

スズナの着替えを手伝い終えたアサギは、スズナの巫女装束一式を壁に掛けると、自分も着替え始めた。

スズナは未だにアサギのパジャマを代用していたが、それは仕方がない。

――百花殿には、ローゼンクイーン商会の支店の1つがある。

大抵のものはそこで買えるし、無かったとしても発注が可能。

直接見たことは無いが、ステージ衣装もここを通して発注していたのだろう。

商魂逞しい彼らは、ここホテル跡地にも出張所を派遣しており、日用品程度ならそこで手に入るのだが――

規模の小さい出張所では、衣類はそれほど取り扱っていなかった。

それでも多少なりと品揃えがあったのは、さすがローゼンクイーン商会というべきか。

しかし、残念ながらスズナに似合いそうな物が無かったのだ。

当然ながら、子供サイズの巫女装束なんてピンポイントすぎるものも無かった。

——何故か、普通サイズの巫女装束はあったのだが。

ともあれ。

買うのなら、ちゃんとしたのを買ってあげたい。

これが支店なら発注ができるのだが、出張所ではそれもできないらしい。

店員曰く、出張所はあくまでも臨時のものにすぎないので、予約や発注といった日数のかかるような業務はできないとのこと。

無理にそういうことをすれば余計なトラブルの元であり、いかに魔界がいい加減とはいえ、商売人としてはそういったことは避けた方がいい。

言われてみればそのとおりなので、アサギとしても諦めるしかない。

——まあ、着替えの下着とかの、最低限の日用品は揃えられたし。

それに、百花殿支店のほうに話は通してくれるとのことだったの
で、今はそれでよしとするべきだろう。

とはいえ——

「早いところ、百花殿が直るといいんだけど……」

やはり、早いうちに必要な物はちゃんと揃えてあげたい。

着替え終わり、近くの椅子に腰掛けながら小さく溜め息をつくと

――

「あれ？ アサギさん、聞いてないんですか？」

先に着替え終えてベッドに腰掛けていたウコンが、意外そうな声をあげた。

「百花殿、直ったそうですよ」

「ええッ!!?」

そんな話は聞いていない。――いったい、いつの間に？

聞いてみると――

「今日の夕方頃に――」

ウコンはそこまで言いかけて、ああ、と納得したように頷いた。

「その時間、コンサートでしたね」

それで、アサギも合点がいった。

確かに、それなら自分の耳に入らなくても仕方がない。

むしろ、忙しいときにそんな話を持ってこられても困っただろう。

——まあ、それでそのまま放っておかれてしまったのだろうか。

「それで、今度の休みに、皆で戻るそうです」

「そっか」

百花殿にも、当然、休日はある。

直ったらすぐ戻ることになると思っていたので、少し意外な気もしたが——

それも、すぐに思い直す。

考えてみれば、予定やら何やらのスケジュールがあって、その変更が必要になるのだから、すぐにとはいかないのも当然か。

——しかし、だ。

（今度の休みは潰れちゃうんだろうなあ……）

戻ったら戻ったで、やることはごまんとあるだろう。

せっかくの休日が丸潰れになるのが容易に想像できて、アサギは少し溜め息をつく。

とはいえ、百花殿が直ったこと自体は、素直に嬉しく思う。

と、そこで――

「――ん？」

くいくい、とパジャマの裾が引っ張られるのに気付いて、そちらに顔を向ける。

見れば、スズナが何か聞きたそうな顔でこちらを見上げていた。

「――ああ、そっか」

この子は、百花殿のことをまだ知らない。

「百花殿のこと？」

ひよいと抱えて膝の上に乗せながら聞いてみると、コクンと首肯した。

「そうね……。――立派な桜の木がたくさんある――」

職場――というのは、少し違う気がする。

――そう、どちらかといえば――

「――あたしたちの家――みたいなものかな？」

こう言ったほうが、なんだかしっくりくる。

正確に言えば、住み込みで働いているだけ、ということになるの
だろうが――。

記憶を無くしてからというものの、アサギはずっとそこで暮らして
きたのだ。

遊ばれることも多いものの、とても良くしてもらっている。

――やはり、百花殿は“家”だと思う。

それはアサギだけではない。

きっと、他の皆にとってもそうなのだろう。

そんな風に思いを巡らせていると――

「そうそう。こんな話を知っていますか？」

唐突に、ウコンがスズナに向けて、身を乗り出しながら話を切り
出してきた。

「……………？」

スズナはもちろん、アサギも何事かと思って聞いていると――。

「友達の友達から聞いたんですけど……。
百花殿の地下には御先祖様のミイラが隠されていて――」

そこで、いったん区切り――。

「満月の夜になると、そこから幽霊が出てきて――
それに見つかってしまったら、頭からパクツと食べられちゃうんですって!!」

わざとらしく、おどろおどろしい仕草でスズナに迫り寄る。

「……………!!」

それに怯えたスズナは、半泣きでアサギにしがみついていた。

「って、こら!! 怖がらせるな!!」

いったい何を言い出すのかと思えば。

どいつもこいつも……。本当に油断も隙もない。

「ほら、大丈夫。ただの作り話だから」

優しくスズナの頭を撫でながら、なだめる。

――いや。確かに百花殿には、満月の夜に暴れるのが若干1名いるのだが。

まるっきり嘘だと断言できないあたりが困る。

「そもそも、『友達の友達』なんて、いないから」

怪談やら七不思議やらの導入部の、いわゆる常套句である。

アサギはそれを教えるつもりで言ったのだが……。

スズナは目の端に涙を浮かべたまま、きょとんとした顔でアサギを見上げると――

アサギを指差して、小首を傾げた。

「え、えーっと……」

アサギはその仕草に戸惑いながらも――何を言いたいのか察する。

「う、うん。そりゃあ、まあ。あたしは――友達、だけど……」

やはり、そういうことを言葉にして口に出すと気恥ずかしい。

本人の前だから余計に。

「……改めてそう言われると――なんていうか、照れます、ね。」

しかし、言われたウコンも気恥ずかしいのは同じだったようだ。

互いに少し頬を赤らめたまま、妙な沈黙が場に流れる。

気まずいのは違うが――なんだか、互いに話しかけにくい。

「と、とにかく！」

その変な空気を払拭するように、アサギは話を戻す。

「この子で遊ばないでよ。真に受けるから」

「あ、あはは……。すみません」

ウコンは気まずそうに謝りながら歩み寄ると、スズナの頭をよしよしと撫でて――

「なんていうか、妹ができたみたいで、つい……」

その小さな身体を、ひょいと抱え上げた。

「あのね……」

いっぽう、アサギは呆れて片手で頭を抱える。

ブルータス、お前もか。

ウコンといい、皆といい、魔界の住人には困ったものだ。

フォローするこっちの身にもなってほしい。

――と、そこで、ウコンの様子がおかしいのに気付く。

スズナを高く抱え上げたまま、その顔をじっと見上げている。

持ち上げられっぱなしのスズナも困惑しているようだ。

「……どうしたの？」

「いえ……」

言いながら、そのままの体勢でベッドに腰掛けると、仰向けに寝転ぶ。

「……何か忘れてるような気がするんですけど……思い出せないんです」

うーんと唸りながら、ひとしきり首を捻ると――

「……なんなんでしょう？」

首だけこちらに向けて聞いてくる。

その姿に既視感を感じるが――そんなことを聞かれても困る。

「あたしに分かるわけないでしょ」

「ですよー」

そんなやり取りを交わしている間も、スズナは宙に持ち上げられたまま。

困っているから下ろしてやれ。人形じゃないんだから。

「まあ、大事なことなら思い出すでしょ。そのうち」

「……それもそうですね」

言われ、あっさりと思案を打ち切って頭を切り替えると、身体を起こした。

元々、あれこれ考えるタイプではない。

「さて、と。――それじゃ、ちょっとどいて」

「あ。はい」

少し早いがベッドに入る。

中央にいたウコンが横にずれながら布団に入ると、アサギはその横に入る。

そして2人の間に、スズナがちょこんと入り込んだ。

――アサギとしては、最初は、正直この配置には不安があった。

ウコンは寝ぼけて人を絞め殺しかけた前科持ちだから。

理屈だけで言うなら、自分が間に入ったほうがいいだろう。

だがそれは、暗に『危ないからこの子に近づくな』と言うのと変わらない。

——そんなこと、できるはずがない。

ウコンだって、スズナのことを可愛がっているのだ。

それを拒絶するようなことを、していいはずがない。

——まあ、気をつけるように釘は刺してあるし、それだけでいいと思う。

それが正しい方法なのかどうかは、分からないけれど。

「……難しいなあ……」

「？ 何ですか？」

つい口に出してしまい、ウコンとスズナがこちらに顔を向ける。

「ううん。こっちの話」

それを適当にごまかすと、アサギは力を抜いてベッドに身を沈めた——。

——同時刻、魔王城——。

『女の子同士で布団に入るときには服を脱ぎなさい！
はあゝゝ、やわらけえゝやわらけえゝ』

『アホか』

雑用のプリニーたちの一部が、TVの前に集まってアニメの再放送を見ていた。

画面の中では、別魔界のとある魔王によく似た声をした黄色い珍生物が、やりたい放題をしている。

ちなみに、魔王城のプリニーに、仕事の合間の休憩時間などというような常識的なものは与えられていない。

なので、彼らは自主的に休憩を取っていた。

――要するに、サボりである。

そんな中――

「……大丈夫ッスかね。こんなことしてて」

気の弱い1匹のプリニーが、誰ともなしに呟いた。

「もしもエトナ様にバレたら……ッス」

当然、おしおきがあるに決まっているのだろうが――

彼らの上司は、基本的に容赦がない。

そのときの機嫌次第では、恐ろしいことにもなりかねない。

「大丈夫ッスよ」

しかし、別のプリニーがそれは杞憂と告げる。

「この時間なら、ちょうど裏番組を見ているはずッスから」

そこに、さらに他のプリニーが合いの手を入れた。

「確か『愛憎成金ヴェルダイム』ッスね」

ちょっとした曰く付きの番組である。

元々、『愛憎千金ディスガイア』というゲームが発売される予定があったのだが――。

その内容がとある魔神の逆鱗に触れ、発売中止と相成った。

その後、メーカーはそのシナリオをMHKへと売却。

主要な登場人物を中心に各設定を変更し、それに合わせてストーリーに多少の修正を加えてドラマ化したものが、『愛憎成金ヴェルダイム』である。

――それはさておき。

「それならいいんッスけど……」

言いながらも、気弱なプリニーはどこか釈然としない様子でいる。自分たちの上司は、そんな甘い相手だっただろうか？ と。

――後に、彼の危惧は正しいものだったと分かるのだが、それはまた別の話である。

「気にしすぎッスよ。――あゝ。オイラも蜂蜜ヨーグルトプリン食いてーッス」

「それより温泉ッスよ。もち混浴で」

「下呂温泉は区分けされてたッスからね」

「……そういえば、百花殿には客をもてなす大浴場があるそうッスけど」

「うわ何ッスかそれ。超行きてーッス」

「ムチムチの女の子に癒されたいッスね。ツルペタは見飽きたッス」

楽観的なプリニーたちが不毛な会話を交わす中――。

1匹の茶色いプリニーが、その集団から離れていった。

そして、開けた場所まで出て夜空を見上げると、ポツリと呟いた。

「……ウコン……」

彼の名はターメリック。

魔神スイーツ男爵を仇として追い求めていた、元・戦士の男。

ウコンの実の兄でもある。

百花殿と聞いて、妹のことを思い出してしまった。

プリニーになってしまっただけから、諦めずに打倒スイーツ男爵を目指していたが――

あるとき偶然に、可愛い妹が遊郭なんぞで働かされていると耳にした。

すわ一大事と百花殿に潜り込んだものの――

凶暴な女ガンナー（※ターメリック視点）の手にかかって返り討ちに。

脆弱なプリニーの身では、生前のときと同じようには戦えないと痛感。

妹のことにしろ、仇討ちにしろ、元の姿に戻らないことには話に

ならないと思ひ直す。

——元の姿に戻るためには、罪科に応じた財貨が必要。

そのため、魔王城で働くようになったのだが——

当然ながら、一朝一夕にはいかない。

星空を見上げながら、今も遊郭で働かされているであろう妹のことに、思いを馳せる。

『ど、どうぞ……』

着崩した和服を着たウコンが、慣れない手つきで客の男にお酌をする。

——本物より3割ほど胸が大きいが、これはターメリックの妄想である。

実際にはウコンは厨房担当なのだが、それをターメリックが知る由はない。

なので、遊郭で働くとはこういうことだと思っけていても無理はない。

『あゝら。可愛い娘じゃなあゝい』

ウコンの相手は、巨大な頭部を持つモーブ族の魔神——スイーツ男爵。

——本物より3倍ほど凶悪な面構えをしているが、これはターメリックの妄想である。

そもそも、スイーツ男爵は重度を乗り越して異常なレベルの甘い物好きである。

遊郭に使う金があるなら、その分を甘味につき込むだろう。

ともかく、妄想の中の遊郭で話は進む。

『あぁっ。困ります！』

『よいではないか、よいではないか』

酒に酔ったスイーツ男爵に押し倒されるウコン。

壁に映る2人の影。

スイーツ男爵の影が、ウコンの影に覆いかぶさるように重なっていき——

室内に飾られた牡丹の花が1輪、ぽとりと落ちた。

そして……——。

「うおおおおおおッ！！！」

力の限りの慟哭が、魔王城に響き渡った。

城全体がビリビリと震え、窓ガラスに次々と亀裂が走る。

「許さん！ 許さんぞおお！！ スイスイイツ男爵ウウウウツ
！！！！」

——くどいようだが、先ほどの場面は全てターメリックの妄想である。

当人のまったく与り知らぬところで、ありもしない恨みを買うスイーツ男爵。

実に迷惑な話である。

むしろ、こんな妄想をしたことが妹に知られたら、ブン殴られても文句は言えまい。

——もつとも、その妹からは素で忘れ去られていたりするのだが。

と、そのとき——

「うるせええええええッ！！！」

少女の怒鳴り声と共に、城中に数多くのプリニーが雨あられと降り注いだ――！

投げると爆発する性質を持つプリニーを用いた、無差別絨毯爆撃。

――通称、プリニー落とし。

魔神エトナの怒りである。

「肝心なところが聞こえなかっただろうがああああッ！！！」

姿は見えないが、怒鳴り声だけは城中に響いてくる。

どうやら、ターメリックのせいでドラマの音声が聞こえなかったらしい。

実に間の悪い男である。

が、そのとぼっちりを食った他の連中は堪ったものではない。

「ヒィィィ！ お助けッス！！！」

「誰ッスかぁー！？ 怒らせたのはー！！！」

「うおおお！？ ピッツアが！！」

夜食に食べようと思ってたバーニーズのテリヤキピッツアがあああああ！！！！」

「落ち着いてゴードン！ 今は避難するのが先よ！
それと、夜食にそんなの食べてたら太るわよ！？」

「ピロピロピロ……！ エトナ オコッテル！ キケン キケン
キケン！

ツイデニ ゴードン ノ タイシボウリツ モ キケン キケン
キケン！」

瞬く間に、阿鼻叫喚の地獄絵図と化した魔王城。

魔神と親しい堕天使がなんとかだめるまで、それは続いた――。

＊

To Be Continued

＊

Track 3 『炎のオーバードライブ』 - B (後書き)

怪盗魔人みたいに、独特な言い回しをするキャラは意外と苦労します……。

パイナップルの木については独自解釈というか、独自設定です。ステージの背景にある植物が元ネタです。

プリニーが見ていたアニメは『ニンジャシノブ伝』の9話です。Aパートが温泉の話でした。

ゴードンは『プリニー』には出てきませんが、ジェニファーとサードデイがいるなら彼もいるはずだと思ったので。

『プリニー』では、『バーニーズのテリヤキピッツァ』は魔界でも手に入るみたいです。

(アサギウォーズのシュバルツから入手)

次回の更新は4/23の予定です。では。

Track 3 『炎のオーバードライブ』 - C

百花殿の休日――。

かねてよりの予定通り、魔海での営業に参加していた面々は、復旧の完了した百花殿に戻るべく行動していた。

前日の営業を終えた深夜組みが仮眠を取っている間に、残りの皆でホテル跡地の食堂や浴場などの片付けにとりかかる。

こうしないと、深夜組みがぶっとおしで働くことになってしまうことになるので、これは当然の措置だろう。

まず、ホテル跡地の主要施設の片付けを済ませる。

深夜組みが起きたら、全員が私物の片付けを済ませる。

その後エリアへ移動し、今度は全員でそちらを片付ける。

そして、そこから直帰することになっていた。

「――よいしょっと」

食堂の片付けを手伝っていたアサギは、食料の入った段ボール箱を抱えて立ち上がる。

——ちなみに、服装は白いほうのコートである。

人海戦術で全部魔力の玉に変えてしまえば楽だろうが、そういう訳にもいかない。

プリニーやモーブもそうだが、魔界の住人にはいい加減な連中が多い。

見た目が似通う魔力の玉を『後で分ければいいや』とばかりに、あれもこれも一緒くたにしてしまうことは火を見るよりも明らか。

今は楽になっても、後で余計な混乱が起きること必至である。

——まあ、どのみちアサギにはできないのだが。

隣では、スズナが同じ段ボール箱を頭上に掲げるようにして持ち上げていた。

身体が小さいから、普通に抱えると前が見えにくい上に、バランスがとれないのだ。

「大丈夫？」

気になって声をかけてみるが、スズナはなんでもないかのようにコクンと首肯する。

——どうやら大丈夫そうだ。

と、そこに、ウコンが声をかけてきた。

「それじゃ、行きましようか」

両手に1つずつ、丈夫なビニール紐で縛った段ボール箱を提げている。

ウコンの怪力ならもっと大きくても平気そうだが――

大きくしすぎると後で他の奴が持てないので、こんなものだろう。

「うん。――さ、行こ」

頷いてスズナを促すと、アサギたちは3人連れ立って外に向かった。

外に出るとすぐに、大きなコンテナを牽引した、赤く四角いトレーラーが目に入った。

モーブやプリニーたちが、荷物の積み込みを行っているのが見える。

「あそこに持っていけばいいみたいですね」

「うん」

荷物を抱え、アサギたちもそちらに向かう。

そして――

「結構、大きいですね」

近づいてみると、思った以上に大きいものだと分かる。

「……でも、ちょっと大きすぎない？」

ここの荷物の他にも、アリアの荷物も積み込まなければならないのだろうが――

それにしても、大きすぎる気がする。

そこに――

「それでもないッスよ」

1匹のプリニーが近づいていて、アサギの疑問に答えた。

「オイラたちはコレに乗って帰るッスから」

「……あ、うん。そう……」

なんでもないかのように言ってくれたが、アサギとしてはコメントに困る。

なんというか、荷物と同列扱いなのか。

それでいいのか、お前たちは。

——まあ、当人たちは気にしていないようではあるが。

「……それにしても……」

こんな四角い、赤いトレーラーなんて珍しい気がする。

「そういえば、これ、どこのトレーラー？」

スズナから荷物を受け取っているプリニーに聞いてみる。

少なくとも、百花殿の所有でないことは確かだ。

まあ、大方どこかから借りたのだろうが。

「さあ？ バイトで雇ったそうッスけど」

「バイトって……」

少し予想と違っていた。

しかし、レンタルするのとバイトとはどちらが高いのだろうか？

——いや。それは自分が考えることではないか。

そんなことより、さっさと済ませてしまおう。

「えーっと……」

プリニーでもモーブでもいい。

荷物を渡すべく、手の空いている相手を探そうとした、そのとき。

「あ！ アサギさん、後ろ！！」

「ふえ？」

突然のウコンの声に、振り向こうとして――

「あっち行くエリ！！！！」

「んなぁッ！！？」

いきなりドスンッと、後ろから何かが激突してきた――！

荷物を抱えていたせいでバランスを大きく崩し、思いっきり前のめりに倒れてしまう。

「い、痛た……」

痛みを堪えながら、そのままの体勢で後ろを振り返ると――

砂煙を上げながら、爆走して逃げ去るキノコの後姿が見えた。

「あ、あんのキノコお……！！」

エリンダムか。

咄嗟に身体を起こそうとして――

「痛っ……!?!」

右の手首に痛みが走り、反射的に押さえる。

荷物を抱えたまま倒れこんでしまったので、少し捻ってしまったらしい。

――その隙に、エリンダムは遠くに逃げ去ってしまっていた。

既に、狙撃が苦手なアサギに当てられる距離ではない。

「あのキノコ……あたしに何か恨みでもあるのか……!」

右手首を押さえつつ、悔しげな視線を向ける。

――と、その右手首に、そっと小さな手が添えられた。

目を向ければ、スズナが心配そうな顔でアサギの右手首を見つめていた。

「大丈夫ですか?」

ウコンもひょいっとばかりに覗き込んでくる。

「ん。平気、平気」

ウコンに返しつつ、スズナの頭を軽く撫でながら立ち上がる。

回復魔法なんて使えないが、闘気の身体強化ならできる。

魔法のような劇的な効果は得られないが、自然治癒力も普通の人間より高められる。

なので、ちょっと捻った程度ならすぐに治まる。

——もつとも、この程度は魔界なら誰でもできるので、何の自慢にもならないが。

「——まったく。この忙しいときに……」

嘆息するアサギに、ウコンも続ける。

「初めて会ったときのこと、根に持ってるんでしょうかね」

「……それって、そもそも向こうの勘違いじゃない」

とんだ大迷惑だ。

そう続けながら、再びアサギが嘆息すると――

『私にいい考えがある。変装して相手の目をごまかせばいい』

いきなり、男の声での提案が上がった。

「!？ 今の誰!？」

慌てて周りを見回すが、それらしい人物はいない。

トレーラーの運転席にも、誰かがいる気配はない。

「え……つと……。今の、あなた？」

先ほどアサギが落とした荷物を拾っているモーブに尋ねてみるが

「知らないブー」

あっさり否定して、そのまま荷物を持っていつてしまった。

「……そりゃそっか」

そもそも声が違う。

と、そこで――

「でも、案外いけるかもしれませぬ。変装。

――アサギさん、この前の夜のこと、覚えてます？」

ウコンがなにやら謎の声に賛同の意を示しながら、聞いてきた。

「この前って……？」

そんな曖昧なことを聞かれても、分かるわけがないのだが……。

「ほら。アサギさんが初めて黒いコート着た日です」

「――ああ」

そう言われて、合点がいった。

そして、思い出す。

「そういえば……」

あの日もエリンダムに遭遇したのだが、あのときは何もされなかった。

あのときとの違いといえば――

「もしかして、服の色が違ったから……?」

「それに、帽子も被ってました」

ウコンが補足する。

――なるほど。

変装というほどのことではないが――確かに、着替えるのは有効かもしれない。

また、あのキノコに邪魔されないとも限らないし、そうなら堪ったものじゃない。

「――よし。じゃ、やってみよっか」

どうせ、ちよつと着替えるだけなのだから、大した手間でもないし。

そうと決まれば、話は早い。

いつまでも、余計な時間を食っているわけにもいかないのだから。

「じゃ、行きましようか」

ウコンがスズナを肩車しながら促してくる。

それに頷くと、アサギは2人と一緒に駆け足で戻っていった。

コテージ地帯に戻ると――

「――あら？ アサギちゃんたちじゃない」

小さなあくびをしながら、ふよふよと浮遊していたサキュバスと遭遇した。

手にはポーチのようなものを手にしている。

——しかし、今は深夜組みは仮眠時間だったはずだが……？

「寝てなくていいの？」

聞いてみると――

「ちょっと、みんなで狩りをね」

言いながら、ポーチをアサギたちに見せるように持ち上げた。

――要するに、ゲームか。

ポーチの中身は携帯ゲーム機だろう。

アサギもウコンも、知名度の高い狩りゲーのことは知っている。

実際にやったことはないが。

ゲーマー同士で集まって遊んだ、その帰りといったところか。

「……………？」

ウコンの頭の上でスズナは首を傾げているが――まあ、無理もない。

この子はゲームをやったことはないし、あれで「狩り」なんて言われても分かるまい。

それにしても、だ。

睡眠時間を削ってまでゲームをするとは、かなりのハードゲーマーのようだ。

「それより、そっちはどうしたの？」

聞き返してきたので、ざっと簡単に説明する。

「――ふうん。そりやまた面倒なことになってるわねえ……」

サキュバスは眠そうな目のまま、それを聞いていたが――

「――あ！　そうだ！」

不意に、何かを思いついたように顔を上げた。

「ちょっと待っててね」

そう言い残すと、自分のコテージに向かって飛んでいく。

そして、なにやらどこかで見たようなスプレーを持ってすぐに戻ってくる――

「それっ♪」

サキュバスの掛け声と同時に、小さな無数のコウモリがアサギの周囲を取り囲み――

直後、布に変化して、アサギの首から下を包み込むようにしてく

るんだ。

「ちょ、ちょっと?」

アサギは動揺するが、サキュバスはお構いなしにスプレーを手にすると――

「ちょっと目を閉じててね」

アサギの頭に、そのスプレーを吹き付けてきた。

「うわっぷ!? けほっ! けほっ!」

「ほら。手元が狂うからじっとして」

スプレーにむせるが、言われて仕方なく、とりあえずおとなしくする。

だが、目を閉じているので何をされているのか分からない。

少しすると、スプレーの音と感触は止まる。

続けて、濡れタオルみたいな物で顔を拭かれると――

「よし。完了♪」

言いながら、サキュバスはアサギをくるんでいた布をコウモリに戻して取り払う。

「……なんなのよ、もう……!」

いったい何をしたというのか。

目を開けて不満気な視線を向けるが——そこで、別の視線に気付く。

「うっわ。違和感バリバリですね」

「……………!」

見れば、ウコンとスズナが驚いた顔でこっちを見ている。

……本当に何をされたというのか。

「はい、鏡」

そこで、サキュバスが手鏡を手渡してくる。

それを覗き込んで——

「なんっじゃこりゃああああああッ!!?」

アサギの絶叫が響き渡った。

——金色。

アサギの黒髪が、金髪になっていた。

思わず、頭に手が伸びる。

——さっきのは、カラスプレーか何かだったのか。

塗りは雑で、ちらほらと見える黒いままの髪が、実に悪目立ちしている。

「ふふっ。驚いた？」

含み笑いをしながら、サキュバスは手にしたスプレーを頭上に掲げた。

「『速乾性ヘアカラスプレー・ぬりぬりくん』くく！」

「——って、それ……！」

見覚えがあると思ったが——確か以前、色変え屋のリツ子が売っていたスプレーか。

どうやら、あの場以外でも商売していたらしい。

——あと、そのアクションは二番煎じだ。

「なぐんだ。知ってたの」

「『なぐんだ』じゃないッ！！」

いきなり何てことをしてくれるのか。

「ああもう……。これ絶対変だって……」

鏡の中の自分を見ながら、金髪になってしまった頭を抱える。

アサギとて、自分の身なりを気にするぐらいには、女の子である。

少なくともアサギは、自分に金髪が似合うとは思っていない。

シャンプーすれば落ちると言っていたが、さすがにそんな時間はない。

「ゴメンね」。でも、変装するならこれぐらいやらないと」

手を合わせつつも、そう言ってくる。

アサギとしては、ここまでするつもりはなかったのだが。

「はぁ……。もう、いいけど」

済んだことは仕方がない。

半分くらいは厚意でやってくれたのだから、そう怒れもしない。

——半分くらいは遊ばれてるのかもしれないが。

諦めて、深々と溜め息をつく。——どうせ、洗えば落ちることだ

し。

「あと、コレ」

言いながら、サキュバスは胸の谷間からメガネを取り出して、アサギに差し出した。

丸みを帯びた、楕円形のフレームのメガネなのだが……。

——何故わざわざそんなところに入れる。

受け取ったメガネが人肌に温もっているのに、微妙な気分になる。

「……うん？」

よく見れば、度が入っていないことに気付いた。

いわゆる伊達メガネらしい。

しかし、何故こんな物を持っているのか。

「メガネっ娘がいい、ってお客さんもいるのよ？」

「……ああ、そう……」

一応、納得した。

また、なんとも言えない微妙な気分になりはしたが。

と、そこで――

「アサギさん、そろそろ急がないとマズいんじゃないですか？」

ウコンに言われ、気付く。

「うわ……。やばいかも……。！」

確かに、少し時間をかけすぎた。

「ちよっとお邪魔しすぎちゃったみたいね。――それじゃ、アタシは行くわね」

そう言い残すと、サキュバスは軽く手を振りながら飛び去っていった。

それを見送る暇もなく――

「急がないと……。！」

アサギたちも慌てて、自分たちのコテージへ向かって走り出した。

*

黒のコートに着替え、伊達メガネをかけたアサギは、再びホテル跡地の片付けに従事。

当然、服装や髪については皆からいろいろ言われはしたが――

意外なことに、特にトラブルにはならなかった。

また、わざわざ着替えた効果があったのかどうかは分からないが、エリンダムの邪魔が入ることもなかった。

そして、ホテル跡地の片付けは全てつつがなく終了。

予定通り、全員でアリアに向かっていった。

プリニー・モーブたち雑用組みが乗り込んだコンテナトレーラーは一足先にアリアへと向かったが、残りの者たちは徒歩である。

自然と数人ごとのグループに分かれ、とりとめもない会話を交わしながら歩いていく。

アサギも、ウコンとスズナの2人と一緒に歩いていたが――。

「――ん？ あれは……」

進む先に、見覚えのない魔物がいることに気付いた。

ほぼ球状の大きな頭部に、それに見合わないひよろつとした細い胴体を持つ魔物。

確か、ボンバーヘッドだったか。

空の荷車を引っ張っているように見えるが、よく見れば、持ち手の部分が自分の頭部としっかりドッキングしているようだ。

そんな、かなり変わった風体をしたボンバーヘッドは、先に行くグループと少し話しては分かれ、また別のグループと話しては分かれを繰り返しているように見えた。

——別に、ナンパというわけでもなさそうだが……。

そうこうしているうちに、そのボンバーヘッドはアサギたちのところにもやってきた。

「よう！ ちょっといいか？」

「……なに？」

何の用かは知らないが――。

前に行くグループと話していた様子を見ても、悪い雰囲気ではなかったし、まあ、話を聞くぐらいはいいだろう。

「この辺で、変わった戦車を見たことねえか？」

「変わった戦車って……」

アサギたちの脳裏には、スズナが乗ってきたアイゼンクロイツが思い浮かんだが――

「1本ツノの、ドクロみてえな顔がついた戦車だ」

続くその言葉で、それは違うと分かる。

「知らないけど……」

「それがどうしたんですか？」

何の気なしに、聞いてみる。

「いや、オレの舎弟がそいつに酷い目に遭わされてな……。ま、仇討ちだな。

どうやら、ここいら辺にいるらしいって話を聞いてな」

「はぁ……」

なんとも嫌な話だ。……何事も起こらなければいいのだが。

「でも、あなたの方こそ変わった格好ですけど。何なんですか？」

「——ああ、コレか。本業は運び屋なんぞな」

ウコンの齒に衣着せぬ問いかけにも、気にした風もなく答える。

運び屋……魔界運送の個人経営版みたいなものだろうか。

——まあ、なんにせよだ。

彼の言う戦車のことが分からない以上、ここに居ても仕方がない。

そもそも、こんな所で話し込んでいる暇などない、というのもあるのだが――。

何より、激しく嫌な予感がする。

速やかにここから離れないと、碌でもないことに巻き込まれそうな、そんな予感が。

「それじゃ、あたしたちは――」

さっさと話を切り上げようと口を開けかけたそのとき、コートの裾をくいくいと引っ張られて、言葉が止まる。

「……どうしたの？」

コートを引っ張ったスズナのほうに顔を向けて聞いてみると――

「……………」

スズナはアサギのコートを掴んだまま、ある一点を指差した。

アサギたちが、示す方向に目を向けると――

少し離れた崖の上に、1本ツノを持つドクロのような顔をした戦車がいた。

「げ」

……手遅れだったか。

実に嫌そうな顔を浮かべるアサギを尻目に――

「デメエ！　そこを動くな！！」

いきり立ったボンバーヘッドは瞬時にボール型にトランスフォームすると、荷車を引っ張りながらその戦車に向けて急発進していった。

一方、ドクロ顔の戦車――バクチーDXは……。

崖の上から、アサギのことを凝視していた。

今のアサギの格好は――

着色されてしまった金髪に、黒いコート。そしてついでに伊達メガネ。

その姿は――

『――MARrrrJOOoORAaaaaaM!!!!』

バクチーの愛妻、マジヨラムに良く似ているといえた。

無論、それはカラーパターンが似ているという程度のものでしかなく、マジヨラム本人のことを知る者からすれば、よく見なくとも別人だと分かるはずなのだが――

そのマジヨラムに頭の中まで改造され、置いていかれて放置され、残った写真も失って暴走したバクチーに、そんな区別は付かなかった。

瞬時に最高速度でキャタピラが唸りを上げて、崖の上から一気に飛び出すと――

ボンバーヘッドの頭上を飛び越えて、砂浜にドスンと着地。

直後、唸りを上げるキャタピラが一瞬にして周囲に派手に砂を撒き散らし――

『マアアアジヨオオオラアアアアムツ！！！！』

アサギに向かって、一直線に突撃してきた――！

「んなッ！？」

「えええっ？」

「……………！！」

驚きながらも、急いでその進路上から左右に分かれるようにして
退避する。

アサギとウコン・スズナの間をそのまま走り抜けていったバクチ
ーは、勢い余って砂上を滑りつつも砂を撒き散らしながらぐりりと
旋回。

再びそのドクロ顔をアサギのほうに向ける。そして――

『ボクバクチー！　ボクバクチイイイイツー！』

再度、アサギに向かって突撃してきた。

「なんであたしのほうに来るのよおおッ！！？」

叫びつつも、素早く横に跳んで避ける。

そのまま2人と合流しつつそちらを見ると、やはりバクチーは慣
性で砂の上を滑りながら、超信地旋回でアサギのほうに顔を向けよ
うとしていた。

「ッ……！！」

一緒にいたら、2人も巻き込まれる。

咄嗟にそう判断し、アサギは走って2人から離れていく。

「アサギさん!？」

その行動に、ウコンが思わず声をかけた、そのとき――

狙いを定めたバクチーが、アサギに向かって突撃を敢行した。

『マジヨラム、アイシテル!! アイシテルウウウウツ!!!!』

「あたしはマジヨラムじゃなあああいッ!!!!」

避けつつも、相手の叫びから勘違いで襲われているらしいことを理解する。

――しかも、どうやら向こうはいろんな意味で“まともではない”らしい。

よく見ると、背部の操縦席に該当する場所に、透明な半球の容器に収められた脳味噌が確認できた。

「うげ……」

いくら魔界とはいえ、さすがに洒落になってないと思う。

――そういえば、さっき『ボクバクチー』と叫んでいたが……。

確か、アリアとホテルの元オーナーではなかっただろうか？

彼に身に、いったい何があったのか分からないが――

もはや、正気ではないのだろう。

『マジヨラム！！ マアアジョラアアアムツ！！！！』

人の話を聞かないというより、コミュニケーション自体が成立していないようだ。

さすがに、少々哀れに思ったが――

いつまでも、暴れられても困る。

ワンパターンな突撃をかわしつつ双銃を抜き放ち、静かに息を吸いながら魔力の練り上げに入る。

――しかし、アサギが十分な魔力を練るより先に――

『『『いいかげんにしなさいッ！！』』』

上空から声がして、旋回しているバクチーにハート型の爆弾が次々と降り注いだ。

声が出たほうを見上げれば、リリス、サキュバス、リリムのグループたちがバクチーに向けて次々と爆弾を落としていた。

人海戦術によって、バクチーは瞬く間にハート爆弾の山に埋もれて見えなくなる。

「——って、ヤバイって!!!!」

その爆弾の多さにさっと顔を青くしたアサギは、慌てて走ってそこから離れる。

無論、他の連中も巻き添えを食うまいと蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

そして、アサギが耳を押さえながら砂浜に伏せた直後——

凄まじい轟音を響かせて、山と詰まれた爆弾が一斉に爆発した——
|!

「——ッ!!?」

強烈な爆風が頭上を通り過ぎ、その勢いでコートがひっくり返って頭の上に被さる。

それから一拍置いて、巻き上げられた砂がバラバラと降り注いできた。

——いくらなんでもやりすぎだ。加減を知れ。

砂を払いつつコートを調えながら立ち上がるが——

「うっぷ!？　けほっ!　けほっ!!!」

立ち込める砂煙にむせ返ってしまう。

手で砂煙を払いつつ、煙に包まれた爆心地のほうに目を向ける。

さすがに死んだのでは？　と危惧した、そのとき――

『M A R r r J O o o R A a a a M ! ! ! !』

ピンク色の閃光が煙を一気に打ち払い、その中からピンク色のオーラを纏ったバクチーが姿を現した――!

――しかも、無傷で。

「嘘……!!」

あまりの非常識に、絶句する。

どうやら、あのピンク色のオーラで防いだようだが――それにしたって、異常だ。

――それは、狂える愛のオーラ。

愛の力によって、バクチーDXは本来のスペックの限界を超える力を手にしていた。

……愛マニアの某墮天使がこの光景を見て、どう思うかは不明だが。

その場の全員が、その光景に驚いて固まっていると――

『M A R r r r J O o o R A a a a M ! ! ! 』

バクチーは狂った咆哮をあげながら、ハート型をしたピンクのエネルギー弾をでたらめに乱射し始めた――！

「――いけない……ッ！」

このままだと、皆に被害が出る。

ならば――！

アサギは右のA T Aをバクチーに向けると――

最小限の魔力の練り上げで、マジカルバレットを1発撃ち放った。

一条の魔力の帯が、暴れるバクチーの横っ面をひっぱたくが――

あっけなく、そのピンクのオーラで弾き飛ばされた。

――もつとも、あの爆発を防いだ相手に、これが効くとは最初から思っていない。

重要なのは、相手の意識をこちらに向けること——！

そして——

『——マ、ジョ、ラアアム……』

アサギの狙い通り、バクチーは攻撃をやめて、ゆっくりとアサギの方を向く。

「ほら！ こっちに来い！！！」

さらに相手を挑発すべく、もう1発撃つと同時に背中を向けて、全力で走り出す。

——何故『マジヨラム』とやらと間違われているのか、アサギには分からないが——

こうやって逃げ出せば、必ず付いてくるはず——！

とにかく、コイツをここから引き離さないといけない。

そして、アサギの狙い通り、バクチーはアサギを追いかけ始めたのだが——

『モット！ モット！！ M o t t o o o o ！！！！』

予想外の嬉しそうな叫びに、アサギは思わずっこけそうになる。

——もっと撃ってくれ、とでもいうのだろうか？

「うげ……」

コイツ、変態だったか。

嫌悪感から逃げる速度を3割ほど上げつつ、下手に手を出したことをアサギが少し後悔していると――

「乗ってきな！ ネーチャン！」

荷車を引っ張って走る球体が、逃げるアサギに併走してきた。

——先程のボンバーヘッドか。

丸くなって高速回転しているのに、周囲を知覚できたり喋ったりできるとは、なんとも器用なことだ。

「特別に運賃はサービスしといてやる！」

「——うん、助かる！」

ほとんど咄嗟にやったことだったので、深く考えてなかったが——
戦車とはいえ、車両を相手に足で走って逃げるのは無理がありす

ぎる。

アサギはありがたくボンバーヘッドの申し出を受けると――

「――よつと！」

走りながら荷車のふちに片手をかけて、器用に上に飛び乗った。

「いよっしゃあ！ 追いつけるもんなら追いついてみやがれ！！
こんのイカレ戦車がああああッ！！！！」

『アアアアイアイアイシテルルルウウウツ！！！！』

それぞれの叫びを後に残しながら――

アサギを乗せた荷車と、それを追う狂った戦車は、その場から走り去っていった――。

＊

To Be Continued

＊

Track 3 『炎のオーバードライブ』 - C (後書き)

信頼と実績の失敗フラグ、『私にいい考えがある』。
謎の声の主は多分ファイヤーではないほうの司令官。

ボンバーヘッドの荷車については、かなり苦し紛れです。

我ながら強引だとは思っていますが……。

当初はアサギが自力で走って逃げる予定でしたが、書いてるうちに無理がありすぎると思い、急遽乗り物役を追加した結果、こうなっていました。

次回の更新は4／30の予定です。では。

Track 3 『炎のオーバードライブ』 - D

逃走開始から、数十分後――

「ハッハー！ 元チーム梵婆のヘッドをなめんなよ！！」

砂浜を抜け、アサギを乗せた荷車を牽引するボンバーヘッドは、ハイテンションで海沿いの街道を爆走していた。

『ボクバクチー！ ボクバクチイイイ！！』

その後ろを、相変わらずピンクのオーラを纏ったバクチーが、狂ったように叫びながら追いかけてくるが――

その差が縮まる様子はない。

元暴走族の本領発揮といったところか。

――だが、それに乗るアサギは、ちよつとだけ後悔していた。

（こ、怖いんだけど……！！！？）

例えるなら、それは事故らない保証のないジェットコースター。

しかも荷車なので、振動もダイレクトに襲ってくる。

時々ガタン！ と大きく揺れるたびに、寿命が縮まる思いがする。

不幸中の幸いは、後ろのバクチーが攻撃してこないことぐらいか。
おそらく、アサギが乗っているためだろう。

——だが、ただ逃げているだけでは根本的な解決にならない。

「そろそろ、なんとかしないと……！」

暴走戦車を皆のところから引き離す目的は達した今、次の手を打たねばならない。

——とはいえ、とてもじゃないが反撃なんてできる余裕はない。

いつ事故るか分からない荷車に、しがみつくので精一杯なのだ。

それに、あの大爆発を防ぎきったバクチーに有効打が与えられるとは思えなかった。

防御力だけなら、いつかの巨大アガシオンより上だろう。

しかし——

「オレにいい考えがある！」

ボンバーヘッドが走りながら、自信たっぷりに断言した。

「い、いい考えて……？」

振動で舌を噛まないようにしながら聞いてみるが――

「まあ見てな……。走り屋ってのは、地の利ってのを把握してるもんだぜ！」

ボンバーヘッドは含みを持たせたように返し、すぐには答えない。

「……まあ、いいけど」

どうせ、アサギには現状でいい策は思いつかないのだ。

手があるというのなら、任せてみるとしよう。

そう判断すると、アサギはしっかりと荷車のふちを握りなおした。

――それから、しばらくして――。

「見えたぜ……！」

ボンバーヘッドの声に反応して前方を注視すると――向かう先に、灯台が見えた。

どうやら、まっすぐあそこに向かっているらしい。

――だが、灯台でいったいどうしようというのだろうか？

アサギがそう疑問を浮かべると――

「ネーチャン、ちょっと両手上げてな」

「え？」

「早くしな！」

有無を言わさぬその声に、首をかしげながらも言われるままに、荷車のふちから両手を離して軽く上げた。

その直後――。

ボンバーヘッドは、いきなり急停止した――！

「――ふえ？」

気がついたときには、アサギは宙を舞っていた。

――慣性の法則によって、急停止した荷車から前方に放り出されたのだ。

「っあッ！！？」

地面に叩きつけられる瞬間、反射的に受身を取って地面を転がる。

だが、完璧とはいかず、右肩を少し痛めてしまう。

「いっつつつ……」

右肩を押さえつつ、痛みを堪えながら立ち上がると――

『マアアアジョラアアアアムツ！！！！』

後から追いかけていたバクチーが、アサギに向かって一直線に突撃してきた――！

「――くっ！？」

身体の痛みを堪えながら、灯台のほうに跳んでそれを回避する。

――ちなみに――。

『灯台』というものは、“岬”と呼ばれる、海に向かって飛び出した崖のような地形に建てられることが多く、この灯台も例外ではなかった。

つまり――。

アサギに突撃を回避されたバクチーは、勢い余って岬から飛び出し――

「アアアアイイイイシイイイイ……」

そのまま、海に向かって真っ逆さまに落ちていった。

「……え……？」

いきなりのことに、アサギが思わず呆然としていると――

「ハッハー！　ざまあみやがれ！！」

通常形態に戻ったボンバーヘッドが笑いながら歩いてきた。

「やり方次第でどうとでもなるってモンよ！」

バクチーの落ちたほうを見ながら、いかにも自慢げにしているが

「くおらああああッ！！！！」

そこに、アサギの怒鳴り声が炸裂した。

「いきなり落とすなああああッ！！　死ぬかと思ったじゃないのッ！！！！」

当然の怒りである。

陸上ジェットコースターからいきなり放り出されたら、誰だって怒る。

というか、身体強化とかできない普通の人間なら大怪我だっただ

ろう。

「おー。悪い悪い。いちいち説明すんの面倒だったんでな」

「面倒で済ますなあああッ！！！」

なんて奴だ。これだから魔界の住人は……！

さすがに1発殴ってやろうかと思った、そのとき――。

『M A R r r J O o o o R A a a a M ! ! ! 』

狂った咆哮と共に、海のほうからピンク色の光が立ち昇った。

「……まさか……」

一瞬で、頭が冷える。

嫌な予感がしつつも、崖の下を覗き込むと――

『アイシテル！ アイシテル！ アイシテルウウウウッ！！！！』

どういうわけか、機械的なマニピュレーターの四肢を生やした姿にトランスフォームしたバクチーが、猛然と崖を登ってきていた――

―!

「「んな、バカなあああッ!!?」」

思わずハモってしまう。――が、驚いている暇はない。

アサギが急いで荷車に乗り込むと同時に、ボンバーヘッドも急発進。

2人とも、大慌てでその場から逃げ去っていった――。

＊

街道沿いにある、とある露店――。

「こないなモンでどないでっしゃろ?」

「もう一声上げるネ」

ローゼンクイーン商会には属していない個人の商店で、淡黄色の武道着を着た小柄な少女が、若いメガネの女商人を相手に買取の交渉をしていた。

長めのピンクの髪を、紐で2つに分けて頭上でアップにした、特徴的な髪型をした彼女の名は、^{ウーシャン}五香。

普段は、魔海の海中レストラン『魔海飯店』を切り盛りしている彼女だが――

たまには、こうして地上に出てくる。

地上に何かいい食材はないかと探しに来たのだが――たまたま露店が目についたので、ついでに、少し前に無銭飲食した客から巻き上げた物品を売ることにしたのだ。

五香が持ち込んだ『No. 4』と書かれた巨大なケースが、店先のカウンターに立てかけられており、その売買交渉をしているのだが――

職種は違えど、お互いに商いを行う身。

互いに落としどころを探りながらの金銭交渉は、なかなか決着を見ない。

しかし、そのとき――

鯨に酷似した姿の、翼を持つ魔物――サメドラゴン――が舞い降りてきて、五香の肩をつついた。

「どしたネ、フカヒレ――何？ こっちに変なのが走ってきてる？」

五香がフカヒレの背に飛び乗って上昇し、遠くのほうを見ると――
なにやら、4足歩行のロボットみたいなのが、周辺の物を蹴散らしながらこちらに向かって走ってきているのが見えた。

商人も、遠眼鏡でその様子を確認したらしい。

「うわ。なんやねん、アレ……」

五香の下で、実に嫌そうな声をあげた。

このままだと確実に巻き込まれるのだから、当然の反応だろう。

「……しゃーないなあ」

しかし、その割りに商人は大して慌てもせずに嘆息すると――

「ちよい待っといてんか。すぐ戻るけえ」

頭上の五香にそう一声かけて、駆け出して行った。

――いっぽう、アサギたちは――

『マアアアジョラアアアアムッ！！！』

「いい加減にしろおおおッ!!!」

相変わらず、ピンクのオーラを纏ったバクチーに追いかけられていた。

相手は4足歩行になったというのに、全然スピードは衰えていない。

むしろ、無駄に横幅が増えた分、周囲への被害は大きくなったといえる。

無論、アサギとて何もしなかったわけではない。

脚となっているマニピュレーターを狙ってマジカルバレットを撃ち込んだりもしてみたのだが、あのピンクのオーラにことごとく弾かれてしまったのだ。

こちらの攻撃が効かない以上、今は逃げるしかない。

逃げる間に、何か手を考えなければ――！

「――ん？」

だが、そうして打開策を模索しているアサギの目に、とんでもないものが映った。

「な、何あれええええッ!!?」

壁。

進行方向の街道を、万里の長城みたいな、やたらと長大な壁が塞いでいたのだ。

「ちいッ！ いつの間にこんなモンが！！？」

当然、ボンバーヘッドもそれに気付いて悪態をつく。

やむを得ず、半ば強引に左折して街道を外れ――

そのまま壁沿いに進むようにしながら、道なき道を強引に走破して行った。

そして――

『ボクバクチー！ ボクバクチー！！』

当然バクチーも、アサギたちの後を追って街道を左に外れて行った。

――それから、少しして――。

「……もうええかな」

壁の後ろから、そんな声がすると――

街道を塞いでいた長大な壁、それがゆらりと揺れて、蜃気楼のよう
に消えていった。

そして、その向こうからメガネの女商人が姿を現す。

「……あのぶんなら、戻ってくることもないやろ」

左の袖の中に“何か”をしまいこみながら、バクチーが踏み荒ら
した痕跡が続くほうに目を向け、そうひとりごちる。

「――ほなら、戻って続きせんとなあ」

先程の金銭交渉の続きに意識を戻すが――不意に、憂鬱そうに溜
め息をついた。

「にしても、やっぱ大手がおると儲からへんなあ……転職しよかい
な」

そう呟きながら目を向けた店舗、そのカウンター内の足元には、
『No. 10』と書かれた空のケースが転がっていた――。

＊

アサギたちが街道を外れてから、さらに数十分後――。

いつの間にか、切り立った岩肌の崖に挟まれた、狭い山道に入り込んでいた。

街道よりも路面の状態が悪く、荷車の振動が激しすぎて喋ることすらままならない。

「こ、ここっ！　は！　ど、の辺りっ、よ！？」

アサギは荷車にしがみつきながら、舌を嚙まないようになんとか聞いてみるが――

「知らん！　迷った！」

「ちょ――ッ！！？」

ボンバーヘッドから返ってきた無責任な一言に、絶句する。

地の利は把握してるんじゃないのか！？　とツツコミたいところだが、荷車の振動が激しすぎるせいでそれもできない。

しかし、悪いことばかりでもなかった。

『マジヨラム、アイシテル！　マジヨラム、アイシテル！！』

道幅が狭いため、両脇の岩肌にその長い脚がガリガリと引っ掛かって、バクチーの進行速度が大幅に遅くなっているのだ。

脚を引っ込めるなりなんなりして、キャタピラ走行に切り替えれば済む話なのだが、どうやらそんな理性はないらしい。

御蔭で、どんどん距離を引き離せている。

うまくいけば、このまま撒くことができるかもしれない。

帰りのことは、後で考えればいい。

今は、とにかくアレから逃げ切ることのほうが最優先なのだから。

と、そのとき――。

「お、しめた！」

ボンバーヘッドがそう言いながら、急速にスピードを落とし始めた。

「ッ!？　ちょ、ちょっ、と!?!？」

今度は放り出されまいと、しっかりしがみつきのながらも、困惑した声をあげる。

せっかく相手を振り切れるチャンスだというのに、どうしてスピードを落とすのか。

「前をよく見な！」

言われ、前方を注視する。

かなり急な右カーブになっているが——よく見れば、正面の岩肌に隙間がある。

次第に近づくことで、その隙間が、人間1人分ほどの細い道であることが分かった。

「そういうこと……！」

アサギも理解する。

あんな細い道なら、バクチーは絶対に入ってこれない。

もつとも、ボンバーヘッドの荷車も入れないが——

「よっしゃ、到着！ 付き合えんのはここまでだ！」

「OK！」

だから、ここで降りて逃げろ、ということだ。

岩肌の路地の手前でボンバーヘッドが停止すると同時に、アサギは飛び降り——

迷うことなく、その細い道の中へと駆けていった。

——そして、アサギがその細い道を走って少しすると——

ガッシイイイイン！！！！　という、派手な衝突音が後方から響いてきた。

ほぼ確信しつつ、走りながら後ろを向くと――

『マジヨラム！　マジヨラム！　マアアジョラアアアムツ！
！！！！』

予想通り、バクチーが道の入り口で引っ掛かっていた。

「――ふう……」

さすがに、もう付いては来れまい。――ようやく、一安心といったところか。

だからといって、こんなところで止まったりはしないが。

――そういえば、ボンバーヘッドは仇討ちとか言っていたはずだが……。

あのぶんだと、さすがに諦めたのだろうか。

……まあ、それは自分が考えても詮無いことか。

気が楽になったためか、思考にも余裕ができる。

――なんにせよ、今はこの道を抜けて、バクチーの視界から逃げるのが先か。

思ったより先は長そうだが——前方には、出口と思しき細い光が見える。

バクチーの狂った叫びを無視しつつ、アサギは出口を目指して駆けていった——。

＊

「……何？ あれ……」

細道を抜けた先で、最初にアサギの目に映ったのは、奇妙な建造物だった。

——と言っても、別に形が変わっている、というわけではない。

細道を抜けた先は、やや急な傾斜の、丘のように隆起した荒れた岩場だったのだが——

その頂上部分に、何かの施設を囲んでいると思しき巨大な金属の外壁が見えること、それ自体が奇妙だったのだ。

まだかなり距離があるため、遠目からでは塗装なのか地金のかは分からないが、深緑っぽい色をした外壁は、土色の岩場の中でかなり悪目立ちしている。

しかし、その雰囲気はどこか物々しく、外壁の内側から空に向かって立ち昇る大量の煙が、それを助長していた。

「にしても……あつつう……」

細道の出口に近づくにつれ、だんだんと暑くなっているような気はしてしたが――

どうやら、気のせいではなかったようだ。

というのも、岩場のあちこちに点在する小さな穴からチロチロと小さな炎が見えるし、また、いたるところにある岩の隙間から蒸気が噴き出している。

それに、この独特な刺激臭は――硫黄だろうか？

もしかしたら、この辺りは火山帯なのかもしれない。

ひとまず、コートを脱いで左手で抱えつつ、顔の汗を拭う。

と、そこで――

「……あれ？」

伊達メガネが無いことに気付いた。

……どうやら、どこかで落としてしまったらしい。

まあ、あれだけの騒ぎになったのだから、落としてしまうのも無理はないのだが……。

「あっちゃあ。後で謝らなきゃ……」

伊達メガネとはいえ、借り物を失くしてしまうとは。

顔を押さえながら、溜め息をつく。

——とはいえ、こんな場所で、いつまでもヘコんではいけない。

本当に、ここはどのあたりなのだろうか。

どうやら、思った以上に遠くへ来てしまったらしい。

……とりあえず、あの建造物のほうにでも行ってみようか、とも思ったが——

「……やめとこ」

即座に、その考えを自分で否定した。

ほぼ間違いなく、人はいるだろうが——碌なことにもなりそうにない。

——それは、予感というよりも、確信。

これ以上の余計なトラブルは御免こうむる。

とりあえず、もっと安全そうな場所に移動するべきだろう。

そう判断し、アサギが足を動かした、そのとき――

「ッ!？」

微かに、しかし鋭く空を切り裂く気配を感じ、アサギは咄嗟にその場から飛び退いた。

直後、アサギのいた場所にいくつかの手裏剣が突き刺さる。

「――ッ!？」

僅かに戸惑いつつも、コートから手を離しながら双銃を抜いたアサギの前に――

「「曲者め!!」」

黒装束に身を固めた、3人の忍者が現れた。

「……もう、やだ……」

双銃を構えつつも、アサギは心底嫌そうに呟いた。

面倒事になる前に退散しようと思ったのに……手遅れだったらしい。

――いや、ここに来た時点でアウトだったのかもしれないが。

一難去ってまた一難とは、このことか。

「ちょっと仕事をサボって抜け出てみれば……」

「うっかり隠し忘れた秘密の抜け道を見つけるとはな……」

「通りすがりの侵入者め、覚悟しろ！」

……こいつら、言ってることがいろいろおかしい。

「……通りすがりって分かってるんなら、見逃してほしいんだけど」
ツッコミどころはいろいろあるが、とりあえず、それだけは言っておく。

だが、3人の忍者は聞く耳持たぬとばかりに、巨大建造物を同時にビシッと指差した。

「「あれが星陰一族の隠し砦と知られた以上、生かして返すわけにはいかん!!」」

「お前らが言わなきゃ知ることなかったわッ!!!」

アホか、こいつらは！　そもそも、最初から出てくるな。

こいつらが出てこなければ、自分は何も知ることなく立ち去って
いたというのに。

だというのに――

「「細かいことは気にするな！ 覚悟――！」」

この3バカ忍者どもは、実に一方的な言葉と共に飛び掛ってきた。

――さすがに、かなり頭に来た。

「ふざ、けんなぁッ！！！」

ただでさえ、変態戦車に追いまわされてストレスが溜まっていた
のだ。

滞空中の3バカ忍者に双銃を向けると、怒りに任せて撃ちまくる
――！

「ぐはっ！」

「うおっ！」

張られた対空弾幕を捌ききれずに数発喰らった2人が、体勢を崩
して落下する。

続けて、弾幕を突破して斬り込んできた忍者の刀を、十手型に形
状変化させたDTDで受け、手首を返しながら押さえ込むと同時に

「ハアアアッ！！！」

A T Aが形状変化した純白の鉄塊を纏わせた右の拳で、忍者の顔面に渾身の右ストレートを叩き込んだ――！

「ぐっはぁッ！？」

文字通りの“鉄拳”による一撃をモロに喰らった忍者は、吹っ飛ばされながら、もんどりうって倒れていく。

「ふう……」

いっぽう、アサギはバカを思いつきりブン殴ったことで、だいぶ溜飲が下がる。

と、そのとき――

「「もう我慢できないッ！？」」

先に撃墜された2人の忍者が、いきなりわけの分からない叫びを上げた。

「しっかりしろ！　もう我慢できない！」

「つつこみ担当か……。俺が死んだら部屋のパソコンを何も言わずに破棄してくれ……」

「安心しろ、もう我慢できない……と言いたいところだが、違うぞ！俺は鳥になりたかった……！」

「つつこみ担当はオレだ！間違えるな……！」

「す、すまん。みんな同じような格好してるから……」

「それなら仕方ないな。俺もよく間違えるし」

「今夜のおかず一品で許してやろう。もう我慢できない」

「待てい！今夜のおかずは月に1度のハンバーグ……！それは譲れないぞ……！」

「チッ。気付いたか」

「今のは頭領が編み出した『どさくさに紛れておかずをゲットだぜの術』……！」

喧嘩の元になるから禁術として禁じられたはずだぞ……！」

「フッ……。必要とあらば手段は選ばん。それが忍というものだ」

アサギを放置してアホなやり取りを交わす3バカ忍者。

「……何？コレ……」

反応に困るといふか……もはや、意味不明。

こいつら、この暑さで脳味噌が茹だったか。

先の一撃でだいぶ溜飲が下がっていたことに加え、目の前のアホなやりとり。

すっかり毒気を抜かれてしまった。

「はぁ……」

アサギは深く溜め息をつく、きびすを返す。

もう、真面目にやりあうのもバカらしい。

3バカが馬鹿なことをしているうちに、さっさと退散してしまおう。

そう判断し、いちおう双銃を手にしたまま、先ほど落としたコートを拾いに向かう。

——だが、またしても遅かった。

「エセ科学忍法・水の龍ネーッ！！！」

エセ外人みたいな発音をした若い女の声と共に、濁流のような音が聞こえてきた。

何事かと、そのほうに顔を受けると――

頭に金髪のくのいちを乗せた、巨大な水の龍が迫ってきて――

3 バカ忍者もろとも、アサギを飲み込んだ。

「……………ッ!!?」

巨大な水の龍に飲み込まれたアサギは、さながら激しい渦潮の流れに巻き込まれたかのように、膨大な水の中でグルグルとかき回され――

やがて、水の龍が弾けるように四散すると同時に、弾き出された。

回転の勢いが付いたまま放り出されたせいで碌に受身が取れず、強かに、硬い地面に叩き付けられる。

「っあ……………ッ!!」

その衝撃で双銃を取り落としてしまい、勢い余って少し転がっていき――止まる。

頭の上からブーツの中まで、全身水浸し。

水の中でかき回されたせいでヘアカラーが洗い流され、元の黒髪に戻っていた。

「つう……!」

龍の形を成していた膨大な水が、さながら豪雨のように一気に降り注ぐなか、アサギは痛みを堪えて体勢を立て直そうとするが――

「――げほっ!! けほっ!」

ふらついて片膝をつくと同時に、むせ返ってしまう。

――少し、水を飲んでしまった。

おまけに、水の中でグルングルン回されたものだから、目が回って気持ちが悪い。

「うう……」

フラフラしながらも、片手で額を押さえる。

既に“雨”はやみ、少し離れた場所では3バカ忍者が目を回して転がっている。

今のうちに逃げたいところだが、自分も目が回っているのですぐには動けない。

仕方なく、そのままの体勢でいると――

「てんぷーらっ♪」

突然、上空から現れた金髪のくのいちが、アサギの背中にドスン！と飛び乗った。

「うあっ!!?」

下敷きにされたアサギが短く声を上げるのをよそに、くのいちは縄を取り出すと、手際よくアサギの手足を縛り上げていった。

「召し捕ったりィ♪」

両手を後ろ手に縛り、そこに足首を縛った縄をつないで海老反りの体勢をとらせると、ぐいっと縄を引いて結び目を固く締める。

「ああっ!?!」

簡易的な逆海老縛りだが――それだけで、アサギはもう動くことはできない。

「こ、このっ！　ほどけえッ!!」

身をよじるアサギの前に、くのいちは回り込んでしゃがみこむ。

「ノンノン。ワタシの弟子をこーんな目に遭わせた奴にはお仕置きデース」

言いながら、くのいちは転がっている3バカ忍者たちを指差すが――

「それやったのお前だろうがッ!!!!」

味方を盛大に巻き込んだのは、間違いなくアサギの目の前にいるくのいち本人だ。

確かに多少交戦はしたが、それにしあって正当防衛だと言いたい。

この師にしてこの弟子あり、か。

アサギがそう思った、そのとき――

「くおらああああッ！！！！ 星影えッ！！！！」

突然、アサギの頭の上に煙と共にカエルが現れ、怒鳴り声を上げた。

「~~~~ッ！！」

くのいち――星影は瞬時に耳を塞いでその怒声を防いだが、アサギはそうはいかない。

しかも頭上という至近距離で、怒声の被害を1人だけモロに受けてしまった。

「お師匠サマ、うるさいデース」

「うるさいではないわッ！ 岩中の水が無駄遣いしおって！！」

「カエルなんだから水ぐらいで騒ぐんじゃありません」

「カエルのこの身には死活問題じゃッ!!　——ってそれだけじゃないわ!

皆が迷惑しとるんじゃぞ!!　お主はそれでも頭領かッ!!!!」

「先代がまだ生きてるから無問題ネ」
モーマンタイ

「問題大有りじゃあああッ!!!!」

身動きできないまま悶絶しているアサギの上で、カエル——師匠がおかまいなしにぶんすかと跳ね回る。が——

「——お前ら!!　いい加減にしろおッ!!!!」

そんなことをやられて、アサギが怒らないはずがない。

大声を張り上げると同時に、頭を振ってカエルを振り落とす。

「おおっと。……誰じゃ?　こやつは」

軽やかにアサギの頭から飛び降りた師匠が、今更気付いたように聞いてくる。

「怪しい奴だから、とりあえず捕まえといたネ」

「あたしは、たまたま迷い込んだだけだっ!!」

だから放せ、と主張するアサギだが――

そこに、いつのまにか復活した3バカ忍者がやってくる。

「いえ、残念ながら砦の位置を知られてしまいました」

「お前らが勝手に口走ったんだろうがッ!!!」

なにか『残念ながら』だ!

身体が自由だったら、遠慮なくブン殴ってやるところだ。

A T A／D T Dを手元に呼んで短剣型にすれば、自力での脱出は可能だろうが――

今それをやっても、縄を切る前に武器を取り上げられるのが目に見える。

故に、今は我慢するしかない。

3バカ忍者を睨みつけているアサギを見て――

「はあ……。お主も災難じゃのう……」

師匠は、心底同情して溜め息をついた。

元々、この魔界はどこもいい加減なところが多く、人間界とは勝

手が違う。

忍であるはずの星陰一族もまた、その例に漏れなかったのだが――

ここ近年で、それは加速していた。

現頭領たる星影の影響からか、一族の忍たちにもはっちゃけた連中が急増。

その星影に至っては師匠に断りもなく勝手に弟子を取り、しかもその弟子に思いつきで変な名前をつけているのだが――

その弟子たちも、面白がってその名前を受け入れているという、現状。

忍として、もはや末期であるといえた。

そして、そういった連中はいつも暇を持て余している。

まがりなりにも、忍の隠し砦。

基本的に外部から隔絶しているため、娯楽が少ないからだ。

――だから、師匠には分かっていた。

砦の位置を知られたこととかは、実はどうでもよくて――

星影^{このバカ}たちは、たまたま目に付いた少女^{おもちゃ}を玩具^{おもちゃ}にしているだけに過ぎないのだと。

当の本人にとっては、災難以外の何物でもない。

——もつとも、忍砦の位置云々については、師匠も目くじらを立てるつもりはない。

たまたま迷い込んだだけの者を、責めるつもりなどないのだ。

忍としては甘いのだろうが——その点で、師匠もこの魔界の住人であると言えた。

「まったく……お主ら、ええ加減に——」

故に、助け舟を出そうとした、そのとき——。

振動と共に、ドガガガガ……ツという音が辺りに響いてきた。

「地震——じゃ、ないネ」

「……何かの掘削音じゃな」

忍の師弟が音と振動の正体を見極める間にも、その音はどんどん大きくなり——

『MA R r r J O o o R A a a a M ! ! ! ! !』

岩壁を豪快にブチ破って、唸りを上げる巨大なドリルが飛び出てきた――！

「ま、まさか……！」

聞き覚えのある狂った咆哮に、さっと顔を青くして戦慄するアサギの予想に違わず――

土煙の向こうから、ピンクのオーラを纏ったバクチーがその姿を現した。

機械の四肢は無くなっており、代わりに口から巨大なドリルが飛び出している。

――また変形したのか

というか、無茶苦茶なトンデモ変形もいい加減にしろ。

アサギが内心でツツコむのをよそに――

『』『ハッ！』『』

忍者軍団は素早く後ろに跳んで、バクチーから距離をとった。

――アサギをそこに放置して。

「お前らあああ！ あたしを置いてくなああああッ！！！」

慌ててもがくが、逆海老で縛られていれば、当然そこから動けない。

「そうだ！ 今なら——」

邪魔はされまいと、ATA／DTDを手元に呼び寄せようとするが——

「こいつ……動くぞ!？」

「どうした？」

「ほら、これこれ」

いつの間にか、3バカ忍者の1人に拾われてしまっていたらしい。

アサギのほうに飛ぼうとする双銃に紐を結んで、宙で動くのを見て遊んでいる。

「ちょ！ それ返せバカ!！」

トンボか何かと一緒にするな。

焦って声をあげるアサギだが——

『ボクバクチー。ボクバクチー。マジヨラム、アイシテル』

反対側から聞こえてくる声に、さあっと血の気が引く。

恐る恐る振り向くと――ゆっくりとだが、すぐ近くまで、バクチーが迫ってきていた。

間に合わない――！

「――ッ！」

思わず、身を固くして目を閉じる。

――しかし――。

「……………？」

何も、起こらない。

恐る恐る、片目を開けてみると――

まるで沈静化したかのように、バクチーからピンクのオーラが消えていた。

そして、ゆっくりとその場で反転すると――

『……ボクバクチー。ボクバクチー。マジヨラム、アイシテル』

相変わらぬの台詞を繰り返しながらも、自らが開けた大穴へと向かい――

バクチーは、その場から去っていった。

「……助かった……？」

バクチーの姿が見えなくなってから、アサギは大きく息をつきながら脱力する。

何故、急に興味を無くしたかのように帰っていったのかは分からないが――

当面の危機は、去ったらしい。

――アサギは、知らないことだが――

バクチーが去っていったのは、『マジヨラム』を見失ったから。

アサギはメガネを落とし、コートを脱ぎ、ヘアカラーが落ちて黒髪に戻っていた。

そうしてマジヨラムを連想させる要素が全て無くなっていたため、バクチーの標的から外れることができたのだ。

――ちなみに、かつて写真を踏み壊した、全ての元凶ともいえる星影のことだが――

マジヨラムの手によって頭の中まで改造されたバクチーは、マジ

ヨラムを愛することしかできなくなっていた。

今のバクチーにとって、マジヨラム以外の女のことなど、どうでもいい。

星影のことは、覚えてすらいなかった。

もっとも、星影のほうもバクチーのことは完全に忘れ去っていたのだが。

——ともあれ。

厄介ごとが1つ減って、安心していたアサギだったが——。

「いったい、何だったデスかー？」

「さあの……」

聞こえてきた声に、再び顔をしかめた。

——まだ、問題は残っていたのだ。

「まあ、ええわい。それはさておき……お主、どこの者じゃ」

話しかけてきたカエル——星影の師匠を、アサギはジロツと睨み返すが——

「そう睨むな。悪いようにはせんわい」

見た目に反してまともそうな反応に、少し肩の力を抜いた。

どうやら、他のバカ忍者たちと違って、話ができそうな相手だ。

「……百花殿だけど」

「ユーはゲイシャなんデスカー？」

「ち・が・う！」

いきなり割り込んできた星影に、コンサートをやっていることを説明する。

「コンサートデスカー。ワタシも行ってみたいデース」

「バカもん！ 却下じゃ却下！」

まがりなりにも頭領たる者が遊び歩いていいわけがあるか、と師匠が説教するが――

「ワタシにいい考えがありマース。

こっちが行くのがダメなら、向こうから来てもらえばいいンデース」

何をどう解釈したのか、星影はさりとんでもないことを言い出した。

「バツカもん！ そんなことが――」

「「オオオオオオオッ！！！」」

再び却下しようとした師匠の声を遮って、3バカ忍者が歓声を上げる。

元々、娯楽に餓えている連中である。賛同しないはずがなかった。

「こ、こら！ お主ら——」

師匠は、勝手に盛り上がるバカ忍者たちをたしなめようとするが

――

「そうと決まれば、さっそく先代にねじ込みに行くネ！」

「「応！！！」」

話を聞かないバカ忍者たちは、師匠が止める間もなく一瞬で砦へと駆けて行った。

「こ、こりゃ！ 待たんかお主らああッ！！」

師匠も慌てて、転移の術で煙と共にその場から姿を消す。

「……………え？」

そして、後にはアサギだけが残された。

――縛られたままで。

「お、お前らああッ！！　これほどこいてけえええッ！！！！」

慌てて身を振りながら叫ぶが、時すでに遅し。

——結局、約2時間後に3バカ忍者の1人がATA／DTDを返しに来るまでの間——

アサギはそこで、放置されっぱなしの目に遭った。

＊

破壊の跡が残る街道——

なんとか開放された後、バクチーの足跡を逆に辿ることと帰路についていたアサギは、ようやく、街道にまで戻ってきていた。

ボンバーヘッドは、結局あのままだこかへ逃げてしまったようで、再会できず。

やむなく、徒歩でここまで戻ってきたのだが……随分と時間がかかってしまった。

仕方がないこととはいえ——やはり、気が滅入る。

帰れるのは、いったい何時になることやら。

「はぁ……」

先が思いやられ、深々と溜め息をついた、そのとき——。

「アサギさーん!!」

自分がよく知る少女の声が聞こえてきて、顔を上げると——

スズナを肩車したウコンが、片手を振りながらこっちに向かって走ってきていた。

「ウコン!? スズナも!?!」

アサギが驚いている間にも、ウコンはすぐ近くまで走ってくると、急停止。

続けてスズナがウコンの肩から飛び降り、アサギのほうにとてつと駆け寄ると、ぴよんと飛びついてきた。

「おっと」

咄嗟に腰を落とし、受け止めて抱き上げると——

「……………」

とても嬉しそうに、ぎゅっとしがみついてきた。

「無事だったんですね、アサギさん」

ウコンも、どこか安堵したかのように声をかけてくる。

――2人とも、心配してわざわざ追って来てくれたらしい。

「うん。……ありがとう」

沈んでいた気持ちが、急速に和らいでいく。

こうして気にかけてくれたことが、素直に嬉しかった。

「あの変な戦車どうなりました――
って、そういうば、髪の色戻ってますね。どうしたんですか？」

「あ、ああ、うん……」

スズナを片手で抱えたまま、自分の髪をいじる

一応、気付いてはいたが、別に気にしてはいなかった。

あのときは、それどころではなかったし。

「んゝ。とりあえず、順番に話すね」

アサギはそう切り出すと、再び歩き始めながら、事の顛末を2人

に話して聞かせた。

「はぁ……。なんていうか、災難でしたね」

全てを聞き終えたウコンは、とても率直な感想を口にする。

「まったくね……」

アサギも深々と溜め息をつく——

抱えているスズナが、アサギの頬にそっと片手を添えてきた。

——どうやら、慰めようとしてくれているらしい。

「……。ん。ありがとうね」

自然と顔を綻ばせて、そっと頭を撫でる。

「……それにしても、これじゃー晩ごはんまでに帰れそうにないです……」

さすがに、もう日はだいぶ傾いてしまっている。

正確な距離は分からないが、帰れるのは早くても真夜中になりそうだ。

「なんていうか……。ごめん」

意図したものではないとはいえ、自分のことに付き合せてしまい、

アサギは少し気まづくなって謝るが――

「あ、いえ。別にアサギさんのせいじゃないですし」

ウコンは別に気にした風もなく、首を横に振った。

と、そのとき――

遠くのほうから、クラクションの音が響いてきた。

アサギたちが、そのほうを見ると――

前方から、見覚えのある赤いコンテナトレーラーが走ってくるのが見えた――。

＊

「はあ……。やっと帰れた……」

コンテナトレーラーに送ってもらったことで、アサギたちは無事に、百花殿の門前までに戻ることができていた。

時刻は、だいたい宵の口といったところか。

日は暮れて辺りは暗くなってしまうているが、夕食には充分間に合ったといえる。

「よかった……。早速ごはん行きましょう！ ごはん！」

「その前に、カラシナさんに謝らなきゃいけないけどね……」

「あう……。そうでした……」

やむをえない事情があったとはいえ、今日の大仕事を半分サボってしまったのは事実。

それについては、きちんと頭を下げないといけない。

——まあ、それはともかくとして、さっさと入るとしよう。

そう思いながら足を進めようとした、そのとき——

「……………！」

傍らのスズナが、百花殿の豪華な造りに驚いて、気後れしているのに気付いた。

おそらく、本人も気付かぬままにアサギのコートの裾をぎゅっと握ったまま、門を見上げて固まっている。

——まあ、無理もない。

自分たちも、始めて見たときはそんな感じだったのだから。

「――ほら。そんなに緊張しなくても大丈夫だから」

微笑みかけながら、アサギはスズナをひょいと抱きかかえる。

「お客さんに見えるところは立派に造ってありますけど、わたしたちの使うところは、割と普通ですよ？」

ウコンも続けてそう言ってくる。

「……………」

2人から言われて少し安心したらしく、スズナは力を抜いてアサギに身を任せてきた。

「さてと、それじゃ――」

それを確認したアサギが片手を片方の扉に添えると、それに合わせるように、ウコンが反対側の扉に手を添えた。

その意図を察したアサギが、隣のウコンと頷き合うと――

「ただいま！」

「戻りましたー！」

一緒に扉を開きながら、連れ立って門をくぐっていった――。

＊ ＊

T
r
a
c
k
—
3
『炎のオーバードライブ』
E
N
D

Track 3 『炎のオーバードライブ』 - D (後書き)

今回の話は、『ジャングルはいつもハレのちグウ』の『スキスキ
おじいさんデラックス』を元ネタにしました。デラックスつながり
で。

ダメばあさんほどの恐怖とインパクトは、どうしても出せません
でしたが……。

半オリキャラがちよつとだけ登場。

キャラはファントム・キングダムの商人です。

現在はIntro 4を執筆中ですが……。

うまくいかず、こちらも遅くなってしまうそうです……。

なので、次回の投稿は未定となります。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8473o/>

双銃の歌姫

2011年5月1日08時26分発行